

## 1 アフガニスタンへの帰国

駐日アフガニスタン全権大使としての私の任務は1987年2月13日をもって終了した。9年間の任務を終えて、私は1987年4月12日、カーブルに帰った。

アフガニスタンを留守にしていた間に実に多くの出来事が起きていた。アフガニスタンの大統領だったタラキもアミンももはやこの世の人ではなかった。ソ連赤軍はアフガニスタン全土でムジャヒディンとの厳しい戦闘に明け暮れていた。アフガニスタン前大統領のバブラク・カルマルはモスクワに追放されていた。大統領のナジブラ博士と首相のスルタン・アリ・ケシュトマンドは国と政府を共同で運営していた。

昔であれば、私はこれらの新しい指導者と会うことはありえなかった。私は彼らと会ったこともなければアフガニスタンに関して議論したこともなかった。彼らはアフガニスタン人民民主党（PDPA）の中心人物であった。それに対して私はそうではなかったし、彼らと知り合いでもなかった。

1973年から74年にかけて、私がダウド大統領の内閣で郵政通信相をしていたとき、一連の国政上の問題により私とバブラク・カルマルとの関係は悪化した。いまや、カルマルはゴルバチョフの政治ゲームの犠牲となり、スケープゴートにされてしまった。ナジブラ大統領以前、PDPAはバブラク・カルマルの強い影響下にあった。カルマル支持者の反対によってアフガニスタン問題を解決しようとするナジブラ大統領のあらゆる試みや提案は困難に直面していた。ナジブラ博士は赤軍がアフガニスタンから撤退できる条件を整えるために努力していた。このような事情から、私はソ連赤軍が撤退した後のアフガニスタンにおいて、ナジブラ大統領の反カルマル路線を支える政治指導部の一員に加えられるべく召還されたのである。駐日大使としての私の任務解除は外相アブドル・ワキルの発意になるものであった。私と彼とは旧知の間柄であった。

国民和解に向けたカルマルの10項目提案は国民の指示を得ることができず、なんの成果も残さなかった。しかし、ゴルバチョフはソ連赤軍をアフガニスタンから撤退させ、アフガニスタンの内政への関わりを止めると決意した。カルマルはゴルバチョフの政策を前進させることのできる人ではなかった。ゴルバチョフの認識ではアフガニスタンは「瀕死の重傷」であった。しかし、カルマルはアフガニスタンの革命を守るためには時間が必要

だ、と主張した。カルマルは「ソ連はアフガニスタンに介入した以上、革命勢力を最後まで支援する義務がある」と主張した。

東京を発つ前夜、ヨーロッパ、米国、日本の友人たちは、アフガニスタンでの戦闘と緊張が続いているから帰国は思いとどまるべきだ、と忠告してくれた。あるアフガン人の友人は次のような手紙をくれた。

親愛なる兄弟！

あなたは中世のイタリアの有名な文学者ダンテが書いた『神曲』を読まれたことでしょうか。その中でダンテは書いています。『この門をくぐる者は一切の希望を捨てよ』アフガニスタンへは帰らない方が賢明です。

このような親身な忠告に感謝しつつも、私は強い信念のもとついで帰国の道を選んだ。祖国のためにできることがある、と信じたからである。

帰国して最初に会い、話し合ったのは、スルタン・アリ・ケシュトマンド首相と大統領のナジブラ博士であった。ふたりは私に現下の情勢について説明した。特にナジブラ大統領は軍事情勢について語った。この会談で大統領は国民が一体となった国民的チームワークの必要性を強調し、これに加わるよう、私に要請した。

最初の職務は、文化・社会問題担当副首相であり、同時に関連省庁の監督をすることだった。党と政府の指導部の間で、私の接触範囲は日に日に拡大し強まっていった。

ソ連人アドバイザーはこの国の政務を完全に掌握しており、自由に操っていた。私にはこのようなアドバイザーに信服することはとても難しいことであった。閣僚会議に対しては相当の人数のアドバイザーがあてがわれていた。私は彼らに対し決して援助を求めなかった。実際、彼らとわれわれの間にはどんな協同もなかった。10年近く、日本という巨大な経済マシンの中で日々を過ごした私にとってソ連のさまざまな失敗を合理化するのは難しかった。アフガニスタン政府が国際社会の中でどのように見られているかを、私はこの政権のなかにいる誰よりも知っていた。

東京で同席したことのあった、ある先見の明のある外交官が私にこう語ったことがある。「あなたは若くてハンサムだ。だが残念なことにソ連がこしらえた政権の代表だ。」この言葉に私はいつも心を揺さぶられ、現政権指導部に対する反対の気持ちをけしかけられた。

東京で任務を果たしていた80年代の10年間、国連総会はソ連赤軍のアフガニスタン侵略を満場一致で糾弾し、ソ連赤軍のアフガニスタンからの即時撤退決議を採択した。ソ連は経済、政治、軍事の3方面からの圧力に直面していた。ソ連は敗北を余儀なくされ、泥沼から抜け出す方法を探らなければならなかった。こうして締結されたジュネーブ協定はソ連の体面を保つためのゲームに過ぎなかった。

しかし、ナジブラ大統領を含むアフガニスタン政府指導部はソ連政府の政策大転換を予想することができず、超大国間の政治取引のひとつとして議論していた。アフガニスタンはソ連にとって地政学的に重要であり、バルカン諸国よりも優先的に扱われるだろう、と。アフガニスタン政府指導部だけでなく、ソ連政府指導部も同じようなテーゼを支持していた。

1979年12月27日以来、アフガニスタン政府はソ連人アドバイザーによって運営されていた。アフガニスタン政府指導部は真の権力がアドバイザーの手中にあることを隠さなかった。ソ連はアフガニスタンを主要な4チャンネルを通してコントロールした。ソ連共産党(CPSU)、国防省、外務省そして国家保安委員会の4チャンネルである。これらのチャンネルの中で国家保安委員会がもっとも影響力を持っており、ナジブラ大統領を支持していた。カルマルは党員であったし、ソ連共産党から強力に支持されていた。実質上、アフガニスタンの政権の変動はソ連のそれと連動していた。

日本滞在中、私は自分自身で研究し、自分の政治的見解を決定づける次のような結論に達していた。

- ソ連は「衰退局面」に至っており、成長の潜在能力をすべて失った。
- ソ連共産党はソ連社会主義体制にあって實際上唯一絶対の存在である。大衆は暗愚と貧困にさらされている。ソ連は根本的な変革に直面している。
- 技術革新と生産分野においてソ連は西側諸国に対して約50年遅れている。そのギャップは毎年拡大している。西側諸国は工業生産のあらゆる分野で素晴らしい成果を上げている。

80年代にソ連の科学技術相マルチュクに私が東京で会ったとき、彼は日本のGNPはソ連のそれより大きいと告白した。ソ連の領土は日本の64倍ある。地下資源の観点からみれば、ソ連はガス、石油その他の埋蔵量にお

いて世界最大だと言うのに。

他方、モスクワは次の三領域からなる世界社会主義体制の主軸にされていた。

- 国内領域：15の共和国
- 第2の領域：14の社会主義国と社会主義指向国
- 外部領域：世界の共産党および労働者党

モスクワを主軸とする世界社会主義体制が生き残るためには、巨大な軍事力が必要とされた。しかしソ連の経済状況はそのような重い軍事負担に耐えられるものではなかった。ソ連は量的にも質的にも、生産分野、とくにハイテク分野では西側諸国と競争することができなかった。社会主義体制の機構には十分な生産を行ううえで質的にも量的にもあまりにも限界があった。市場指向経済と比べて、社会主義体制下では高品質のものを大量に生産することはできず、国民大衆の生活条件と生活水準を改善することはできなかった。

ソビエト体制は自壊しつつあった。常識的に市場経済と社会主義経済を調和させるのは不合理であり、同時に対立を克服するのも不可能であった。

ゴルバチョフによって始められたペレストロイカはふたつの生産方式、別の言い方では、ふたつの世界政治体制を共存させることはできなかった。

ペレストロイカや「公開性」の宣言を目の当たりにして、誰もが驚き、その背後に何があるのかを知りたがった。ゴルバチョフはソ連を崩壊させようとしているのだろうか。もし、ゴルバチョフの目的が市場指向経済の導入にあるのなら、若干の基本的な課題を達成する必要がある。まず生産方法を変更し、私有制を合法化しなければならない。次は市場における自由競争の導入である。ソ連は、遅滞なく、世界の共産党や労働者党と距離を保ち、社会主義体制に別れを告げなければならないのである。ソ連社会主義体制は根本的な変革に直面していた。

私はこのような分析や多くの国際要因を熟慮することにより、アフガニスタンの情勢や問題を検討した。このような観点から、私は近い将来ソ連は困難に直面するだろうと考えた。この点で私はナジブラ大統領に同意することができなかった。ソ連は生き残れるだろうか？ 私たちの戦略的観点は相違していた。ナジブラ大統領は聡明であり論理的に議論する人間だった。彼はソ連体制が耐えて生き残る可能性を持っていると強く信じていた。彼はソ連指導部のトップから保証を得ていたし、励まされてもいた。

私は常にナジブラ大統領がアフガニスタン問題の包括的な解決策を1日も早く見いだすよう励ました。なぜなら、ソ連はもうすぐいなくなるのだから。ナジブラ大統領は、現在の社会主義体制はドイツ、フランスその他の西側諸国のような社会民主主義体制に取って代わられるだろうと考えていた。

1979年12月27日のソ連軍の介入は、アメリカ合衆国にとって到底受け入れられるものではなかった。最終的に合衆国はアフガン紛争に公然と介入することを決意した。その結果、アフガニスタンへの介入を原因としてソ連は崩壊した。ソビエト体制崩壊の手柄は大部分アフガニスタン国民のものとされることだろう。もしアフガニスタンで、ソ連赤軍が抵抗勢力を粉砕し、ミグ25をシンダンド空軍基地に配備できれば、ソ連はインド湾の船舶航行をコントロールできるようになったことだろう。こうなれば、それは西側諸国にとって死活問題となっただろう。

アフガニスタン指導部の何人かはアフガニスタン内政への合衆国の干渉を厳しく糾弾した。アフガニスタンに介入する権利を誰が合衆国に与えたんだ、と。答えは明確だった。合衆国が超大国だからだ。残念ながらこれは否定できない事実だ。誰がライオンにジャングルの王たる権利を与えたのか？ 彼の力だ！ 彼の能力だ！ これまでずっと、合衆国の本当の意図は自由と民主主義という旗印で守られてきた。これは真実であって、やがて現実となったのである。「力は正義なり」という言葉がある。もし私がアフガニスタンにいたとすれば恐らく私もそのような教条主義的なロジックに陥っていたであろう。しかしながら幸いにも、私は長い間、日本に滞在したので、私は自分の目を見開いて異なる世界を見た。故田中角栄首相は彼の政治手法を公にした。つまり「金権政治」である。この手法は国際問題における合衆国の役割に適用された。例えば、1991年の湾岸戦争である。イラク軍がクウェートに侵入した。アラブ諸国はその侵略を糾弾した。しかし、彼らにはクウェートを軍事的に守る能力はなかった。だから、侵略を跳ね返しイラクを罰するために国連は「超大国権」をアメリカ合衆国に与えたのだ。不幸にも、大多数のアフガニスタン政府高官はこの現実を理解できず、米ソ両超大国をこの国に引き込み、相競わせてしまった。

1. 1987年6月に副首相としての職務を始めたとき、アフガニスタン人民民主党は国政に完全な責任を負っていたが、国際政治の変化があったにも

かかわらず、反米・反西側諸国の政治を継続していた。

一方では、国内の政治体制を改革するため数々の手が打たれていた。すなわち、カーブルで開催されたローヤ・ジルガ（アフガニスタンの伝統的な大部族長会議）で新しいアフガニスタン憲法が採択された。この憲法に基づき、1987年11月1日にナジブラ博士がアフガニスタン大統領に選出された。このとき私はカーブルにいなかった。タンザニアの首都アルーシャで開かれたANC（アフリカ民族会議）主催の国際会議に出席していたのである。

新憲法は出版・報道の自由、政治活動の自由、人権の尊重など、アフガニスタンが直面している基本原理を導入した。しかし、すべての政策は国家保安省（KHAD）によって実施された。「KHAD」は政党の結成に対して決定的な権利を有していた。新聞は「KHAD」の指導下にあった。すべての政策は「KHAD」によって決定され実施に移されたが、それは、国民を欺き騙すためであり、すべてはデマゴギーであった。すべてはソ連人アドバイザーの管理下にあった。アフガニスタン事件にかかわって突出した役割を果たしたヴィクトル・ペトロヴィッチという人物がいた。彼は大統領官邸のトップアドバイザーで「アフガニスタン総督」と呼ばれていた。ナジブラ大統領の演説草稿は彼が書いた。

私がアフリカから帰国したとき、ローヤ・ジルガは閉幕しており大統領はベトナムとカンボジアへの訪問を準備していた。大統領はこの代表団に私も参加するよう要請した。

1987年後半は私は非常に忙しくしていた。この期間にインド、ソ連、北朝鮮、エチオピア、タンザニアを訪問した。この旅行中、それぞれの国の指導部と会談した。アジス・アベバではヤセル・アラファトPLO議長、タンザニアのアルシャ市ではジュリアス・ナイリ氏、オリバー・トンボ氏らと会い、ピョンヤンでは金日成主席、またアデンでは多くのアラブ指導者らと面談した。

過去9年間、実質的に政治活動から遠ざかっていたので彼らとの意見交換は私にとって必須かつ有意義だった。これらの面談から得られた私の確信は、これらの国々はすべてアフガニスタン問題の解決に関心を持っていない、ということだった。私の結論は自分自身の利益に類するための宣伝手段として彼らはここに参加しているだけだ、ということだった。

## 2 ベトナムとカンボジア

アフガニスタン大統領に選出されるとすぐの1987年12月20日、ナジブラ博士はベトナムへの公式訪問を決定した。この旅行には、アブドル・ワキル外相、国防相タナイ将軍、その他多数の専門家や外交官が随行した。インドの首都ニューデリーで、インド大統領および首相との会見のため一夜を明かした後、われわれはハノイへ向かった。

旅立つ前、私は大統領と国防相との間の論争や対立について多くの噂話を聞いていた。彼らの間で一体何が進行中だったのか、私は機中で知ることとなった。私と大統領、国防相のタナイ将軍はひとつのテーブルを挟んで座った。国防相は私と大統領との話には加わらず沈黙を守っていた。ワキル外相はロビーに引きこもり胃痛を訴えていた。

私と大統領は機中でずっと議論を続けた。ナジブラ博士は私をこう非難した。「ムータット同志！ 君には責任があるんだぞ。国王を追放し、王国を転覆したのは君たちだったんだ。アフガニスタン問題の遠因は、1973年7月17日の君たちのクーデタにあるんだ」。私はダウド前大統領によるアフガニスタン第一共和国の樹立を弁明するため、大統領の主張に対してこう答えた。「アフガニスタン人民民主党（PDPA）の指導部がダウド体制に敵対し反旗をひるがえしたんじゃないか。君たちの指導者が人民アフガニスタンにソ連赤軍を引き込んだんじゃないか」。ナジブラはこう答えた。「ソ連軍がアフガニスタンに入ったとき私はユーゴスラビアにいた。私はアフガニスタンへのソ連軍の介入について何も知らなかった。私がアフガニスタンに帰国したのは、ソ連軍が入ってから数日後だった。全責任はタラキ、アミン、カルマルらにあるんだ。彼らはアフガニス国民のイスラムの伝統を無視し、結果として国民を共産主義思想やソ連軍に反対する立場に追い込んだんだ。」

タナイ将軍は沈黙を守りながらこの議論を興味深く聞いていた。時々彼の表情をのぞき見て、私は彼が私に同意しているのを確信した。

プノンペンでシハヌーク殿下夫人邸での短い滞在中、タナイ将軍はもはや彼の見解を隠すことなく私に語った。「ムータット同志、私は君がそんなに立派な人物で明快な論理の持ち主だとは知らなかった。いままでよりずっと強く君を信頼できるようになったよ」。この公式訪問によって大統領と国防相に対する、また、ふたりの間の

緊迫した関係についての私の知識は豊富になった。大統領は私にこう言った。今度の旅行にタナイ将軍を連れてくることにしたのは、彼の見識を広げ、他国をよく見てほしいと思ったからだ。なぜならタナイ将軍は余りにも融通がきかず誰もが近寄りがたかったからだ、と。タナイ将軍は無情な兵士としての偏狭な視点から食欲に何でも見たがった。タナイ将軍の厳格な期待にこたえられなかったものは誰であれ、彼からの予期せぬ無謀な行動に直面する危険があった。

私がこのような事実を述べると、大統領はなぜ信頼していない人物を国防相に任命したのだ、と質問したくなるかも知れない。それに対する答えはこうだ。アフガニスタンの軍事作戦に全責任を負っているのはソ連国防相なのだ、と。特に、ゴルバチョフの最高顧問ヴァレニコフ将軍がタナイを将軍の地位に引き上げ、国防相に据えたのだ。

ベトナムとカンボジアへの公式訪問を12月27日に終えて、われわれの専用機はタイ領空を横断してハノイからデリーへ直行した。アメリカ空軍のF 15 ジェット戦闘機がわれわれをバンコック空港に緊急着陸させようと威嚇してきた。十分間の交信の後、米軍機は威嚇を止めた。その日の夕方、われわれはカーブル空港に無事帰着した。



### 3 アーマド・ハマー博士の素朴な外交

レーニンからゴルバチョフにいたるまでのすべてのソ連最高指導者と会ったことのあるアメリカのビジネスマンでオキシデンタル石油会長であるハマー博士について今さらここで紹介する必要はないだろう。冷戦時代、東西の架け橋としてソ連とアメリカ合衆国間の関係改善に重要な役割を果たした人物である。アフガニスタンをめぐる米ソの角逐は冷戦時代の遺産であり両国関係に決定的な悪影響を及ぼしていたので、ハマー博士は緊張の度を弱め両超大国間の信頼を強めるためアフガニスタン問題を解決するために努力しようとした。アフガニスタン問題を解決することによって、ゴルバチョフ氏がペレストロイカ政策を進めやすくしてやろうとしたのだ。

ハマー博士はローマで前アフガニスタン国王に会った後、1987年10月13日、自家用機でカーブルに飛んできた。ハマー博士のアフガニスタン問題解決案は素朴なものであった。彼はそれをナジブラ大統領に説明した。もし、大統領が同意すればハマー博士は彼の自家用機で大統領を国外に脱出させ、その足で前国王をイタリアから連れてくる、というのである。大統領はその案を拒絶し、ハマー博士にいくつも難題を提出した。ビジネスの方法で政治問題を解決することはできなかったのである。

この日に、私も執務室でハマー博士と会った。彼は「ムータットさん、あなたは海外に友達をたくさん持っていますね?」といきなり尋ねてきた。「イエス」と私は答えた。アメリカ人の友達を持っているか、と聞かれたのだと思った。私は米国のマンسفールド駐日大使は友達だったし、私の駐日大使時代の尊敬する大使仲間だった、と答えた。ハマー博士は、彼も私の友人だが、私が聞いたかったのは、海外在住のアフガニスタン人のことだと言い、彼はスルタン・マハムード・ガジの伝言を私に伝えてくれた。

私は私の友人の伝言を運んでくれたハマー博士にお礼を述べ、いろんな問題について語り合った。彼は引き裂かれたアフガニスタンは再び必ず平和を取り戻すと信じている、いつの日かもう一度アフガニスタンを訪れて国民が平常な生活を享受している姿を見たいと希望を述べた。われわれの会見は人民民主党に好ましい影響を与えなかった。私に反対するものは、私が西側のエージェントであり、裏切り者だと言いふらした。ナジブラ大統領でさえ、私を懐疑の眼で見るようになった。

## 4 ラジブ・ガンジー＝インド首相のふたつの アドバイス

1987年6月、ニューデリーで入院中のハーン・アブドゥル・ガッファル・ハーンを見舞うため、大規模な使節団の代表として私はニューデリーを訪問した。ガッファル・ハーンはイギリス植民地主義支配からのインド亜大陸の独立をめざす戦いに百歳を超えるその生涯のすべてを捧げたひとである。インド国民は彼をフロンティア・ガンジー（辺境地帯のガンジー）と呼んでいる。

インド政府はわが使節団を歓迎してくれた。われわれはニューデリーに一週間滞在した。この間に私はナルシマ・ラオ副首相とも会見した。インド首相ラジブ・ガンジー閣下は私および同僚のスライマン・ライク部族問題相を私邸での昼食に招待してくれた。この昼食会見でラジブ首相はアフガニスタン指導部が考慮すべき点として2点を指摘してくれた。

1. 複数政党制の実現に執着すべきではない。なぜなら、複数政党制のもとでは政党間の党争が激しくなり、アフガニスタン政府が推進しようとする政策の実行より政争の方に関心が向いてしまうからだ。
2. アメリカ合衆国からのアフガニスタン問題解決提案はそれがどんなものであれ、必ず拒絶すべきだ。なぜなら、合衆国政府はアフガニスタン問題の解決を望んでいないからだ。

インド首相の見解は尊重するに足るものだった。ライク部族問題相は首相に非常に感謝していた。帰国すると党の執行委員会が開かれ、ライク部族問題相はその会議にインド首相の見解を紹介した。私はナジブラ大統領にインド首相の見解を詳細に伝え彼と意見交換したかったが、その日には会えなかった。後日、彼には私の見解を次のように伝えた。アフガニスタンの内戦を收拾させるためにはわれわれはあらゆる可能な手段を講じなければならない。私は複数の政党が存在し、健全な競争をすることによりアフガニスタン社会を安定させる環境を作り出すことができると信じていた。「複数政党制」は民主社会に必須の要素として導入が歓迎されなければならない。だが、もしインド首相がアフガニスタン人民民主党が他の政党とともに権力を分掌することを望んでいない

とすれば、それには理由がある。アフガニスタン人民民主党はインドとの強いつながりを持つ唯一の政党だったからだ。アフガニスタン人民民主党がもし、アフガニスタンで政権基盤を失うようなことがあればインドの政治に否定的な影響を与えかねない。これが、アフガニスタン国内でアフガニスタン人民民主党が強固な政権をつくることに、インド首相が強い関心を持つ理由だった。インド政府は、反インド政党がアフガニスタンで政権にいたり、政権に加わったりすることを喜ばない。カーブルでの政権移動はパキスタンを利するだけであろう。そのような結果は、アフガニスタンだけでなく周辺地域をも含めて、痛みを引き起こすだろう。

その後、ナジブラ大統領に会ったとき、私は次のように説明した。インド首相の2点目の意見は、アフガニスタン問題解決案はそれがどのような立場から提案されたものであれ、アフガニスタン国民のナショナルインタレストの観点から検討すべきだ、と理解するべきだ、と。さらにアフガニスタン問題に関して提案や見解を述べる国は、提案する国の大小に関わらず、その内容がアフガニスタン国民と周辺諸国の国民にとってよいものかどうかの観点から判断すべきだ。その際、優先的に考慮すべきはアフガニスタン国民の統一、独立、主権、自由、領土保全、イスラム教の伝統などでなければならない。アフガニスタンとパキスタン両国の関係改善をはかる場合でも、インドとアフガニスタンとの伝統的な友好関係を損ねるものであってはならない。アメリカ合衆国がこのような方向で問題解決にあたるのであれば、あらゆる勢力が歓迎するはずである、と。

アフガニスタン問題は単にアフガニスタンだけの問題ではない。いまやアフガニスタン問題は一国の枠を超えた問題となっている。1980年代のもっとも複雑な問題のひとつなのだ。疑いもなく、アフガニスタンの安定は地域に平和をもたらし、ひいてはインドとパキスタン間の紛争解決にも寄与するのである。

ナジブラ博士は度量の広い性格で、私の意見を忍耐強く聞き賛同してくれた。そして次のように主張した。われわれはわが国民の利益を探求しなければならない。インドはいつでも自分自身の政策を遂行し、自国の利益を追求しているのだ。われわれの場合はどうだろうか。われわれは他人の利益に追従してきたのではないのか。そろそろそれを止める時期だ。われわれはこの10年間、ソ連の指示に従ってきた。国民のことを忘れていた。国民の支持を失ってしまった。われわれは国民の信頼を取り戻さなければならない。しかし一度失った信頼を取り

戻すのは極めて難しいことだ。

ガッファル・ハーンの入院は1988年3月まで続いた。彼は半年以上昏睡状態にあった。遺体はアフガニスタンのジャララバードにある自宅の庭に3月半ばに埋葬されることになった。ガッファル・ハーンの死は政府にとって頭痛の種となった。彼は遺書でアフガニスタン国内に埋葬されることを希望していたからだ。ナジブラ博士を含む政府指導部の大多数はジャララバードで執り行われたハーン・アブドル・ガッファル・ハーン氏の葬儀の締めくくりに参列することになった。私はライクと一緒に厳重な警護付きの小さなジープで集まった何千人もの人びとの中を進んだ。副大統領に率いられたインド代表团やパキスタンのさまざまな政党の代表团も同行した。われわれは棺を運ぶ人びとに合流するためトルハム峠に向かった。

葬式の最中われわれの数メートル先で突然3発の爆弾が破裂した。負傷者と死亡者がでた。警備隊員が私をその危険地域から外に誘導してくれた。他の政府高官と一緒にカーブルに帰るのに私は軍の輸送機を使った。大統領特別機はジャララバード空港を少し前に飛び立っていた。私たちの機は2番目に離陸した。ジャララバード空港を離陸するときは真っ暗闇であった。すべての信号システムは機能していなかった。機内の照明も消されていた。飛行はまさに空飛ぶ棺桶のようであった。機内は沈黙が支配した。乗客は全員機内に備え付けてあったパラシュートを自分用の身につけ、パラシュート担当兵から点検と説明を受けた。全員が次に何が起こるのか大きな不安に駆られていた。軍用輸送機は小さな螺旋を描きながら上昇した。窓から見る空には星が輝いていた。突然、強烈な光が機内を照らした。その直後、衝撃を感じた。ほとんどが民間人であった政府高官は一体何が起きたのか理解できなかった。カーブルに到着してから操縦士と航空士が次のように語ってくれた。アメリカ製の携帯型スティンガーミサイルに狙撃された。幸いミサイルの高度が低かったので機体には命中しなかったが、コクピット内で炸裂を直視した航空士は気を失った。

## 5 クルチコフ

クルチコフ・V・A とは何ものか？

ヴラジミール・クルチコフはアフガン政府崩壊前のソ連において最もパワフルな人物だった。彼は、KGB の名で有名な国家保安委員会のトップである。アフガニスタン事件での彼の役割は決定的だった。ナジブラを大統領に就けたのは彼であり、ナジブラ以外の候補者を排除してナジブラを強力に援助した。

1987年、ソ連の各都市とアフガニスタンの各州・都市との間に築かれた直接援助協定を実施する直接支援関係局を通じて多くの高官がカーブルを訪れた。この協定では、すべてのソ連邦内の共和国はアフガニスタンの29州の内のどれかひとつの州のプロジェクトや再建計画にモスクワの許可をえることなく直接支援を与えることが決められていた。このような高官のカーブル空港への到着がとぎれることはなかった。すべては、アフガニスタン政府が進めていた「国民和解政策」の成功の名の下に遂行された。

国民和解政策の採用と調整に関して、ふたりの人物が重要な役割を果たしていた。

1. クルチコフ：KGB 責任者
2. シュワルナゼ：ソ連外相

このふたりのうちひとりがアフガニスタンを訪問すると、PDPA 政治局員にとってソ連大使館は「聖地」と化した。

私は大統領の要請でクルチコフと会ったことがある。大統領は何度も私に対して彼と会うよう要請した。ナジブラ大統領はクルチコフが高潔な人物であり自分自身の運命にとって決定的な役割を果たした人物として感謝している、と述べた。

大統領は彼とフランクに話し合うべきだと熱心に勧めた。私は大統領がなぜそこまで主張するのか理解できなかった。ベトナム訪問から帰って2週間後、私はソ連大使館の近くにあるゲスト・ハウスでクルチコフと会った。会見は午後2時にはじまり午後4時まで、約2時間行われた。短い、儀礼的な会話の交換の後、彼は私に、最近のアフガニスタンの政治・軍事情勢をどう見ているか話してくれ、と同時に、将来のアフガニスタンについてどのような提案を持っているかも聞かせてくれと言った。

クルチコフは古いタイプのロシア人で誰でも気づく鋭

い眼力のある目をしていた。われわれは対面してテーブルに着いた。われわれ以外に、ノートを持った3人が同席した。彼らはわれわれを注視しつつ会話を詳細に記録した。クルチコフは私に訊ねた。「君は長い間、日本に滞在した。たくさんの貴重な体験をしたはずだ。だから、君は有意義な提案ができるはずだ。聞かせてくれないか。」

クルチコフが私の知識など必要とするはずがなかった。なぜなら、彼は、世界でもっとも強力な情報機関のヘッドだからだ。世界中で、いつ、どこで、どんな事件が起きたとしても、クルチコフはそれに関する情報を誰よりも早く知りうる人物のはずだ。私は深く考えた。そして、他のリーダーたちとは異なるだろうが、私自身の政治的判断、政治的分析を述べる決断をした。最初に、アフガニスタンの歴史を簡単に述べることにした。

大臣閣下！

カーブル市を取り囲む山々を見てください。この山々がこれまでカーブルを守ってきたのです。古くは紀元前3世紀のアレキサンダー大王、12世紀のチンギス・ハーン、14世紀のチムール、19世紀から20世紀にかけてのイギリス。

私は第2次世界大戦後、特に最近の10年間にアフガニスタンで起きた出来事に彼の注意を惹きつけながら話をつづけた。

現在のアフガニスタンは世界のどの国よりも犠牲を被っています。国民の3分の1が難民となって国外に流失しました。人口の1割が殺されました。何百万人もが傷つきました。戦争はまだ続いています。毎日何百人もが犠牲になり続けています。これが現実のアフガニスタンの姿なのです。一体誰がこの破壊に対して責任があるのでしょうか。アフガニスタンに、野蛮で馬鹿げた政策を、赤旗を掲げて実行したリーダーおよび指導部に責任があるのです。

クルチコフは注意深く聞いていた。私は話し続けた。私がまだ20代だったころ、私は左翼思想に影響を受けていた。しかし、決してアフガニスタンの現実と歴史的な伝統を無視はしなかった。

1980年代に私はアフガニスタン駐日大使として

の任務を東京で遂行していました。その間中、マスメディアはアフガニスタンの紛争を報道し続けました。そのような状況のなかで、私はアフガニスタン問題をどう取り扱い、解決すればよいかを考え続けました。いろんな側面からこの問題を熟慮した結果、私は、紛争当事者が誠意を持って話し合い、協力すれば、合理的な解決案に到達できると確信しました。アフガニスタン問題は、内部と外部からの両方の視点から分析すべきです。アフガニスタンは戦略的に重要な地政学的な位置を占めているから、あらゆる解決策は利益と調和のバランスを研究し、実現したものでなければなりません。利益と調和のバランスとはなにか？

アフガニスタンの隣国は、ソ連の3共和国

(注：現在のCIS) タジキスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、それにイラン、パキスタン、インドおよび中国です。さらにアフガン紛争にはふたつの超大国、アメリカ合衆国とソ連がかかわっています。アメリカ合衆国はアフガン問題解決のためには下記の2項目が必要だと考えています。

1. アフガニスタンの領土をいかなる国であれ軍事的に利用することは許されない。ソ連軍はアフガニスタンから撤退しなければならない。
2. アフガニスタン国民は適法で信頼でき国民に完全に支持された政府を選出する権利を行使しなければならない。

同様に、ソ連は下記の2項目が必要だと考えています。

1. アフガニスタンの領土がソ連の中央アジア諸共和国転覆の出撃基地にされてはならない。
2. アフガニスタンはすべての中央アジア共和国と善隣関係を持たなければならない。

パキスタンはその独立のときからアフガニスタンの立場を快く思っていないでした。アフガニスタン当局はスーパーパワーの思惑の圧力のもとデュラント・ライン問題をあらゆる国際会議の場に持ちだしました。いまアフガニスタン国民は昔の政権のこの悪質で間違った政策に価値を見出しています。多くの国々では現在の国境線が画定する

までたびたび変更されるのを目撃してきました。デュラント・ライン問題もこのような観点から検討されるべきものです。現代ではヨーロッパ、アジア、アメリカなど世界中で調整プロセスが進行しています。現代の国際政治の論理にもとづいて、アフガン国民とその進歩のため、アフガニスタン政府は公式にデュラント・ラインを国境として認め、それぞれの協定にサインすべきです。パキスタンの保安当局はアフガニスタンの内政に対するあらゆる干渉を停止すべきです。

私はペルシャ語で、通訳を介して話した。若い書記はわれわれの会話を一言も逃さず記録した。

アフガニスタン政府は、イランイスラム共和国と何の問題も、紛争も抱えていません。私はイラン政府は私の考えに反対するとは思いません。むしろ、この考えを実現するために協力してくれるでしょう。

中華人民共和国も、アジアの影響力ある国であり、またアフガニスタンの隣国として、アフガニスタン紛争の解決のために多くの貢献ができます。

アフガニスタンとインドは歴史的に密接な関係を有しています。アフガニスタンとインドはかつて一切の紛争を経験していません。アフガニスタン政府はインド政府に対して、次のように保証します。つまり、アフガニスタン紛争を解決するにあたりインド国民の利益を損なうことはない、と。

したがって、アフガニスタンに関する国際会議は国連の支援の下で開かれるべきであり、次の国々が出席すべきです。イラン、パキスタン、インド、中国、ソ連。この国際会議の主要な任務は、すべての隣国とふたつのスーパーパワーの利益をバランスさせることです。

アフガニスタン国民の自由意思に基づき、この国際会議でアフガニスタンが『恒久的な中立国』であると宣言しなければなりません。アフガニスタンが永世中立国になることにより、上記いずれの関連諸国も策動の余地を見出せなくなります。

アフガニスタン問題の国内的様相について、私はクルチコフに次のように説明した。

アフガニスタンは多民族国家です。多くの民族



や部族が異なる言葉を持って隣り合って生活しています。彼らは彼らの国を昔から共同して守ってきました。

しかし社会経済的視点から、アフガニスタンの民族と部族の発展段階はさまざまです。アフガニスタン国民は、国民的な問題を解決するために民主主義の原則に基づく国民議会を開催すべきです。この国民議会では、国の不安定要因のすべてを除去するため、下記の決議をすべきです。

1. 武装の解除
2. 国連の厳格な管理の下で政府、民間のあらゆる種類の武器貯蔵庫の破壊
3. アフガニスタンを永世中立国とする決議の採択
4. アフガニスタンの新憲法の採択

アフガニスタン新憲法は次の条項を含むべきです。

- すべてのアフガニスタン国民が国民生活において国民としての権利を行使できる**民主主義**
- すべてのアフガニスタン国民が社会的便宜を享受でき、出身に縛られない**平等の権利**
- 言論の**自由**、人権の**尊重**
- 国連憲章およびその他の国際協定の**遵守**

クルチコフは私の詳細な説明を忍耐強く聞いてくれた。そして語った。「とても興味深い提案だ。このように包括的な考えをアフガニスタンのどの指導者からも聞いたことがない。君はその考えを大統領と議論したことがあるのか?」「ある」と私は答えた。「君は君の考えに賛同する人間を見つけるべきだ」とクルチコフは付け加えた。それに対して私は、政府部内の同僚やPDPAのメンバーに話したことはある。しかし、彼らには理解が少し難しそうだ。空想だとしか受け止められなかった、と答えた。

東京赴任中、私は多くの日本人やアメリカ人、その他諸国の政治家や友人とこの見解をめぐって議論をした。

「日本人やアメリカ人」の名前を挙げたとき、クルチコフは不思議そうな表情で、私の提案にアメリカ人の反応や評価はどうだった、と聞いてきた。私は言った、アメ

リカ人には私のアフガニスタン問題解決案は驚きであった。彼らは私が軍出身者であることを知っていたから、アフガニスタンの中立とあらゆる当事者の武装解除という解決案をにわかには信じなかった。しかし、最後には彼らは私の見解を評価してくれた。そして、彼らその実現のためには壮大な規模の活動、忍耐、そして時間が必要だ、と語った。

私との会合でクルチコフが何を考えたか判断するのは難しかった。しかしこの機会を利用してアフガニスタンの現実を包み隠さず説明するのは道義的責任だと感じた。アフガニスタンが陥っている対立のジレンマをいかに解消するか、私の考えを述べた。この後、率直に腹蔵なく君の考えを述べてくれ、と大統領その人から頼みが来た。

最後に、クルチコフは私に感謝して、つぎのように述べた。「あなた方は自分の国を発展させる独自の方法を見つけだすべきだ。ソ連はアフガニスタンに干渉したことを不愉快に思っている。あなた方の国民は自分たちの国を再建する能力を持っている。ソ連軍はアフガニスタンから撤退するだろう。そして、アフガニスタンの友人、隣人としての立場を守り続けるだろう。」

## 6 中立内閣

1987年末、国際情勢は急速に変化しつつあった。ソ連指導部はアフガニスタン指導部に対しアフガン人の大多数が受け入れ可能な広範な階層を基盤にした政府をつくれとアドバイスした。

シャーク博士が首相として最も適切な人物として選任されナジブラ博士によって新しい首相に任命された。

彼は新首相に任命されると私に近寄ってきて、国会審議に付する政府の方針を準備するよう頼んできた。私は手助けすることにし、その仕事を引き受けると約束した。国の内外情勢、あらゆる政治的な要因に注意を払って、私はシャーク内閣の方針草案を急いで執筆した。彼はそれを議会へ提出した。長い審議を経てその政策概要は可決され新内閣が承認された。シャーク博士は議会内の党員・非党員を問わず良い評判を得ていなかったにもかかわらず新首相として信任を得た。国家保安省が議員の指示をまとめシャーク博士の内閣を承認させるための裏工作を遂行した。

PDPA 政治局員ナジムディン・カウイヤニ、前カーブル市長トグヤンら多くの国会議員は率直に語った。シャーク博士は国際舞台でのソ連の弱点を知っていたので、PDPA 党員やソ連から距離を置いた。彼の意図は合衆国との交渉窓口を開くことだった。「アフガニスタンにおけるマルクス主義の創始者」として彼はソ連とPDPA 指導部に対する闘いの鎖を解いた。彼のアプローチはソ連指導部にもPDPA にもそして彼自身にとってさえ助けになるものではなかった。

その失敗と暴虐非道、間違った政策のゆえに、どんなアフガニスタン人もPDPA を非難する権利を有している。しかし、その経歴からして、シャーク博士にはその権利はない。

ソ連ではさまざまな事件や変化が頻発していた。ソ連指導部はアフガニスタンの「国民和解政策」がなかなか進展しないことにいらいらしていた。ソ連指導部は短期間にソ連大使を頻繁に取り替えた。ソ連外務第一次官の肩書きを持ったままユーリー・ヴォロンツォフが極めて危機的な時期にアフガニスタン大使として派遣されてきた。

シャーク博士とヴォロンツォフは親しい間柄だった。彼らはそれぞれの国の大使として同時期にインドに赴任していたことがあった。

ユーリー・ヴォロンツォフは、傑出した経験豊富な外

交官だった。駐アフガン大使として8カ月間カーブルで執務した。彼の主要任務はソ連赤軍をアフガニスタンから安全に撤退させる方策を見いだすことだった。アフガン大統領は彼の任命を快く思わなかった。彼らはこれまでアフガニスタンに派遣されてきたソ連高官に対してそうだったようにヴォロンツォフの任務に干渉したり妨害したりできないことを知っていた。ユーリー・ヴォロンツォフはジュネーブ協定の締結を準備する過程で、決定的な役割を演じた。彼はシャープで、賢く、剛胆な外交官だった。

残念なことにジュネーブ協定の準備プロセスから私を含め副大統領らは排除された。私はヴォロンツォフに関する情報をしばしばアフガニスタン外の情報源から知らされた。

アフガニスタンで任務を遂行したニコライ・コズィロフ（ソ連崩壊後のロシア外相）のインタビューをここで引用するのは有益であろう。このインタビューのタイトルは「われわれとともにアフガニスタンという船も同時に難破させてしまった」。2004年『アフガニスタンルー』というウェブサイトに掲載された。

ジュネーブでは4束の書類に署名がなされた。そのどれもがアフガン問題の解決に関するものであった。ワキル・アフガニスタン外相、ヌーラニ・パキスタン外相、シェワルナゼ・ソ連外相、合衆国側代表としてジョージ・シュルツ國務長官の4人の代表がこれらに署名した。

ワキルは狡猾な戦術をまたしても持ち込んできた。アフガニスタンとパキスタンとの間の不干渉に関する条項に次の表現が書き込まれた。すなわち「2国間の国際的に認知された境界」つまり19世紀にイギリスによって引かれたいわゆるデュランド・ラインのことなのだが、このときパキスタンは存在しておらずまだイギリスの植民地だった。アフガニスタンは未だにこの境界線を認めていない。なぜならこのラインはパシュトゥーン族の居住地域をアフガニスタン側とパキスタン側のふたつの地域に分割しているからである。

ワキルは次のように宣言した。「このような文書にわれわれは署名するわけにいかない」と。協定を完成させるためには一両日しかのこされていなかった。このとき、ゴルバチョフ、シェワルナゼ、ナジブラの3人はタシケントでジュネーブ合意書の落としどころについて話し合っていた。われわれはジュネーブからナジブラと話した。ナジ

ブラはワキルに電話で「ワキル同志、われわれは政治局会議を開き、合意書の内容に賛成する決議を行った」と伝えた。しかしワキルは屈しなかった。

ユーリー・ヴォロンツォフ外務第一次官はモスクワから緊急便でジュネーブへ飛んだ。彼は聡明かつ約束を守る外交官で優秀な外務大臣にもなれる人だった。しかし不幸にもそれはカーブルへの8カ月の「追放」によって実現しなかった。一方、ワキルはその頑迷さのゆえに交替させられることになった。ヴォロンツォフはワキルを閉じ込めて2人だけで7、8時間話し合った。しかし彼は憂鬱な表情でこう言わざるを得なかった。「よし分かった。私は明日ケシュトマンドを連れてくる。そしてワキルはモスクワへ連れて行く」。その日の夕方、ヴォロンツォフはワキルともう一度会った。ワキルは紙のように真っ白な顔になって会議場から去って行った。こうして合意書は調印されたのだった。

すでに述べたようにナジブラはヴォロンツォフが好きではなかった。なぜなら彼が必要としていたのは自分の地位をモスクワで守ってくれる大使だったからだ。ヴォロンツォフの方はといえばナジブラが赤軍の安全な撤退のために完全に協力してくれるかどうか、彼を信用していなかった。ヴォロンツォフは大統領はムジャヒディンのリーダーたちあるいはムジャヒディンの野戦指揮官たちと妥協するつもりはないと確信していた。ヴォロンツォフは大統領だけでなく、実情を知るために他のアフガン高官たちのもとをしばしば訪ねていた。

自分自身を「仮設橋」と呼んでいたシャーク博士は弱体で汚職まみれの古株を寄せ集めた政府を組閣した。シャーク博士の政権は食糧や生活必需品の供給といった国民の日常的な問題ですら満足に解決できなかった。

ムジャヒディンはシャーク博士を敵視し妥協しなかった。彼がソ連の古くさい道具にしか過ぎないことを知っていたのである。したがって彼はムジャヒディンと政府との間の「橋の役割」を果たすことはできなかった。ついに彼の弱さと失敗によって1989年3月15日に彼だけが首にされた。シャーク博士に対する大統領の決定は憲法の条項に反していた。大統領の行為は対立の根深さの反映だった。ソ連のアドバイザーたちは失望した。彼らはそれを過去10年間アフガニスタンにおける公正中立な政府で最初の大失敗と呼んだ。もう一度、ケシュトマ

ンドが臨時首相として呼び戻された。

## 7 閣僚会議

1987年6月7日から1988年7月7日までちょうど1年、副首相として執務した。私の担当は次の6部門だった。

- 教育省
- 高等教育
- 法務省および公衆衛生省
- 文化情報省
- 科学アカデミー
- 婦人組織

この期間は私にとって貴重な経験となった。政府の仕事に関して多くの知識を得ることができたし、多くの高官たちと知り合いになった。もちろんソ連人アドバイザーたちとも。彼らは大臣と一緒に私の執務室にやってきて議論した。仕事のやり方とシステムはソ連とまったく同じだった。ソ連の「官僚システム」は経済の停滞をもたらし、社会体制全般にダメージを与えた。私は日本での経験のおかげで悪いと考えるものをきっぱりと断れるだけの知識を身につけていた。例えば、モスクワでは教育省というものが3種類もある。教育省、中等教育省、高等教育相の3つである。ソ連のアドバイザーは、わが国の首相に対して、ソ連と同じ数だけの教育省をつくらなければならない、と迫った。私から見れば、これは驚き以外の何ものでもなかった。さらに驚いたのはPDPA内のふたつの分派、つまりパルチャム派とハルク派ごとにソ連のアドバイザーが対立していたことだった。

ある日、2人のソ連人アドバイザーの訪問を受けた。1人は文化情報国家委員会のアドバイザーでもう1人はバフタル通信社のアドバイザーだった。彼らはこの2つの組織の間の問題を議論しに来たのだ。

国家委員会の責任者はハルク派、バフタル通信社の責任者はパルチャム派だった。2人のアドバイザーは両組織について議論した。

ショックを受けたのは、2人はそれぞれ自分がアドバイスする組織の責任者を弁護し最後は取り乱してお互いに罵りあい、罵倒しあった。同僚にいわせれば、政府のいろんな執務室で、こんなことは日常茶飯事だ、とのことだった。ソ連人アドバイザー達はアフガニスタンで何らかの業績を上げようとやっきになっていた。そして、時々、彼らの無知をさらけ出すナンセンスな提案をしたりした。

教育省付のあるアドバイザーらが、小中学校の生徒に

1 カ月 1500 アフガニの給付金を与えるという提案をひっさげて私のオフィスを尋ねて来たことがあった。私は一顧だにせず、この提案を拒否したが、上級アドバイザーの圧力を受けて、大統領はアドバイザーらの提案を検討すべく専門家と関係者を集めて会議を開いた。その会議の場で大統領は私に向かって、なぜその提案を拒否したのか説明を求めた。

私はその理由を次のように説明した。

- 第1は財政的理由である。その提案を実行すると生徒らへの給付金は総額100億アフガニにのぼる。政府にはそんな財政負担に耐えられる余裕はない。仮にそのための基金をソ連が今年度肩代わりすることを約束したとしても、それを次年度以降も実行できるとは思えない。
- 第2は腐敗した提案であること。生徒に毎月給付金を与えるということは子供を学校に送っている親に対する賄賂でしかない。

もし、尊敬するアドバイザーらが子供らに本当に教育の機会を与えたいならば、学校建設でわれわれを助けるべきだ。われわれの計算によれば10億アフガニあれば、学校をおよそ100校建設でき、それぞれの学校で3000人の生徒を教育できる。現在、アフガニスタン全国で1400校が破壊されている。これらの学校の再建と生徒らに教育機会を与えることが、給付金の支給よりも政府にとっては優先すべき施策なのである。しかし、アドバイザーらの圧力によってこの提案は採択された。小中学校生徒に給付金が払えたのはわずか3カ月だけだった。それ以上の支出に政府は耐えられなかったのである。これはアドバイザーらが犯した数ある悪行のひとつに過ぎない。この時以来、アドバイザーらは担当副首相である私の管轄すべき問題を私をバイパスして、直接、大統領と審議するようになった。

ナジブラ大統領付き上級アドバイザーであるヴィクトル・ペトロビッチは私と密接な関係を求めてしばしば私のオフィスにやって来た。モスクワで開催されるはずだったテラタパ博物館の展示が妨害されてから私とヴィクトル・ペトロビッチとの関係は悪化した。10月革命70周年およびアフガニスタン・ソ連友好68周年を記念してアフガニスタン週間をモスクワで開催する計画が持ち上がった。フランスの新聞『ル・モンド』は、1987年8月に、モスクワで開かれるテラタパの発掘品展示会



について報道した。フランスのこの新聞は発掘されたこの財宝がモスクワからカーブルに返還されるかどうか疑問を呈した。この事実を考慮して、大統領はテラタパの財宝の展示を取りやめることに決し、私に公式の命令を発した。大統領の命令は関係機関に伝達された。

その夜、大統領は随員を引き連れてキューバ訪問に出発した。アフガニスタン政府との合意ができる前に、カーブル博物館の展示物を梱包するためにモスクワから2人の専門家が到着していた。しかし、彼らの活動は文化情報相によって阻止された。このことは大統領付き上級アドバイザーであるヴィクトル・ペトロビッチの知るところとなった。ヴィクトル・ペトロビッチが私に電話をかけてきた。私は自分の部屋で職員らと会議をしていた。彼は尋ねた、誰がテラタパの企画をぶち壊したんだ、と。私は答えた、大統領だ。彼はまた質問した、誰が大統領命令の草案を作ったのか、と。私だ、と答えた。彼は今度は怒りをあらわに言った。「ムータットさん、あなたはわれわれの70年もの友好関係を破壊しようとしている」。私は、「アフガニスタンとソ連の友好関係を破壊しようなどとは思っていない。この展示会をモスクワで開催するのに反対しているだけだ」と。

このとき以来、彼と私は会話さえすることがなかった。彼がアフガニスタンでの任期を終えて帰国するときも私だけには別れの挨拶はなかった。

帰国して彼はアゼルバイジャン共産党の第2位のポジションに就任した。ちょうどその時に、アゼルバイジャンで反共産党運動が開始され、ヴィクトル・ペトロビッチのオフィスはロケット攻撃を受け、破壊された。しかし、彼はこの攻撃からかろうじて生きのびた。

ソ連人アドバイザーとのこの種の衝突は、大統領にとって損なものではなかった。ひとつの側面からいうと、大統領は自分が他の政府高官と同じではないことをソ連に伝えたかったし、他の側面からいうと、ソ連人アドバイザーを経由してソ連政府指導部に大統領に敵意をもつ情報がつたわるのを阻止したかったからだ。一方、大統領は同僚や党員に対してソ連にこれ以上追随する必要がないことをそれとなく分かせたかったのだ。

## 8 大統領機関の設立

1988年6月7日に大統領機関が設立された。4人の副大統領候補が指名され、それぞれが国会、司法から信任された。その4人は下記の通りである。

- アブドゥル・ラヒム・ハティフ（国会および法務担当）
- アブドゥル・ワヒド・ソラビ（財務および経済担当）
- モハムマド・ラフィ将軍（防衛）
- アブドゥル・ハミド・ムータット（私）（外交および社会文化問題）

執務を始めると、私は国際問題に関与できないことを悟った。多くの微妙な問題は私をバイパスされたし、知らされもしなかった。例えば、国連事務総長アフガニスタン特使のベノン・セヴァンが大統領と面会したとき、この会見は秘密にされ私には知らされなかった。大統領は祖国党の執行会議メンバーに対しても同じ態度を執った。大統領が会談の一部を公表するのは、それが彼自身の利益に合致するときだけであった。下記の懸案は厳格に大統領の専断事項とされた。

- 国連事務総長特使との会談
- イスラム諸国との接触、交渉
- パキスタン政府およびパキスタンの政党との交渉
- インドおよびイランとの関係

ゴルバチョフ・ソ連共産党書記長はアフガニスタンでの民族和解政策の成功に特別の関心を持っていた。なぜならアフガニスタンからのソ連軍の撤退が遅れており、ゴルバチョフは国際世論から非難を浴びていたからである。彼は、軍隊をアフガニスタンから撤退させる以外に、西側諸国やソ連国民から信頼される道はない、と確信していた。カルマルを辞任させ、ナジブラを据えたのも、このプロセスの一部であり、彼が主導した。ナジブラ大統領はゴルバチョフに対して目に見える成果を示さなければならなかった。

ムジャヒディンとの交渉を少しも進展させることのできないナジブラ大統領に対して、ソ連指導部の忍耐は限界に達した。ソ連指導部はナジブラ大統領こそがアフガニスタン問題を解決させるうえで障害になっているとの結論に達した。そして、ナジブラ大統領を更迭するとい

う結論に到達した。

ナジブラ大統領もまた鋭敏な感覚の持ち主であった。彼は彼で自分のカードを切った。彼はソ連の官僚体制の中に彼を支持する2枚の強力な切り札を持っていた。KGBのヘッド＝クルチコフと外務大臣シェワルナゼである。しかし、ソ連の国防相と内務相はナジブラ大統領に対してそれほどシンパシーを感じていなかった。

ソ連高官たちはアフガニスタンでの軍隊の配備期間はナジブラ大統領の存続期間に正比例するだろう、したがって戦闘の継続はますますソ連軍の戦死者を増大させアフガニスタン紛争の解決を危機に陥れるだろう、との結論に達した。

## 9 ヴァレニコフ将軍

ヴァレンティン・ヴォイノヴィッチ・ヴァレニコフ将軍はソ連赤軍のなかで最も経験を積んだ軍人のひとりである。彼はアフガニスタンでのソ連軍の活動を監視する責任者であった。同時に彼はアフガン人同士との和解と平和実現のための、ムジャヒディン野戦指揮官たちとの交渉を前進させた。ソ連赤軍の創設以来、彼はソ連軍の幕僚として最も長い勤務経験を有していた。

ヴァレニコフ将軍は、ナジブラ大統領はアフガニスタン問題の解決を本当は望んでいないから政治舞台から去らなければならない、と考えていた。この目的のために彼はアフガニスタンの国防相と通常の関係を維持しつつ、彼みずからムジャヒディン野戦指揮官らと交渉しソ連駐屯軍との一時休戦を実現した。

ナジブラ大統領は、ヴァレニコフ将軍に対する不満と不快感を私に何度も表明した。ナジブラ大統領は、ヴァレニコフ将軍の行為は「友好関係」への裏切りだと断定した。ヴァレニコフ将軍の主目的はアフガニスタン北東部の伝説的な野戦指揮官であるアーマド・シャー・マースドと停戦することだった。しかし10年間の戦いは両者の間に巨大な不信の溝を築いてしまっていた。いかなる妥協も不可能だった。

ペレストロイカの進展と合衆国—ソ連間のデタント（軍縮）により力の均衡はムジャヒディンに有利に傾いた。ソ連はアフガニスタンからのソ連の撤退は西側との良好な関係を維持するための必要条件であることを知っていた。ナジブラはこうなれば彼の政府が単独で戦わなければならなくなる、と確信していた。ソ連軍の完全撤退まで、彼はマースドと何らかの合意に達する必要がある。サラン峠はマースドの完全支配下にあった。この事実がソ連軍の撤退を困難にしていた。

## 10 マスードと私

マスードと私はパンジシール溪谷にあるバザラクという町で生まれた。われわれは近い親戚だった。この町はタジク族の中でも名門の同族だけから構成されていた。全住民は喜びと悲しみを共有していた。

彼の兄、ディン・モハムマドは私のクラスメートだった。彼は後にパキスタンで名前の分からないムジャヒディングループに誘拐され殺された。彼の叔父、アミール・モハムマドは私の尊敬する先生であり、私の父の親友だった。

わが町の全住民はマスードの大義を支持していた。住民は、マスードを守ることはイスラム教国の独立と主権さらには国民を守ることでであると信じていた。この忠誠心が彼らの真の力であった。われわれが住んでいた町はソ連戦闘機による爆撃で完全に破壊された。家屋や農地は荒れ果ててしまった。逃げ遅れた住民はソ連軍によってほとんど殺害された。若者は抵抗戦争に参加した。私がアフガニスタンに帰国してから会った、難を逃れてきた住民は侵略者の野蛮な行動と暴虐を口々に語った。

日本での任務を終えて帰国したとき、マスードは私に歓迎の意を伝える使者を送ってきた。同時に、なぜこんな難しい局面で帰国して、どうするつもりなのか不審に思っていた。彼は私がソ連によって据えられたカイライ政権のすべての職務を拒否すると期待していた。私は、なぜ政府に協力するのか、私の考えを説明した。

ヴァレニコフ将軍はわれわれの関係を知っていた。彼は私に、マスードにコンタクトしてゴルバチョフのメッセージを伝えてくれるよう頼んできた。将軍はナジブラ大統領を信頼していなかったから何らかの合意に達するまでナジブラ大統領には内密にするよう頼んだ。もし彼に気づかれたらどんな妨害をされるか分からないからだ。

副大統領が大統領に知られずにマスードと連絡を取ることなど不可能であった。私はヴァレニコフ将軍の依頼の件をナジブラ大統領に伝えた。大統領はそのメッセージを伝達することに同意した。しかし、アフガニスタン人がアフガニスタン問題を解決するのだ、と強調するのを忘れなかった。私はヴァレニコフ将軍の頼みをマスードに伝えた。彼はゴルバチョフのメッセージをもっとよく説明しにファルカール溪谷に来い、と言った。私がタロクアン市に行く日をマスードは1988年12月1日と決めた。

## 11 ファルカール溪谷

私が、マスードから招かれたことをナジブラー大統領に伝えた後、この事実はヴァレニコフ将軍やその他のソ連人リーダーたちにニュースとして知らされた。前線に極めて近い約束のポイントまで私を連れていく責任はヴァレニコフ将軍が引き受けた。

カブル空港からマザーリシャリフに向けて私は夕暮れに特別機で飛び立った。マザーリシャリフの空軍基地でしばらく待機した後、ヘリコプターでタロクァンに向かった。3機の武装ヘリコプターがわれわれを防衛しダイヤモンド編隊で飛行した。われわれはまず、アマダリア（河）を横断してソ連領に入り河に沿ってクワジャガールの小さな町をめざして飛んだ。アフガニスタン領内を飛ぶことはムジャヒディンの対空ミサイルの攻撃を受ける危険があったからだ。クワジャガールにわずかの間止まったあと、われわれは午後0時頃カザクス村近くの丘を目指した。私が丘に降り立つとヘリコプターは直ぐにマザーリシャリフに向けて戻っていった。その村へ行ったのは初めてだった。私はその村に向かって歩み始めた。村には多くの政府側の民兵が配置されていた。その村の保安は第37旅団に属する戦車隊によって守られていた。戦車隊は前線に展開していた。

細長い道が丘とタロクァンの市街とを分かっていた。道の両側には畑や野原が広がっていた。村に近づいたとき、ムジャヒディン側が砲弾とロケットをその村に撃ち込んだ。なぜだ、と私はいぶかった。マスードとわれわれは12月1日から停戦の合意ができていたからだ。こんな状況では前線に近づくわけにいかない。私はバダクシャンの民兵が守る村に避難することにした。その村はムジャヒディンに激しく砲撃されていた。民兵と過ごした一夜は驚きと興奮の一夜だった。そこでコレマリというひとりの男と会った。彼はゲリラに属したことがあったがいまは政府側についていた。彼はバダクシャン州でのジハード（聖戦）の最中、彼とその仲間たちが彼らの野蛮な行動によって地域住民を脅すためにしばしば住民の生肉を食ったと語った。

村に滞在中、マスード派の指揮官たちのいるタロクァンのカザフ人の村に使者を送った。翌朝、ムジャヒディン側からの砲撃が止んで村は静かになった。政府側とマスード側の暦に1日のズレがあったことを知った。

タロクァンから帰ってきたアルバブ・セカンダーという使者が、マスード派のあるコマンダーが兵士を伴って

前線の泥の家で待っている、と伝えた。私はそこに向けて歩きはじめるとき、民兵の指揮官にどんなことがあっても砲撃するな、さもないと道路近くにいる他のムジャヒディングループが撃ってくるかも知れない、と指示した。そして、地雷がいたるところに埋め込まれている道路を歩いていった。その日は、ムジャヒディンのカレンダーでは、1988年12月1日だった。私はガイドを引き連れて丘を徒歩で出発した。道の間地点まで歩いてきたとき突然砲撃が再開された。銃撃の音がして野原や土壁に銃弾が撃ち込まれたのを見た。タロクアンに向けて足を早めたとき、右手を歩いていたガイドが突然叫び声をあげた。どうしたんだ、と私が聞くと、彼は右腕を見せた。銃弾が当たって血が流れていた。走れ！、と私は叫んだ。われわれは走った、そして前線を越えた。

短い顎髭を生やした男が数人の武装した兵士たちと壁の後ろでわれわれを待っていた。彼は私を抱擁し暖かく歓迎した。わたしの警護役だった。マスード司令官は私の旅行中、私の足取りを完璧にフォローした。われわれはある家で休み、次に彼は私をジープに乗せて別の建物に連れて行った。その家は近くに小川が流れ、美しい庭付きの綺麗な家だった。その家でムジャヒディンたちと昼食をともにした。彼らの大多数は、私の郷里であるパンジシール溪谷の出身だった。彼らは私をよく知っていた。しかし彼らの誰とも会ったことがなかった。なぜなら、長い間、私はパンジシール溪谷の外にいたからだった。そこではマスード軍の指揮官の中でも有名なガダと会った。彼の顔を最初に見たとき、私は有名なロシアの作家アレキサンドル・ソルジェニツィンを思い出した。ガダは10年間の戦闘で鍛えられた強靱でパワフルなコマンドーだった。

空が暗くなり、町は静かになった。ムジャヒディンは私をファルカール溪谷に連れていく準備を始めた。私はスーツを脱いでムジャヒディンの制服に着替えた。頭にはアフガニスタンイスラム協会のシンボルであるパコール（ヘッドギア）を被った。午後6時ころ、ファルカール溪谷に向かって出発した。私を乗せた車を含め、ジープは5台だった。前方に2台、後方に2台がついた。それぞれのジープには近代的な兵器で完全武装した5人の兵士が乗った。われわれは溪谷の狭い道を抜けて進んだ。私が訪問した後、この地では、アフガニスタンイスラム協会がヘクマチヤール派イスラム党指揮官サイド・ジャラルの攻撃を受け、31人が死傷する事件が起こった。深い山岳、河、暗闇——ファルカールへの行程でここが最も危険な場所であった。

マスードの司令本部に到着するまで2時間半を要した。マスードは私を暖かく迎え入れてくれた。われわれは抱擁し、挨拶の言葉を交わした。電気設備が完備し、温水設備付き寝室、ダイニングルーム、瀟洒な家具付きのホールなどを備えた立派なゲストハウスに案内された。マスードとの夕食での会話の中心は同じ郷里バザラクに住む親戚や昔の日々についてだった。

ファルカールでの滞在が3日を超えた。この間、昼食、夕食、そしてまた翌日の朝食と、その度ごとに私とマスードは語り続けた。マスードは、状況が悪いからあと数日滞在しろ、と言ったが、12月4日、滞在をうち切ることにした。この滞在中、最も強く記憶に刻まれたのは、ムジャヒディンに寝返ったロシア兵士が私の寝室の警備をしていたことだった。このロシア兵は7年前にムジャヒディンに鞍替えし、いまはイスラム教に改宗していた。彼はウクライナ人であると言った。母親がアゼルバイジャン人で父親がウクライナ人だった。彼はウクライナの首都キエフから約100km離れたところにあるベロセルコフという町の生まれだった。

今回の訪問の主な目的は次の4項目だった。

- マスードとの直接接触の道を開くこと
- アフガニスタンの将来に関するマスードの見解を知ること
- 国際関係に関するマスードの見解を知ること
- 現在の紛争から国を守るため相互に協力すること

ファルカール渓谷での会談でマスードはペレストロイカとその成り行きに強い関心を示した。しかし、彼は日常の戦闘に忙しく国際問題をフォローする時間がない、と語った。

私はヴァレニコフ将軍が私に託したゴルバチョフソ連共産党書記長のメッセージを手渡した。そのメッセージには次のような事柄が書かれていた。

- マスードとソ連との会談はアフガニスタン国民にとって有意義である。
- ソ連とマスードとの会談はマスード自身にとっても有意義である。

ゴルバチョフ書記長のメッセージが読み上げられるのを注意深く聞いた後、マスードは、昔、ソ連の上級指揮官と停戦に合意したことがあった、と私に言った。停戦



は彼の部隊を立て直すのに恰好の機会となった。ソ連はアフガニスタンに対して侵略的な攻撃をしかけてきた。しかし、彼らは敗北し、その結果、アフガニスタンからの撤退を余儀なくされたのだ。ソ連赤軍が撤退をスピードアップするのであれば、通過の安全を保証しよう。この条件でのみソ連当局と交渉する用意がある、とマスードは語った。

最後に、私はマスードに対して、ソ連当局者との会談に合意するよう念押しした。マスードは、アフガニスタンにおけるソ連軍の高級指揮官代表であるヴェレニコフ将軍、およびカーブル駐在のヴォロンツォフソ連大使の2人と、パンジシール渓谷で会うことに同意した。しかし、マスードは私に対してその会議に同席するよう要請した。彼はまた、その会談は1988年12月10日から12月20日の間にしよう、その頃にはパンジシールに戻るからとほのめかした。

マスードとの会談で、私は3点を要求した。

- カーブル市民に食料を供給する輸送車両の通過の安全を保障すること。
- マスード軍の包囲下にあるバグザキラに駐屯する政府軍の通過の安全を保障すること。
- 約束の遵守。時間が大切であり、不測の遅れは不測の結果を招く。

私は、彼は自分の言葉を守るだろう、そして来るべき会談は成功するに違いないと確信した。ナジブラのことに触れると、マスードはひどくネガティブな印象を持っていることがわかった。

ナジブラはおれを消すためにさまざま策謀をこらしたがいつも失敗した、とマスードは語った。そして10年前からナジブラがマスードに宛てた手紙の話をした。その手紙の内容は最初は最後通告やおどしであったものが後では尊敬や希望やマスードを祝福する内容に変わっていた。しかし、ナジブラについて議論するのは私の仕事ではなかった。

美しいファルカール渓谷の滞在も終わりの時が来た。彼と別れてタロクァンに向かった。われわれは警備兵が運転する車で帰途につき、マスードは秘密の司令部に向けて去って行った。車で渓谷を下る間、私は渓谷の自然美、川の流れ、せせらぎ、夜になってファルカール渓谷の空をおおう星ぼしのきらめきを堪能した。ときどき静寂は虫の鳴き声で破られた。このような情景はすべて平

和で平穏だったころの私の子供時代の思い出の詰まっていたものだった。私は突然、ロマンチックな気分陥った。もしここにラブソングを持ってきていたら、私はそれを演奏し歌い、試作に耽るだろう。ファルカーン溪谷の美しさを歌った民謡の一節が脳裏をよぎった。

美しきかなファルカーン、  
心地よきかなファルカーン

車中で寝ていたわれわれは明け方、急ブレーキのショックで目が覚めた。午前6時だった。タロクアンに着いた。熱いシャワーを浴び、朝食で生気を取り戻した。そして前線を越える危険な旅に出発した。私は戦車隊の指揮官に連絡を取り、ムジャヒディン側から私をピックアップするよう指示した。そうすればあらゆる不測の事態を避けうる。われわれはタンクで前線を越えた。最初にヘリコプターが私を下ろした地点に帰ってきた。私はこの地区のカザクス村の民兵には連絡を取らなかった。タンク兵がマザーリシャリフのヘリコプター部隊と連絡を取り、私を下ろした地点でピックアップしろと伝えた。丘の麓についたとき、4機のヘリコプターが現れた。そのうちの1機が高度を下げ、3機はホバリングして待機した。私は戦車の中から這い出し屋根に登りそこからヘリコプターに乗り移った。すぐにマザーリシャリフ空港へ向けて飛行した。空港に着いたのは午後2時になっていた。そこで、私を待っていた特別機に乗り換えカブルへ帰った。

カブル空港に着くとヴァレニコフ将軍が車の中で待っていた。私はそのままその車でタジベグ宮殿のあるカブル南部の彼の私邸に連れて行かれた。疲れをとる暇も与えられなかった。一刻も早く私に会い話を聞きたかったのだ。彼の家に着くとすぐ大統領から電話がきた。大統領は「私邸で待っている。一緒に夕食をとろう」と言った。

ヴァレニコフ将軍は私とマスードが話し合ったことをとても喜んだ。彼はわれわれを鼓舞し勇気づけようとした。「君たちはアフガン人なんだ、兄弟なんだ。君たちは自分たちで和解しなければいけないんだ。そうでなければどんな和解があるというんだ？ それは君たちの問題なんだ。われわれは『なにをすべき』とか、『どうすべき』とかの特別なレシピを示すつもりはない。」彼はつぶやいた。「ご存じでしょう、副大統領閣下！ ソ連には今度のような会談を喜んでいない“ある機関”があるのです。彼らはマスードを軍事力で抹殺しようとしてい

る。しかし私はそのような考えを支持していません。マスードは彼の支配人民から支持されていると私は思う」。ヴァレニコフが“ある機関”と言ったのは、KGBのケーブル支局のことであり、そのトップであるザイツォフはわれわれがマスードと和解するのを喜んでいなかった。ヴァレニコフは、ナジブラ大統領はザイツォフの強い影響下にある、とそれとなく示唆した。ヴァレニコフ將軍はなんであれ、大統領は知らされているべきだと信じていた。たとえ、大統領が内部から和解のプロセスを吹き飛ばそうと考えていたとしても。

アフガニスタンからのソ連軍撤退期限が刻一刻と近づいていた。ソ連は、マスードとできるだけ早く妥協にたどり着きたかった。というのは、撤退軍を安全に彼の支配地域の近くを通過させなければならないからだ。ヴァレニコフとの会談は終わった。彼は自分自身のチャンネルを通してモスクワへ連絡した。しかしKGBサイドはわれわれの話し合いを喜ばなかった。

私はヴァレニコフの私邸から、直接、大統領の夕食の席へ向かった。大統領は心配そうに私を待っていた。ファルカールへの旅の結果を少しでも早く知りたがっていた。

われわれはテーブルを挟んで差しで向かい合った。われわれの他には誰もいなかった。食事をしながら、私は、ファルカールへの旅の詳細を話し、マスードとの会談の内容を委細漏らさず話した。私にはすべてを話す義務があった。しかし彼はまだ敵愾心を持っているように見えた。次に何をなすべきかを決めるためにそれを脇に置くことにした。

初めに彼は私のファルカールへの旅がとても心配だったと述べた。彼はパクティア州のハッカーニ司令官との交渉に出かけて殺されたファイズ・モハムマドの悲劇的な運命をほのめかした。彼は勇敢な友人の1人を失ったのだった。大統領はマスードとハッカーニには大きな違いがあることを知っていたし、マスードが人としての振る舞いをしたことを認めた。

彼の最初の質問は、マスードがイスラム原理主義者かどうかというものだった。私はそれは私にも判らない、と答えた。私はその質問をマスードに直にぶつけてみた。彼の答はこうだった。彼はイスラム教を学びたかった。しかし不幸にも戦闘が優先され修了できなかった。宗教学校であるマウラウィで学んだのも3カ月たらずだった。彼は善良なモスレムだが原理主義者ではない。彼は軍人であり、非常に礼儀正しく、決断力のある戦略課であり、確信に満ちた人物だと私は答えた。

大統領の反応は概ね明るいものだったが、ソ連がこの件を進めていることに懸念を持っていた。ソ連の長い歴史の中で、背後で何かをするということは自然であり、普通のことだと大統領は考えていた。アフガニスタンの歴史ではそのようなエピソードは枚挙にいとまがない。19世紀、ロシアはイギリスの侵略と戦うアフガニスタンのアミル・シャー・アリ国王を支援した。しかし、ロシアは、国王に事前の通知をせずに、裏でイギリス政府とある合意を取り交わした。その結果、シャー・アリ国王は戦場に取り残され、ほうほうの躰で国から逃げ出さざるをえなかった。これはロシアが過去に行った明白な裏取引の実例である。

政府のすべての構成員を疑いの目で見える情報機関出身の大統領は本源的に彼のすべての同僚を疑っていた。政治においては情報手段に訴えることは有害である。ファルカールを訪問したことで私の周辺に多くの困難が生じた。そもそも、1987年にハマー博士と会ったときから、大統領は私を疑いの目で見ようようになっていた。大統領は「科学的な政策」に訴えるのではなく、「ギャンブル的な政策」に訴えた。彼は近い同一部族の友人に何度も聞いたという。なぜムータットはファルカールから安全に帰還できたんだ、前内務大臣のファイズ・モハムマドが1980年、当時のムジャヒディン司令官だったマウラウィ・ハッカーニの招待でパクティア州を訪れたときは、約束の地点にヘリコプターで降り立ったときに、殺害されたというのに。しかもそのときはファイズ・モハムマドだけでなく同行者も全員殺された、噂だと死体は犬に投げ与えられたというのに。さらに彼はこうも聞いたという。「なぜムータットの場合はそうならなかったのだ？ ムータットはマスードに暖かく歓迎され、安全にカーブルに帰ってきた。なぜだ」これが大統領によるふたつのケースの比較類推であった。

親密な親戚を含めすべての人間に対して疑い深いという傾向があったにもかかわらずナジブラは礼儀正しさ、鋭さなどの長所を持っていた。この日の面談で彼は次の2点に関心を示した。

- ゴルバチョフの提案にマスードはどんな反応を示したのか？
- アフガニスタンの将来に関してマスードはどんな提案をしたのか？

マスードは提案を注意深く聞いていたが、彼もまた疑問を持っていた。マスードは国を繁栄させたいと熱望し

ているし、アフガニスタンの未来に野心も持っている。だが彼は戦争に疲れていた。戦争をしなくてよくなったら故郷のパンジシールの溪谷で過ごすつもりだ、と言っていた。ファルカールで私は小規模ではあったが、病院、学校、橋や道路などの建設事業が進められているのを目撃した。自分の国を進歩させ発展させようと献身している人間は決して愚かでファナチックな原理主義者にはなりえないし、国を暗黒時代に逆戻りさせたりはしないと私は思う。ナジブラはマスードほどの程度のナショナリストなのだ、と私に聞いた。ナジブラはマスードのことをよく知っていたが、私はその質問に答えざるを得ない。ソ連の侵略に対して国民を決起させるには2つの要素がある、と言ってマスードは次のように語った。第1はアフガニスタン国民の中にある「イスラムの伝統」、第2は「民族主義」である。それらがなければアフガン人を立ち上がらせることはできない。マスードは、アフガニスタン人としてのアイデンティティがとても大切だ、民族的な要素がひとつひとつをアフガニスタンという単一の目標に向けて団結させると言い、彼は引き裂かれたこの国を再建するために人びとが団結するよう毎日、神に祈っている、と言った。パキスタンの情報局は、他のムジャヒディン指導者のようにマスードをてなづけようと何度も試みたが、過去10年間、その試みは失敗した。彼は決してパキスタンに行かなかったと語り、マスードの民族主義的要素はわれわれにとって非常に重要だ、その要素はわれわれを団結させるだろう、もし彼がその優れた民族主義者としての資質を欠いていたらアフガニスタンは隣接する、あるいは周辺地域のイスラム諸国の干渉にさらされつづけるだろうと大統領はつけ加えた。

マスードはアフガニスタンからソ連軍が安全に撤退できるようソ連の代表と話し合う用意があり、合意ができればサラン峠周辺から彼の軍隊を引き上げてもいい、と約束したと私は大統領に告げた。さらにマスードはタロクアン地区でいま包囲下にある政府軍も安全に通過させるとも約束した。私は大統領に、現在両者間にある信頼感の欠如は解消することができるし、信頼しあう雰囲気も生みだすことができる、と言った。

私との会談中、マスードはあなたのマスード暗殺計画に触れた。そして、あなたがマスードに宛てた最新の手紙を見せた。こう話すと大統領は笑いながら、「マスードの言っていることは正しい。自分が国家保局の責任者をしていたときにはマスードを除去しようとして何度も試みた。われわれは戦争をしているのだ。われわれの側の多くの将兵がマスード側に殺されたり捕虜にされたりした。

そして、われわれも彼の側の人びとに同じことをした。われわれアフガニスタン人はかくも不幸なのだ。超大国がわれわれの国土で覇権を争っている。それを止めさせなければならない。われわれは兄弟としてお互いを抱擁する勇気を持たなければならない」と語った。

ヴァレニコフ将軍とヴォロンツォフ大使の会談が成功し、彼らがマスードとの交渉に成功すればソ連にとって前進であり、ヴァレニコフ将軍は元帥に出世するだろう、とナジブラは言明した。

私がファルカールを訪れていたとき、ヴォロンツォフはアフガニスタンイスラム協会の指導者ブルハヌディン・ラバニと会談するため、サウジアラビアのタイフを訪れた。タイフから帰って、彼はナジブラに会談の様子を報告した。ラバニは滞在しているホテルでパキスタン情報局員の厳格な監視下に置かれていた。ヴォロンツォフはホテルの廊下で偶然ラバニに会い、1対1で話したいと希望を伝えたとき、ラバニがムータットのファルカール訪問を知っていることに気づいた。相互に関連するこの2つの会談はいわゆるアフガニスタンへの「限定された規模の派遣軍」の安全な帰還に関するソ連指導部の不安を示していた。

## 12 撤退前のイベント

1988年12月10日以降、国家保安機関の余計な策動でアフガニスタン北部のタロクァンやクワジャガールの状況は劇的に悪化した。背後にあった意図は同地域をマスードより先に占拠しマスードとソ連代表の交渉の邪魔をしようというものだった。実際マスードはソ連当局と約束していた会談をキャンセルせざるを得なかった。このような陰謀があったにもかかわらず、交渉のためにパンジシール渓谷に入る決意をしていたマスードは北部アフガンの事態に巻き込まれなかった。パンジシール渓谷での会談の具体的な日時が決められるのを待っている間の1988年12月21日、私は彼からメッセージを受け取った。それは私がファルカールから戻った1週間あとのことだった。そこでマスードは予期しない理由で遅れたことを詫び会談を直ぐに開く希望を述べていた。

会談の遅れはKGBと国家保安省（KHAD）の共同作戦に起因した。彼らは私のファルカール訪問は失敗でマスードは決して交渉に応じないと宣言した。第40連隊の上級司令官はパンジシール渓谷奥地にあるマスードの本拠地を攻撃しサラン峠を包囲するため軍によるロケット砲撃隊を編成した。マスードは1989年1月20日、余儀なくされた北部での事態から解放されると、パンジシールへ急いだ。彼は1カ月以内に会談を行うと約束していた。明らかに彼の動きはKGBとKHADに監視されていた。

私はヴァレニコフ将軍とヴォロンツォフ大使にあてたマスードからの「6項目保証書」を受け取った。その6項目とは次のようなものだった。

1. ソ連軍が撤退中はそのソ連軍に対していかなる妨害も砲撃も行わないようすべてのJIA（ジャミアテ・イスラミ・アフガニスタン＝アフガニスタンイスラム協会）メンバーに命令する。
2. 撤退後、隣国であるソ連とわれわれの関係は強化される。
3. 私はパキスタン、USA、その他の西側諸国を含むあらゆる勢力およびすべてのタンジム（パキスタンに拠点を置く7つのムジャヒディン組織）と一切の関係を持たない。
4. 高速道路を通行する食糧輸送隊の通行を妨げないようわが軍のすべてに命令を発した。
5. 私は会談に向けて本部を出発する。会談は友好的な雰囲気で行われるだろう。

6. あなた方がこの提案に賛同するならその旨を伝えよ。（アフガニスタンのソ連軍司令官側が以上に異議がなければマスードは会議スケジュールとパンジシール溪谷に到着する件について詳細な実務情報を送ると言ってきた。彼が設定した会議日時は1989年1月27日であった）

状況は変化した。KGBとKHADは共謀して第40連隊を使ってサラン高速道路の両サイドにじゅうたん爆撃と集中砲火を浴びせることを決定した。第40連隊の上級司令官によってサラン溪谷沿いで軍事行動が開始された。

無辜の人びとに対するこの野蛮な行動を見てマスードはヴォロンツォフ大使に宛てた最後通告を私の執務室に届け、私はその内容に賛成するならヴォロンツォフに渡すよう頼んだ。1989年1月26日付けのそのメッセージの内容は下記の通り：

ヴォロンツォフ殿！

サラン溪谷とジャブルサラジで再開された最近の爆撃および犯罪行為の数々に対して、最後通告を発する。

次の点を指摘する。国際問題に関する最近のソ連指導部の姿勢は彼らが前任者とは違うとわれわれを確信させた。さらに彼らはアフガニスタン問題を対話によって解決しようとは決断している。ソ連指導部は10年におよぶ殺戮と敵意の後にアフガニスタン国民の精神を理解した、と。ソ連指導部は、わが国民を跪かせることはできないことを知るべきである。

残念ながら犯罪的で愚かな連中による圧力はわが国民の未来にとってまったく無意味な所業にすぎない。今のような時期に行われた、ショラエーネザルの統制下にあるサラン峠とジャブルサラジおよびその周辺地域におけるソ連軍の野蛮で無慈悲な作戦はこれまでに生み出されてきた同情心を無に帰してしまった。一方、ソ連側はあらゆる手段を使って弱体な現政権をアフガニスタンのムスラム国民に押しつけようとしている、とわれわれは見なざるを得ない。これは愚かで無駄なあがきである。

私は現ソ連指導部およびアフガニスタン国内に駐留するソ連の関係当局が、真実と現実を注視しそれを受け入れるよう希望する。



マスードの最後通告は力強い調子で書かれていた。マスードは内容を修正する権限を私に与えてくれていたが、私は何の修正も加えなかった。そしてソ連大使ヴォロンツォフを執務室に呼びオリジナルのペルシャ語版を手渡した。ヴォロンツォフは起きたことに対して失望し私のオフィスを去った。1989年1月27日のことである。この文書を翻訳して読んだ後、ヴォロンツォフは大統領執務室へ行きそれをナジブラに渡した。

大統領は私を執務室に呼んで、ヴォロンツォフにマスードのメッセージを渡したかどうか聞いた。私は「イエス」と答えた。なぜヴォロンツォフに渡したんだ、と彼は聞いた。私は「君に先に渡せばそれをヴォロンツォフに渡さないと思ったからだ。そうなるとソ連指導部はマスードの対応を知らないままにされてしまう。それにメッセージの宛先はヴォロンツォフだったから、彼が読むべきだ」と答えた。大統領は堂々たる態度で礼を言い、返礼としてマスード軍の基地を爆撃せよと命令を発した。大統領に言わせればマスードはソ連と交渉したのであって自分とではない、というわけだ。彼は誰であれ自分を無視して対話する人間を許さなかったのだ。

このような反応は私やヴォロンツォフ大使にとって意外ではなかった。われわれはナジブラは彼の個人的な利益が満たされなければ平和プロセスをダメにするかも知れないと思っていた。彼はマスードは絶対自分とは交渉しないだろうことを知っていて自分を大統領に据えたソ連当局との交渉を望んでいた。彼がサラン渓谷沿いの軍事作戦を開始したと告白したとき、それは国民和解と長期的な平和プロセスの観点から見て、彼の利益にならない、と私は説明した。そのような作戦は彼とムジャヒディンとの間のすべての架け橋を破壊するものであり、アフガニスタン国民にとって変わり目のこの時期には、大統領は忍耐、寛容、先見性を示さなければならない。われわれの間の議論は激しさを増した。だが、私はそのような政策には同意しなかった。ついに大統領は、現政府の方針に賛成できないのなら外国に大使として出て行ったらどうだ、と提案してきた。私はそれを拒絶して、彼に私がほとんど10年もの間アフガニスタン大使の仕事をしてきたことを思い出させた。もうこれ以上、国外に出て仕事する気はない、と伝えた。それ以上議論はせず挨拶して彼の執務室を出た。1989年1月27日のことだった。

大統領によるサラン渓谷の爆撃は私の信念を変えることはできなかった。彼の政策が問題の真の解決に向けて正しいとはとても言えなかった。

第40陸軍師団のグロモフ将軍は17年後に新聞『プラウダ(真実)』とのインタビューで次のように語っている。

問：率直にお聞きしますが、最も困難な時期は撤退期間中だったのではないのでしょうか。

答：しかしながら彼らはプロセスを本気で停止させようとしていたのだ。われわれは11月末にカーブルを離れる予定だった。しかし実際には撤退最終局面の1週間前に私はカーブルを離れた。これは公然たる秘密だがわれわれは強力な野戦指揮官たちといわゆる中立について合意に達していた。われわれは彼らを傷つけなかったし彼らもわれわれを傷つけなかった。もちろんアーマド・シャー・マスードとはまず最初に合意していた。しかしわれわれは突然モスクワから、砲撃によって彼のポジションを奪えと命令を受けた。あたかも彼がわれわれを攻撃しようとしているかのように、彼をターゲットにしてきた。そんな経験はいくらでもあった。それでわれわれは空っぽの洞窟を攻撃した。彼らは流血の公算が増大する方法ばかりを追求した。

グロモフ将軍の回答には3つの重要な点がある。ひとつはアーマド・シャー・マスード司令官と合意に達していたことを認めている点。これは私が合意に達していたように、真実だ。彼が撤退前に直接的な挑発があったというのはナジブラ大統領と彼の支持者KGBのことを指しており、サラン・ハイウェイ沿いの集落に砲撃を浴びせる行為によって怒りがかき立てられた。この命令は第40師団司令官に対してモスクワからまさに撤退直前に出されている。

グロモフ将軍は空っぽの洞窟を攻撃したと主張しているが、これは真実ではない。彼らは砲撃だけでなく空爆やロケット砲攻撃などすべての空軍力を動員している。それにより多くの人命が奪われ、惨劇が生まれた。マスードはこの挑発は撤退遅延の言い訳のためになされたナジブラと彼のパトロンKGBの行為であることを知っていた。それで彼は約束に忠実に何ら反撃を行わなかったのである。マスードはヴァレニコフ将軍にサラン・ハイウェイのソ連軍の安全通行を約束していたのでそれを守ったのだ。これが、マスードが死んだ現在でもヴァレ

ニコフ将軍とグロモフ将軍がマスードの寛容さを称賛する理由である。

私がマスードの陣地に対する軍事攻撃に賛成しなかったため大統領との関係は悪化した。ある日、出勤して執務室へ行くと、スルタン・アリ・ケシュトマンド前首相とその補佐官でPDPA執行会議委員のナジムディン・カウイヤニが来ていた。彼らはナジブラと私の間の緊張を取り除く目的で彼から派遣されて来たのだ。彼らは私の政府方針への不同意、非協力の態度を引っ込めろ、と迫った。ケシュトマンドは私の態度は共通の目標に向けて共同しなければならない時期に相応しくない、と言った。われわれは場所をケシュトマンドの執務室に移して約2時間話し合った。その結果、私は今の仕事をつづけることになった。2カ月後、ナジブラは再びマスードとの関係を修復して彼がアフガニスタン問題の「真の解決」を見出すよう働きかけてくれ、と頼んできた。私は彼の要請に対して保留しつつも、マスードとの関係修復の努力については約束した。条件と環境が一変した。

### 13 赤軍の撤退（1989年2月15日）

ソ連は自国の軍隊を約束した期限の3日前に撤退させた。公式統計によれば10年間の戦闘で死者1万3310人、負傷者3万5480人、捕虜311人を出した。アフガニスタンを去りつつ彼らは歌った。

われらは去る  
もう戻らない  
おお、アフガニスタンの山々  
そのすべての山や谷で  
あまたの愛しき者を失った  
もう戦(いくさ)の対価は払わない  
さらばアフガニスタン

第40陸軍師団のグロモフ将軍は彼の感想を求められて次のように語っている。

忘れがたきふたつのことがある。ひとつはサラ  
ン峠を越えたとき。もうひとつはアム・ダリア(ア  
ム河)を越えたとき。もう2度と振り返らなかった。

アフガニスタンを去ったソ連軍兵士は同じ感想を持っている。1989年2月13日、カーブル市の山懐で撤退式典が執り行われた。ナジブラ大統領とソ連軍将校団は撤退していく武装兵や戦車を閲兵した。

2月16日、午前9時、ナジブラは多くの問題を審議するため補佐官らと呼び寄せた。その日、私はナジブラが落胆しているのに気づいた。話し始めた時、彼の声は低くゆっくりで何を言っているのか聞き取れなかった。彼は最後に、ソ連兵はわが国から去っていった、いまやわれわれ、および国民はここに取り残された。われわれは何をすべきなのか？ このとき私はハティフとソラビを見た。国民の未来は不確実で予想できなかったが、この2人は意気軒昂だった。われわれは大統領を完全に理解しており彼と同じ感情を共有していた。われわれはこの重大さと大統領の責任を認識していた。この状況と課題にチャレンジするには、指導者は高潔なモラルと暖かい心、冷徹な頭脳を持たねばならない。最初に私は発言台に立って大統領および同僚に向けて演説した。私は喜びの感情を表現した。「今日は、われわれ、およびアフガニスタン国民にとって歓喜すべき日だ。われわれ自身

がわが国民の将来について考える日なのだ。われわれは自由だ。アフガニスタンの側から見ればソ連赤軍の撤退は信じられない出来事である。多くの複雑な要因があったにせよ、これは起きてしまったことなのだ。彼らはわが国土を去った。われわれは撤退があなた方や将兵にもたらす多くの衝撃を理解している。この重大な歴史的転換点にあって高い道徳心と精神を持ちつづけるよう訴える。われわれの前には難しい任務が山積している。しかし、どんなに困難で複雑な問題でも必ずや解決の途はある。われわれは諸君を支持し、常に諸君の側にある。」

大統領は私に顔を向けて笑顔で語った。「ムータット同志、君は本当の軍人だし、勇気ある男だ。わが国の状況はわれわれに深く考えるよう要求している。」私の発言を支持して、彼はつづけた。「君の意見は正しい。われわれはこれから、今まで以上に厳しい状況に直面するだろう。この任務を遂行するためには忍耐力と強靱な神経が必要だ。」大統領を含むわれわれは次の主要かつ重大な要素に信頼をおくことに合意した。

1. アフガニスタン人としての民族主義
2. 国家アイデンティティとしてのイスラム教

この方向性に基づいて政府とマスメディアに向けて布告が発せられた。大統領は関係する諸機関に対しても同様の命令を発した。

私がこの原稿を書いている現在、ナジブラ大統領はもうこの世にいない。彼はソ連軍撤退後7年目に悲劇的な死を遂げた。マスードもまた2001年に陰謀により殺された。ヴァレニコフ将軍は退役し、ボリス・グロモフはモスクワ州の知事をしている。今ここに彼の最新のインタビューを引用することは価値あることと思われる。これは2004年2月12日に発行された新聞『アフガン・エコー』に掲載された記事である。

## われわれは国際テロリズムの蟻塚を掘り起こしてしまった

現在から15年前の1989年2月15日、ボリス・グロモフ将軍はアフガニスタン領から撤退する限定された規模のソ連軍の殿(しんがり)を勤めた。彼は9年間のこの戦争を主題にしたレポートを、国の指導部に向けて書いた。この奇妙な戦争の目的に関してソ連 (USSR) 指導部でさえ曖昧である。彼らは中央ア

ジアのなかでも最も不可解な国のひとつであるこの国に対して軍隊を派遣する決定を下した。アフガニスタンからの撤退記念日の前日、TRUD(労働)紙の記者は英雄である前ソ連第40師団長であった彼に話を聞いた。彼は現在モスクワ州知事である。

問：アフガニスタン戦争が終わって15年が経ちました。あなたの中であの事件との関わりに何か変化はありましたか？

答：過去にも考えたし、今も考えているのは、われわれは国際テロリズムの蟻塚を掘り起こしてしまった、ということだ。アフガニスタンだけでなく全世界で。これはソ連指導部の無責任な決定だった。もっと正確に言えば、あの失敗はソ連指導部の誇大妄想の所産だった。アフガニスタンで起きた事件を評価するときに軍人たち、特に第40陸軍師団の責任を問う主張に同意できない。アフガニスタンでのわが軍の行動は第1次チェチェン戦争でロシア軍が執った行動と同じものだった、ということだ。結果はそれよりももっと悲惨だったが。もしわれわれが考えもなしに剣を右や左に振り回せば損害はアフガニスタンの時よりさらに大きくなるだろうし、政治情勢は違ったものになるだろう。戦争に勝つという任務はわれわれにはなかった。第40陸軍師団が行った軍事作戦以外にソ連国民は病院、学校、道路、施設、工場などを建設した。かの国におけるわれわれの任務の60%は平和維持だった。アフガニスタン国民はそのことを忘れないだろう。

問：9年間も戦争をして、それでもアフガニスタン国民はわれわれに善意を持っているとおっしゃるのですか？

答：最近わたしはアフガニスタン指導部から招待を受けた。私はアーマド・シャー・マスードと彼が死ぬまで親密な関係を持っていた。友人だったときえ言っている。われわれは第2次大戦で戦火を交えた軍人同士の交流をモスクワで行うことも企画していた。われわれは武力に訴えることは避けられるし紛争は平和的手段で解決しようという宣言またはアピールを発しようと思っていた。

問：イラクの「民主化」というアメリカの政策、

アフガニスタンで生起する諸事件、モスクワでの悲劇的な出来事などを勘案すると、そのような宣言はますます必要だと思われまゝ。「アフガニスタンの教訓」は記録しておかないと忘れられてしまいます。

答：地下鉄爆破事件を知ったとき、私の脳裏を駆け巡ったのはすべては内的な連関がある、ということだった。第1に、われわれがアフガニスタンに入った目的は「4月革命の防衛」だった。チェチェンに入った時も「ドゥダエフ体制から国民を守る」だった。そして今、テロリストを捕まえるために野蛮な手段に訴えざるを得ない。

問：アフガニスタンで最も辛い任務は何でしたか？

答：最も辛かったのは、毎日毎日、執務室で前日に起きたさまざまな惨劇の報告を聞かなければならなかったことだ。

問：正確に言って、最も難しかったのは撤退の時だったのでは？

答：難しかったのは撤退の準備であって撤退そのものではない。偵察を続けて正確な計画を立案した。そしてこれは普通のことなんだが、敵の願望を知ることによってだけ、一步一步行動を執っていける。もっと驚くべきことは敵以外の所にある。アフガニスタンの指導者だったナジブラはカーブル市や幹線道路の防衛のため3万人以上のソ連人将兵を配置するよう主張した。同じことをエドワード・シェワルナゼも繰り返したが、彼はあの戦争でとても否定的な役回りを果たした。私はそれに反対した。1985年以降はアフガニスタンで戦っているものは誰でも一刻も早くこの地を離ればそれだけ良くなる、と固く信じていた。したがってわれわれはその日が一日でも早く訪れるように努力した。

しかし彼らはプロセスを本気で停止させようとしていたのだ。われわれは11月末にカーブルを離れる予定だった。しかし実際には撤退最終局面の1週間前に私はカーブルを離れた。これは公然たる秘密だがわれわれは強力な野戦指揮官たちといわゆる中立について合意に達していた。われわれは彼らを傷つけないし彼らもわれわれを傷つけない。も

ちろんアーマド・シャー・マスードとはまず最初に合意していた。しかしわれわれは突然モスクワから、砲撃によって彼のポジションを奪えと命令を受けた。あたかも彼がわれわれを攻撃しようとしているかのように、彼をターゲットにしてきた。そんな経験はいくらでもあった。それでわれわれは空っぽの洞窟を攻撃した。彼らは流血の公算が増大する方法ばかりを追求した。

問：アフガニスタンでは野戦指揮官たちを平定するのに買収がより簡単な方法だ、というのは本当ですか？ 撤退に際してあなたは以前の敵に彼らの忠誠と引き替えに武器や弾薬を与えたように見えます。

答：いや、そうは考えなかった。最も効果的な方法は地方の長老、指揮官、宗教指導者らと協働すること、あるいは彼らに賄賂を渡すことだった。私は指揮官としてこういった目的のために予算を持っていた。諜報・防諜活動用にも持っていた。武器をアフガニスタンに残してきたが、これは敵の野戦指揮官たちに残してきたのではなくアフガン国軍に残したのだ。

問：撤退後、あなたやその他のソ連指導部はナジブラや彼の支持者を無慈悲な原理主義者の前に放置してきた、となじられましたか……

答：見捨てたとはどう意味か？ ナジブラはアフガニスタンの大統領として国家と国民を指導する責務を有していた。私はもう一度言いたい。彼の軍隊はよく装備されていたし十分な弾薬も残された。したがってわが軍が撤退した後、1年半カーブルを支配しつづけた。われわれはナジブラ体制への外交的軍事的支援を拡大した。しかし1991年にソ連が崩壊した後、ロシア指導部がナジブラを見捨て、彼を運命のなすがままに置き、諸協定を一方向的に廃止したのだ。彼らが以前の同盟者だけでなく多くのアフガン帰還兵をも放置したのだ。

實際上、1990年末までアフガン戦争の従事者たちがどんな生活をしてきたかについて、わが国の指導部はほとんど注意を払わなかった。彼らの多く、特に傷病兵は麻薬に溺れ、アルコールに中毒したりして失意のままに亡くなったりした。この状態は今でも少しも改善されていない。地方自治体や退役帰還



兵たち自身がアフガンやチェチェン、その他からの帰還兵たちを言葉だけでなく実際に面倒見ているのだ。帰還兵たちがつくったさまざまな社会団体が組織的な観点で強化されている。例えば、われわれの組織「戦場の同志」は現在150万人以上のメンバーを組織している。われわれはこれら健康をそこなったり家族を失ったりした帰還兵たちに治療を施している。全般的にみれば問題はいまだに解決からはほど遠いところにある。

## 14 ジャララバードへの侵入

赤軍がアフガニスタンから撤退すると同時に、パキスタンを根拠地にするムジャヒディンらはパキスタン軍事情報局 ISI の支援のもと、ペシャワールでムジャヒディン暫定政府を樹立した。彼らはパキスタン国境に近いアフガニスタン国内の都市をどこか占領してそこに暫定政府を移そうと計画した。ナジブラはパキスタンにいるムジャヒディンに対して、最低でもシェア 20% を渡すから全アフガニスタン人会議を創設しようと呼びかけた。この条件であればムジャヒディン組織は譲歩してくるだろうとアフガニスタン政府は考えた。しかし実際問題としてこのような提案は彼の弱みを反映したものだ。彼は自分の政府の政治的実力をよく知っていたが、誤魔化しをするしかなかったし、彼または彼の親しい友人たちの利益を最優先したのだ。

ソ連が撤退した後政府や党の上から下までを覆う「取り残された」という感情を考慮に入れて、パキスタンに足場を置くムジャヒディンのリーダーたちはその会議に代表を送れという提案を拒否した。そして彼らはジャララバード市に向けて全面的な軍事行動に打って出ることにした。ソ連軍が撤退して 20 日後の 3 月 6 日、侵入作戦が開始された。しかし 3 カ月後に彼らの目論見は失敗のうちに終了した。わが政府の観点から言えば、ジャララバードを守りきったのは、カーブルを防衛したのと同じ意味を持つ。このことは国内的にも国際的にもわが政府の「政治的な重み」を示した重要な勝利だった。軍の高官たちはジャララバードの防衛にさらに力を入れた。ジャララバード周辺の弱点箇所は兵力を再配置され、強化された。

大統領の目下の懸念事項は内部の反乱とムジャヒディンとの内通、とくにハルク派のそれだった。関心のほとんどは国内の紛争に集中された。ナジブラは、ソ連は国内問題については彼にフリーハンドを渡したと確信していた。その結果、グラブゾイ内務相は 1989 年 11 月 8 日首にされヴォロンツォフによって大使としてモスクワに連れて行かれた。彼の後釜にはワタンジャールが据えられた。大統領はジャララバード戦線には最も経験豊かな将校らを送り、他の州から予備部隊を送り込んで防衛戦を強化し、彼らを最新兵器で武装させた。

ムジャヒディンは 3 方面からジャララバードを攻めた。彼らはカーブル-ジャララバード補給路を寸断しようとは何度も試みたがことごとく失敗した。この戦いは彼らが

これまで行ってきたゲリラ戦と異なり、くっきりした前線を持つ「古典的な戦争」だった。陸軍参謀長デラワル将軍がジャララバード防衛の指揮を執った。政府側は強力な空爆によりムジャヒディン側の援軍を断ち、スカッドミサイルを発射して敵の弾薬庫と結集地点を攻撃した。これらの攻撃は非常に効果を発揮した。ムジャヒディン軍は政府軍の強靱な抵抗に直面した。ムジャヒディン軍は死者 4000 人、負傷者 8000 人という大損害を被った。政府軍はこの時初めてレーザー砲である「オレガン」を使用した。この武器は侵入軍を阻止する上で大きな成果を挙げた。

## 15 内部分裂

内務省は政府内の政府と化し、ほとんどがパクティア州の部族幹部によって占拠されている。彼らはパシュトゥーン族特有のアクセントで話し、濃い口ひげを蓄えている。就任期間中バブラク・カルマルでさえ、グラブゾイが率いる内務省に挑むことはできなかった。就任当初ナジブラは内務省を統制できると思っていた。なぜなら彼はタナイやグラブゾイらと同じく部族とのチャンネルを持っていたからだ。しかしそれは誤算だった。彼もまた、この省をコントロールできなかった。この2人の大臣はナジブラにとってトラブルメーカーであり、大統領に多くの頭痛の種をまき散らした。さらに彼はサンドイッチのように両側から圧力を受けつづけた。外側からのムジャヒディンと内側にあつて不満を持つハルク分子とパルチャム分子である。

大統領は国家保安省のなかに「国防特別軍」を創設して内部の謀反に備えた。この部隊は最新兵器を装備し高給が支払われた。彼らの任務はカーブル周辺を反対派の侵入から守ることと、内務省を支配下に置くことだった。ワタンジャーを内務相に指名することにより、ナジブラは彼に対するあらゆる反対行動の心配の種を断った。カルマルの信奉者はナジブラに対しても快く思っていなかった。崇拜対象であるゴッドファーザー＝カルマルに対する裏切り者であると公言していた。しかしパルチャム派の人間はハルク派分子が大統領への反感を裏で煽ることに対して直接的な対決を避け、自分たちを抑制していた。

1989年9月に大統領はひとりのハルク派将軍を逮捕した。彼はパグマンでヘクマチアールの代表と直接対話を行ったのである。捜査過程でハルク派とヘクマチアールのイスラム党との間で明白な関係が結ばれていたことを示す一連の証拠が発見された。この陰謀につながる将校36人が暴露され投獄された。ナジブラは彼らの自白調書をテレビで公表しハルク派がいかに信用ならないか示そうとしたが、ワタン党（祖国党：元のPDPA）執行会議メンバーである多くのハルク派分子はそれらの書類を公表しないよう大統領に圧力をかけた。その結果大統領は公表を諦めた。しかし、その後ハルク派は彼らの信用を落とすために大統領は書類を偽造したとして糾弾した。ハルク派と大統領との関係は危機的な水準にまで悪化した。

ある日私は大統領執務室で彼に会った。幾束ものファ

イルが彼の机の上に置いてあるのが目に入った。大統領は、それがハルク派が犯した犯罪的な行為の数々を記録した書類だと言って、そのなかのひとつを私に渡した。それは目次付きの名簿だった。その末尾には「これらの氏名は抹消されパキスタンへ送付されるべきである。署名：アサドゥラ・サルワリ」と書かれていた。ここにリストされた人びとは殺されたか抹消されてリストからさえ外された。これらの人びとの親戚は未だに彼らが帰ってくるものと思っ待ちつづけている。アサドゥラ・サルワリはタラキ時代の情報局長だ。後に彼はモンゴル大使、南イエメン大使に任ぜられた。サルワリはタナイのクーデタに加担した。クーデタが失敗に終わったとき、彼は適切な書類をもたず非合法にインドへ入国し、インド警察に逮捕された。彼は約2年間インドで投獄され、アフガニスタンのイスラム政府によって再逮捕された。1996年にマスードがパンジシール渓谷に退却したとき彼は今度はパンジシールの牢獄に入れられた。2005年にはカーブルに移され、後に釈放された。彼はアミン時代にアフガン人を数千人殺害した。

## 16 大統領と国防相

1990年1月24日、私は文化使節団を率いてモルダビアを訪れた。私はモスクワとキシニョフに約2週間滞在した。旅行から帰ったとき、大統領と国防相との間で軍事的な緊張が高まり切迫しているのを知った。私は大統領との会話を通して私なりの結論を引き出した。1990年2月12日、彼はタナイと会って彼が無責任で危険な行為をしないよう説得してくれと私に頼んだ。

ベトナム公式訪問以来タナイ将軍と私は相互に尊敬しあう良い関係だった。彼はたびたび私の執務室を訪れた。大統領はわれわれが会ったり訪問しあっていることをよく知っていた。タナイ将軍はあらゆる汚職とは無縁の、誠実、忠実、清潔な職業軍人だった。彼は政治家ではなかったし政治的な事柄にはいささかも関心を示さなかった。彼は10年以上も、アフガニスタンの隅々で敵対者と戦ってきた。

私は彼に電話して夕食に招待した。彼は招待を受け入れ、1990年2月14日午後7時、私のもとを訪れた。制服姿の彼はとても疲れているように見えた。家には私たちふたりしかいなかった。笑顔をつくり私を見つめながらタナイは言った。「君の友人は最近俺をイライラさせる。彼に何があったんだ。」私は言った。「大統領と国防相との敵対関係だぞ、分かっているのか？ 君たちふたりは普通人じゃないんだ。君たちが争えば国家や社会が傷つく。大統領は君のことをこぼしている。大統領と話し合って対立関係を解消してくれ。もしそれがうまく行かなければ、国防を損なうし敵を利することになるのだ。よく考えてくれ。もし市内で軍事衝突がおきたらどうなるかを。軍隊は最新兵器で武装しているんだから。」

大統領は状況を悪化させているし、問題を解決しようとしていない、とタナイは文句たらたらだった。つまり、国民と国の大義に献身するというのなら自発的に大統領を辞し、問題解決に道を開くべきだ。大統領は辞職して副大統領のひとりにアフガン国内の対話をまかせるべきだ。そうすればムジャヒディンに無意味な戦闘をつづける口実を与えないですむ。

われわれの討論は午後11時までつづいた。タナイはさらに言いつのった。大統領は彼の同僚を信じないばかりか彼のまわりの者を迫害している。彼は大統領に何度も恥をかかされたと言い、もし大統領が態度を改めないならば、その結果何が起きても自分に責任はない、と断

言した。さらに彼は大統領や首相になろうと思ったことなどない、自分はこれまでずっと軍人だったし、これからも軍人でありつづけるだろう、と強調した。タナイは私に大統領が党内に敵意をかき立てたりしないように働きかけ、党の上層部と話し合っ問題解決するようにしてくれ、と頼んだ。

翌朝、タナイ将軍との面談について報告するため、大統領に電話した。彼は明日、私の私邸で夕食をしながら話したいと答えた。

翌日の1990年2月16日、ナジブラは私の家を訪れた。彼は民族服に身を包み肩には「シャウル」をひっかけ白い「パコウル」を被っていた。警備兵が私のアパートのまわりを取り囲んで警備した。ちょうど1年前、ソ連軍がアフガニスタンを去って行った日だった。大統領は私とその日を祝いたかったのだ。この時、私の家族はニューデリーに移り住んでいた。

大統領は強い幻滅感と不幸感に囚われていた。彼は誰が彼の哀しみを共有してくれるのか知らなかった。彼の友人や出身部族の連中は彼に重圧をかけつづけていた。彼の苦悩を私はよく理解できた。彼は出身部族のことについて多くを語り、時たまそれを激しく攻撃した。彼は彼らをどう扱えば良いか判らなかった。彼らは未だに「蒙昧」の民だと言った。その後、彼は私とタナイ国防相との話し合いがどうだったかを聞いた。

統治機関、とくにその上層部において信頼は必須の要素である。私は大統領に破滅的結果を招く不測の行為を抑制し、問題解決のために協力することが大事だとアドバイスした。私は彼と大統領との間の敵意が政府と軍内部に複雑な緊張関係をつくりだしていること、タナイ将軍は自制心と忍耐力を持っており、不信感を取り除いて解決の道を見出すために祖国党からの調停団を受け入れる用意がある、と伝えた。すると突然、大統領は興奮して大声で叫んだ。「違うぞ！ ムータット同志！ 彼は不誠実な人間だ。判っているだろう。ヤツは自制していると言いながら今日、重武装した部隊を司令部の周囲に配備したじゃないか。タナイは非常時体勢に入ったんだ。いいか、ヤツはパキスタンの将校どもの手の内にある道具なんだ。パキスタンの将軍らが裏からヤツを操っているんだ」

議論は午前2時までつづいた。大統領は最大限の自制をすると約束したが、それは大変に難しいことが判った。彼らはもともと無謀で感情的なのだがハルク派は強烈な反ナジブラ・キャンペーンを開始した。彼らにとって口実を設けるのはたやすい御用だった。彼らはナジブラ政

権を倒した後の体制をどうするのか、何も明確な政治的将来図やアイデアを持っていたわけではなく、ただ単にアミンやタラキの復讐をしたかっただけなのだ。アフガン国民はいまだにタラキやアミンが支配したあの忌まわしい時代をよく覚えていた。タラキやアミンの名前はサルワリ、タルーンその他の野蛮で犯罪的な行為を働いていた彼らの同僚たちの名前と同列なのだ。

ナジブラはハルク派の動機と目標をよく知っていた。特別任務部隊は国防省側のいかなる行動に対しても厳重警戒態勢下に置かれ、警察隊はカーブル郊外に配置された。この2、3日、彼ら2人と行った仲介交渉は無益に終わった。モスクワとイスラマバードはこの争いの根源は何かトレースしつづけた。2人は外国選手の手中にある「歩」だった。疑う余地もなく私の説得の入る余地はどこにもなかった。もはや緊張を解消させることは不可能だった。私は1990年2月18日、家族と病気の母をカーブルからニューデリーへ移した。もちろん、私はこのことを事前に大統領に伝え彼の了解を取りつけていた。そして同時に、もう一度、タナイ将軍に電話をしてアフガン国民の利益を損なわないよう行動してくれと進言した。タナイ将軍は私に、季節がよくなるまでニューデリーに長期滞在した方がよいとアドバイスした。彼には妥協する用意がないこと、背後にはパキスタンの暗黙の支援があること、を私は理解した。

カーブルで国防相がクーデタを起こしたというニュースを私はニューデリーで、インドのラジオやテレビの放送で聞いた。翌朝、マスメディアはクーデタの失敗を大々的に報じた。国防相は大統領官邸ほかの目標を爆撃したが大統領は逃げおおせた。バグラム空軍基地が反乱軍の臨時司令部とされた。カーブル南部に布陣する空軍第7師団と東部の戦車旅団がカーブルに向かって移動した。大統領は敵が攻めてくる方向を捕捉し、両方面に阻止線を張り侵入を許さなかった。特別任務部隊の第15部隊は南部からの侵入を防ぐとともに国防省内部の反乱軍総司令部を包囲した。タナイ将軍側将兵の多くは殺害されるか捕虜とされた。反乱中枢は殲滅された。クーデタの失敗を聞いたタナイ将軍は親しい友人らとともにバグラム空軍基地から飛行機でジャララバード空港経由でパキスタンに逃れた。彼らは着陸した飛行場でパキスタン当局に投降した。

ナジブラはクーデタを乗り切った。彼はニューデリーにいる私に対して、すぐカーブルに帰れ、とメッセージを送ってきた。私は1990年3月12日、ニューデリーからカーブルへ戻った。そしてすぐに外務省に向かった。



大統領官邸は破壊されたので一時的に大統領執務室はこちらへ移されたのだ。執務室は地下だった。私がそこに入ったとき、大統領は幸せそうに見えた。彼は私の方を向いて言った。「ムータット同志！ 私の予測が正しかった。タナイ将軍が ISI とヘクマチャールに通じていたことが判っただろう？ アフガニスタン国民はヤツの所業を忘れないだろう」ナジブラは不誠実なパシュトゥーン族をこき下ろし、パルワン州民の愛国心を誉め称えた。彼の演説はアフガンテレビで繰り返し放送された。彼が北部平原地方国民の勇気と愛国心を賛美するとき彼は気持ちを高ぶらせていた。ナジブラはカーブル生まれだったにもかかわらず、共同体システムに固執し、部族体制の外に出ることができなかった。時が流れ彼は再び自分の部族に信頼を置くようになった。クーデタを失敗に終わらせた後、ナジブラは権力を自分に集中させなかった。彼は部族を考慮し、ソ連のアドバイスに従った。彼はワタンジャールを国防相、パクティンを内務相に任命した。2人とも大統領と同郷の、パクティア州のズルマットという小さな村の出身だった。このことは大統領の政策が部族の利益に傾斜していることを証明した。若く、勇気があり、カリスマ性もあり、クーデタの試みを退ける上で決定的な役割を果たした国家保安省第5大隊の指揮官ジャラル・ズメンダの名前がなぜ出てこないのか疑問が沸く。実は彼はヘラート市内でハレクィヤールを警護中に殺されたのだ。ハレクィヤールは負傷したが後に首相になっている。これは噂に過ぎないが、ジャラルは国防省が絡むある陰謀によって殺されたという。

大統領の政策には選り好みがありアプローチの仕方も他の誰とも異なっていた。彼はいつも何年も付き合っている近しい友人に対する不平不満を漏らしていた。私に対する不平も回りの同僚に漏らしていたことを後になって知った。しかしそれらの不平不満は正当化できるものではなく逆に彼の疑り深い性格を示していた。同僚がふたりでいるのを見ると彼らが何かを企んでいるのではないかと疑った。このような性格が、党分裂の主要因だった。すべての指導者にとって法律と義務に忠実であるのは最大級に重要なことだ。もしこのふたつの原則がないがしろにされれば、困難のみが支配することになる。彼は鋭敏さと温和な姿勢にもかかわらず、同僚を信頼できなかった。これらを総合すると、彼はゲルザイ部族、特にパクティア州、パクティカ州に住む部族の狭い利益に献身しているとしか思えない。皮肉にも彼に対する陰謀にゲルザイ部族だけが巻き込まれた。彼の部族政策は次のゲルザイ部族出身者を重要ポストに就かせたことに現

れている。

- アブドゥル・ラヒム・ハティフ：副大統領
- モハムマド・ラフィ：副大統領
- モハムマド・イサック・トキイ：大統領事務次官
- アスラム・ワタンジャール将軍：国防相
- ラズ・モハムマド・パクティン：内務相
- アブドゥル・ワキル：外相

ナジブラ治世下では他にも主要な多くの高官にゲルザイ部族出身者が割り当てられた。

アフガニスタンは多様な民族からなる国家である。どんな政府であってもすべての民族やエスニックグループに対して十分な配慮を行い国民のすべての構成員が能力と専門資格に基づいて平等の権利を持って政治に参加できるようにしなければ成功はおぼつかない。歴史的リアリティを無視すると破局的結果を招き、国家を悲惨な状態に陥れる。ナジブラは他の民族やエスニックグループの権利を無視したばかりでなくゲルザイ族以外のパシュトゥーン族の権利も無視した。資格、経歴、忠誠心などに関係なく小さな村であるズルマットから100人以上が将軍の地位に就いている。ドゥラーニー部族はパシュトゥーン族の中の支配的な部族であり、この250年間、アフガニスタンを支配してきた。しかし彼らは激しい差別や屈辱を受けた。たとえば政府部内のトップ層にいたふたりの人物、副首相のハキム将軍や航空相のハミデュラ・タルジは政府部内のポストをはく奪されただけでなく明確な理由もなく裁判にかけられた。

1990年3月以降、私はしょっちゅう大統領と会う機会があった。ある時、彼は言った。「大統領職にどんな価値があるというんだ。罪のない同胞たちの生命の価値に見合うだけの価値があるというのか。われわれは神に対して責任がある。どんなアフガン人でも、もしこのポストに興味を持つものがいたらここへ来て国民の安全に責任を持つべきだ。そうすれば私はいつでも権力を渡すだろう。」さらに次のようにつづけた。「私は前国王に何度も復位するよう提案した。しかし彼はそれを受諾する勇氣を持っていなかった。前国王はまず最初にアフガニスタン国民が完全に統一を取り戻すべきだ、それから両手を広げてアフガニスタンに呼び戻せと言っている。そうすれば復位する、と。もうろく老人の戯言だ。外国勢力との取引の結果、前国王が復位を強制されでもしないかぎり、ムジャヒディン指導部だって受け入れやしないさ。」ナジブラの判断は正しかった。かつてパキスタンを根拠地とする7派（タンジム）のリーダーのひとり

アブドゥル・ラブ・サイヤフがこう言ったことがある。「もし前国王がアフガニスタンを訪問したかったらアイライン (Surma) を引いてこい」と。彼はムスリム (イスラム教徒) の伝統について言っているのである。ムスリムはイード祭のとき神に捧げる生贄として羊の首を落とす。そのとき羊の顔を洗いスルマ (アイライン) を引くのだ。

この機会を利用して、私は大統領に 100 年前のツアー時代のロシアとインドを植民していたイギリスとのグレートゲームを思い起こさせた。100 年前のロシアの新聞『ノーボエブレミア』が掲載した記事を最近の『ジャパントイムズ』が紹介しており、それを切り抜いて持っていたのだ。

#### 『ノーボエブレミア』 (1888 年 10 月 13 日)

インド植民地政府はアフガニスタンを政治的緩衝地帯とするのはコストがかかる割に不確実であると遅かれ早かれ気づくであろう。それ以上にアフガニスタンが現状のまま存在しつづけることはロシアだけでなくイギリスにとっても経済的に不利益である。したがってアフガニスタン紛争を解決するためにはアフガニスタンを民俗学および地理学的観点から画然と分割することもあえて検討するのは賢い方法であろう。

ナジブラはこの記事に強く惹きつけられた。私は大統領に 1 世紀も前に書かれたこの記事を読み上げ、1 世紀後の今の状況とを比べて、100 年前と状況が何も変わっていないことを知るべきだ、と言った。「グレート・ゲーム」のプレイヤーもほとんど同じで、19 世紀のロシアは今のソ連、イギリスは今のアメリカ合衆国である。現下のアフガニスタンの情勢は 100 年前のそれと変わらないのだ。われわれが今、直面している問題は 100 年前のその繰り返しのものだ。もしわれわれが根本的な解決策を実施しなければ紛争と不安定は次の世代に引き継がれるのだ。私は大統領に対して、歴史とは人間の本性を絶えず変革していくものであり、大統領はアフガニスタンのために正しい解決を導く強い信念を持つべきである、今、直面している問題や紛争に次の世代を直面させてはならない、と。

私は次の史実に大統領の注意を喚起した。1901 年にアミール・アブドゥル・ラーマンが死んでから 90 年が過ぎた。この間に 9 人がわが国を支配した。1 人あたりの平均統治期間は 10 年である。この間の王や大統領のうち 6 人は殺害され 3 人は逃亡または追放された。アフ

ガニスタン現代史においては為政者の葬儀が行われたことがない。これはアフガニスタンを支配する者にとって宿命だ。この、アフガニスタンを支配する者の運命を変更することが可能だろうか。私は言った。「イエス、国民の権利、投票、判断を尊重する限り、それは可能だ。われわれには失敗は許されない。歴史は国民が作るのだ。」大統領は私が言うことを注意深く聞いていた。私は自己満足で喋っていることを大統領に詫びた。「大統領、あなたはもちろんアフガニスタンの歴史を知っている。もう一度それを思い起こして欲しかったのだ。」

為政者	時期	運命
● アミール・ハビブラ王	1919	殺害
● アミール・アマヌラ王	1929	逃亡
● ハビブラ・カラヤニ王	1929	殺害
● ナディル・シャー王	1933	殺害
● ザヒル・シャー王	1972	逃亡
● モハムマド・ダウド大統領	1978	殺害
● ヌール・M・タラキ大統領	1979	殺害
● ハフィズラ・アミン大統領	1979	殺害
● バブラク・カルマル大統領	1986	逃亡

大統領はほとんど寸分違わぬ為政者の運命を思い起こして改めて驚いた。これは辛い事実だ。私がアフガニスタンの歴史を大統領に思い起こさせた目的は彼に明確な結論を引きだしてほしかったからである。歴史を鏡にすれば正しい結論を引き出すことができる。いまは、アフガニスタンの歴史において彼にどのような運命が待っているかよく考えてみる絶好のチャンスなのだ。過去と同じ運命なのか、それともそれを変えることができるのか。このような悲劇的な歴史の根源はわが国の社会的経済的後進性にある。しかしこのような歴史はひとりアフガニスタンにのみ限られたものではない。同じような傾向は同じようなバックグラウンドを持つアジア諸国に広く蔓延している。たとえばパキスタン、バングラディシュ、インド、等々。大統領の心理は乗り切ったばかりのクーデタにまだまだ大きく影響されていたが、権力を国民のものとするために必要なことは何でもするという約束をすべきだという私の意見に完全に同意した。

## 17 ナジブラと彼の対アメリカ政策

合衆国はソ連のアフガニスタン侵入を常に激しく糾弾しつづけてきた。カーター大統領はソ連の行為はアフガニスタンへの侵略である、との断定を行った。合衆国政府はカーブルにある大使館を閉鎖しバブラク・カルマル政府の正統性承認を拒絶した。そしてそれを外国が打ち立てた政府と呼んだ。一方、カルマルは合衆国への対抗意識を隠さずカーブル市街に彼の支持者を動員し合衆国は内政干渉している、と抗議を行った。彼の反アメリカ政策は完全にブレジネフ・ドクトリンに合致するものだった。カルマルにとって新規性は何もなかった。彼は心底からのソ連指導部支持者であり、彼のマルクス主義者としての信念がアフガニスタンの現実を見る目を曇らせた。彼は熱烈な雄弁家であって30年以上も反アメリカ演説を行ってきた。彼は小中高校や大学から若い支持者を集めてきて、街頭で反アメリカのスローガンを叫ばせた。スピロ・アグニュー米副大統領がカーブルを訪問したときは彼の車に対して生卵を投げさせる機会となった。

1986年、ゴルバチョフがソ連でペレストロイカを始めた時、カルマルに終わりの時が来た。彼は冷戦政治の申し子だった。冷戦に終わりの時が来て、彼や彼と同類の第三世界リーダーたちは退陣した。アフガニスタンでは、ナジブラが国家と党のリーダーとして登場した。

ゴルバチョフが始めた新しい政治路線に沿ってナジブラは合衆国およびその他の西側諸国に対して柔軟な政策を採り始めた。ソ連とアフガニスタン側の政策変更にもかかわらず合衆国は従来の姿勢を変えなかった。つまり、カーブル政府は国民の信託を受けておらず合法的な政府ではない、というのである。さらに、ソ連が撤退したからといって合衆国はアフガニスタン問題での自国の政策は変更しない、と主張した。ナジブラは当地域での合衆国の現実の影響を認識していたので、彼は合衆国政府との公式関係を作ろうと絶望的な努力を行った。しかしそれはすでに時を失っていた。ナジブラはかつて合衆国の正式代表と同席したことがあり自分の能力を過信していた。合衆国は対アフガン政策を変える、と信じていた。彼にとってソ連外相シュワルナゼは合衆国と関係を持つ信頼しうるチャンネルのひとつだった。彼らは親友だったし、政府の承認を合衆国に求める仕事はこのシュワルナゼの手中にあったから、彼は喜んでナジブラの提案を受け入れた。ナジブラもまたその他の西側諸国とコンタ

クトを取ろうとした。1990年9月には彼は国連総会に出席し様々なチャネルを通してアメリカ合衆国とのチャネルを開こうと努力した。しかし、合衆国国務省はアフガニスタン大使館経由のいかなる公式書簡も受け取らなかった。アフガニスタン側はしかたなく、郵便局経由で送ったほどであった。しかし、合衆国側は何の反応も返さなかった。ナジブラはニューヨークに滞在した数日間にアメリカに住む多くのアフガン人と会った。合衆国側の人間でナジブラが唯一会えたのはソ連研究の専門家である国際平和カーネギー基金のセリグ・ハリソン氏だけだった。ハリソン氏は国務省とアメリカ議会に密接な関係を持っている人物だった。ナジブラは楽観的で会議に幾ばくかの期待を抱いていた。合衆国から帰って、ナジブラはアメリカ人は彼に対して2度誤りを犯した、と言った。ひとつ目は彼が高校生の時、奨学金を与えなかったこと、ふたつ目は今回で、彼の政府を認めなかったことだ、と。彼はハリソン氏にもこのことを話した。ハリソン氏の反応はどうだった？ と私は彼に聞いた。するとハリソン氏は「アメリカ合衆国は大国でそう易々と政策を変更できない。合衆国政府はこの10年間国内世論を納得させるために君の政府に反対するキャンペーンを行ってきた。外交政策を変更するのは簡単なことじゃないんだよ。」さらにハリソン氏は「第2にはたとえソ連がアフガニスタンから撤退しても、それは和解と平和の印となるわけじゃない。君の政府の継続を支える、選挙で選ばれた合法的な支持母体があるわけじゃない」と述べたという。このような反応があったにもかかわらず、大統領は重ねて合衆国政府と公式な関係の樹立に努力すると強調した。彼は合衆国はパキスタンにも満足していないし、ムジャヒディンにも飽き飽きしている、と主張した。合衆国の切り札はただひとつ、前国王だけだ。そして国王は折に触れて発する声明で西側の世論を欺いている、とも語った。合衆国と正式な関係を構築するというナジブラの努力は失敗に終わった。

## 18 私のユーゴスラビア訪問

1989年6月25日、私はユーゴスラビア当局の招待でカーブルを発ちベオグラードへ向かった。ベオグラードへの途中、私は2日間、モスクワに滞在した。出発前、この旅の動機と予定を大統領に説明し同時にもしこの旅の間に前国王の家族で影響力のある誰かと会う機会があったら何か伝えたいことがあるか、と聞いた。大統領はユーゴスラビアへ私が旅行することに感謝の念を表明した。なぜならこの旅は非同盟諸国会議の直前であり、私が前国王の家族と会うことを彼は秘密にしていたからだ。

ベオグラードでの5日間の滞在中、いろいろな国の大統領や党の書記長やその他の指導者たちと会った。公式行事に参加した後、私はジュネーブを訪れた。私は前国王の近い親戚であるザカリア兄弟と議論を交わした。インターコンチネンタルホテルで行ったその会見において、彼らはナジブラを激しく攻撃した。ナジブラがKHAD長官だったときにアフガニスタン国民に残虐な行為を働いた、と言うのである。彼らは、前国王あるいは彼の親戚の誰もナジブラとの交渉には応じない、と断言した。

深夜になって、ナジブラ・ザカリアはローマにいるスルタン・マームード・ガジに電話をかけ、私がローマ国際空港に着く日取りを伝えた。ガジは前国王の義弟で前国王を支援していた。彼とは、ダウド内閣で一緒に仕事して以来、良好な関係にある。1973年に彼は民間航空局局長で、私は郵便通信相だった。当時われわれは政府が雇う専門家や従事者の資格を決める臨時委員会で一緒に働いた。

両市における私の交渉や会見はプライベートなものであり、大統領の許可を得てはいなかったが、前国王の義理の息子でロンドンに住んでいるアジズ・ナイムは、ナジブラが私に交渉する権限と信頼を寄せていることは理解してくれた。われわれは交渉を始める仮の合意に達した。

数日後にカーブルに帰り、私は大統領にジュネーブへの旅行と交渉についてありのままを報告した。しかし彼はジュネーブでの交渉に私を正式の政府代表とする件に同意しなかった。彼はアジズ・ナイムとの交渉にはワキル外相とサルワル駐インド大使を送ると主張した。ふたりの妻はナジブラの妻と三姉妹だった。それで私は友人のザカリアに電話をかけ、アジズ・ナイムと約束した交渉をワキルおよびサルワルのふたりと進めるようアレン

ジを頼んだ。すると彼はワキルとの交渉を頭から拒絶した。ワキルは交渉相手として尊敬に値する人物ではない、という理由だった。私はこのことをナジブラに伝えた。彼はなぜアジズ・ナイムはワキルと会うのが嫌いなんだ、と驚いた。彼は私に会見を再度アレンジするよう頼んだ。私の無理な頼みを聞き入れて、王室に近い親戚であるザカリアはアジズとワキルの会見をアレンジした。会見は1989年7月、ジュネーブで行われた。後に聞いたところによると、アジズ・ナイムは会見にとっても不満足だったという。先方の言い分によれば、ワキルの考え方や説明は外交常識から外れていたという。希望は雲散霧消した。



## 19 ホストの敗北

ジャララバードでの敗北の後、パキスタン軍統合情報局（ISI）は、どんな犠牲を払ってでも国境近くのアフガニスタンの都市をどこか占拠しようと試みた。広範な戦争でゲリラが失敗するのを見て、西側の政策担当者はムジャヒディンへの支援の仕方について議論を始めた。ジャララバード防衛の成功はアフガニスタン政府のプレステージを高め、西側観測筋に幻滅感を与えた。そのような事情から ISI はホストを第2のターゲットに定めた。

ソ連軍が撤退してから、アフガン軍司令部は緊急の必要がない地域から目下の焦点になっている地域へ軍隊の再配置を行った。だがここに、ホスト戦線が抜け落ちていた。ホスト要塞の弱点を考慮すると、後方の防衛ラインに戦力を配備すべきだった。大統領、国防相、その他の高官たちのほとんどはパクティア州ホスト地域の出身だったから、ホスト要塞を失うことは彼らにも不名誉だった。彼らはあらゆる手段を尽くしてもそれを守ろうとした。ホストは北東から南西へ走るおおよそ長さ60km 幅30kmの狭い地域である。パキスタン平原と丘に面した東側を除く三方を山に囲まれている。物資輸送ラインはザドラム溪谷からガルデズであり、他にはラクダを使ったルートがある。配置された将兵の数はおよそ1万3000人。国防相の提案により、大統領は要塞防衛に部族との強いつながりを持つ多くのハルク派将校を充てた。

前国防相・内務相であったグラブゾイはホスト住民から大統領よりも強い支持を得ていた。陰謀によってホスト防衛ラインの北翼がムジャヒディン軍に付き添った4000人のパキスタン軍に対して開放された。それに気づき補強がなされた時にはすでに遅く、前線はすでに抵抗能力を失っていた。捕虜になった将兵のうち、部族出身でない者は特にひどい仕打ちを受けた。ナザル・モハンマドはパキスタンでの仲介交渉から帰ってきた。彼はパクティア州出身で現地やパキスタン国境沿いのパシュトゥーン部族民とコネクションをもっており、捕虜釈放交渉を行った。

ホスト陥落の後、落ち込んでいる大統領と彼の執務室で会った。彼はパキスタンの機械化部隊4000人が前線を越えてきたと言った。彼は同日の午前11時に開かれる祖国党の執行会議で報告する予定になっていた。私はホストの陥落は軽々しく考えるべきではない。降伏の背後にあるものをよく調査検討せねばならないと強調した。

「ホスト要塞は十分な弾薬を持っていて侵入軍のいかなる攻撃も撃退できる強さを持っていた。背後には内通があったはずであり、それを究明して罰すべきである。」

私が説明している間、彼は心配そうに私を見つめていた。最後に彼は沈黙を破り、私に言った。「ムータット同志！ ワタンジャール国防相を裁判にかけろと言うのか？ 訊問すべきことがあるとすれば陸軍参謀長のデラワル將軍だ。墓穴を掘るような失敗を犯して国軍に甚大な損害を与えた連中全員だろう。」彼の主張に答えて私は言った。「ナジブラ同志！ 誰に責任があるかを論じるのは早すぎる。あなたは軍の最高司令官だ。われわれはまず、パキスタン軍の捕虜になっている1万3000人の将兵の運命について話し合おう。考えてみよう、第1に、兵士にとって戦場で英雄として死ぬのと指揮官に裏切られ捕虜として死ぬのとでは大違いだ。第2に誰が政府にとって犠牲の大きいあの攻撃されやすい軍事拠点を守っていたのか？ これらについてあなたは十分に知っている。ソ連軍の撤退以前、ホスト要塞はハッカーニが出没する溪谷経由で弾薬を供給していた。その後、ホスト要塞への物資輸送は空路に頼るようになった。政府側はホスト空港への離着陸時におよそ85機の輸送機を失った。空港はパキスタン国境に隣接しているから常に砲撃にさらされていた。」私は議論をつづけた。「誰も1万3000人の将兵の命を弄ぶべきではない。ソ連軍の撤退後、部隊の戦術配置は変更されるべきだった。私の意見ではホスト要塞は西側山岳部にすべて撤退させるべきだった。そして指揮所は山頂部に設営してゲリラの動きを監視すべきだった。このように布陣すれば次のような利点がある。

- ガルデズ市、ロガール州、ガズニ州の安全を高められる。
- カーブル-ガルデズ間の供給ラインを無傷のまま開通させられる。
- ゲリラの動き全体をコントロールできる。
- パキスタンを拠点とするムジャヒディンが軍事基地を作ろうとしても空爆によって撃破できる。

私の強烈な分析を聞いて大統領は反論できず黙っていた。大統領は私が彼の部族政策、そしてそれは大統領自身に跳ね返ってくる部族政策を批判しつづけていることを理解した。役に立たない連中を將軍職に就けただけでなく、彼らを軍の指揮官や責任ある者たちの上につけたのだ。そして最後に、このような部族優遇政策の対価を払ったのはアフガニスタン国民自身だった。ホストの戦

いで捕虜になった兵士の大半は、非パシュトゥーン族の、ハザラ、タジク、トゥルクマン、ウズベク、その他の部族出身者たちだった。この地方のパシュトゥーン部族民は徴兵を免除された。

私との朝の緊迫した議論を終えた大統領はもうひとつの闘いである祖国党執行委員たちとの会議に急いだ。後に私は大統領は激しい批判にさらされていたことを知った。なぜホストが陥落したのか、国防相は本当の理由を説明できなかった。大統領は神経質に執行委員たちを説得しようと試み、また困難なときに大統領を批判しつづける私を批判した。そして最後に、ホストでは内通があったこと、さらに指導部の怠慢を非難する決議を採択した。一方、ククチャとアムダリア河岸のクワジャガールがムジャヒディン軍の手中に落ちた、との報せが入った。この事実は軍全体の士気を沮喪させた。ふたつの戦略的に重要な都市を失ったことはアフガン問題解決交渉における政府の立場を弱めた。

## 20 病気がちの首相

先に述べたようにハレクィヤールはヘラート州での反対派との集会の際に負傷した。彼はカーブルにある軍の病院に移送された。大統領への忠誠心のお陰で彼は首相に選任された。彼の専任にあたってはソ連が決定的な役割を果たした。噂によれば彼はソ連の将軍たちに黄金の骨董品を贈ったという。パルチャム派をなだめるために大統領はバブラク・カルマルの弟マフムード・バリアライを副首相に就けた。ソラビ博士はスルタン・アリ・ケシュトマンド副大統領に取って替えられた。そしてソラビは副首相に任命された。ケシュトマンドはソ連軍がアフガニスタンに存在していた10年間、首相を勤めた知的で経験豊かな人である。しかし彼は新しい役職に満足せずカーブルからモスクワへ行ってしまった。

愛想の良い紳士ではあるが首相の座はハレクィヤールには余りにも重荷だった。彼はそのポストに相応しい能力を持っていなかった。不決断、能力不足、病気などの理由で日常の仕事も満足に行えなかった。温厚な性格であったにもかかわらず、彼はアフガニスタン史上で最も不人気の首相のひとりになってしまった。政治アナリストやコメンテーターはこのような曲がり角の時期、最も責任ある地位に彼が任命されたことに驚いた。政府の危機は極限に達していた。国民はそつがなく鋭いナジブラがどうして政府の生き残りに取り返しのつかないダメージを与えるようなひ弱な人を選択したのだろうと疑問を感じた。推測できるのは彼には自分で決定する能力はなく、ソ連指導部がハレクィヤールを新しい地位に就けたのだ、というものである。ソ連に対して彼が行った最も重要な仕事は影響力をもつムジャヒディン指導者であるサイド・モハムマドを彼のライバルであるジャワン司令官を使って抹殺したことである。ハレクィヤールがヘラート州知事の時のことである。その後サイド・モハムマドの支持者がジャワン司令官を暗殺したがこの背後にはハレクィヤールがいたのである。ムジャヒディン同士の復讐こそムジャヒディンを抹殺する最上の手段である。彼は国の政治システム全体が存亡の危機にある時に贅沢な生活スタイルを満喫していた。

彼が首相の座に就いた後、私は大統領の要請で彼に会いに行った。ハレクィヤールは病気で体が悪いから彼の仕事を助けてくれと頼まれたのだ。一目見て彼には首相の日常業務をこなすのは無理だと判った。私は大統領に彼は体が悪いと知りながらどういうわけであんな重責を

引き受けたんだ、と聞かすにはいられなかった。

アフガニスタンの1991年財政年度のスタート前日、ソ連はカーブルにメッセージを届けるため代表団を送ってきた。そのメッセージとは、ソ連は国内で困難に直面しており国内の資源をきたるべき冬のために使わざるを得ないというものであった。同様のメッセージが1991年の夏に何度も繰り返された。時の流れは凄まじく速かった。秋は近づいており、首相はなす術を知らなかった。彼はひとりのビジネスマンに対して2000トンの小麦を購入する契約を承認した。ゾットするような結果はビジネスマンでさえ、彼の義務を遂行できないという事実だった。政府は軍人以外の公務員に給与補充分としてクーポン券を配った。彼の政府は汚職や無能ぶりが暴露され信用を失った。政府が信用を失えば大統領も信用を失う。ナジブラはハレクイヤール任命失敗の言い訳を見つけられなかった。大統領はもはや彼を救うことができなかった。ハレクイヤールが政府に与えたネガティブなインパクトはムジャヒディンの軍事圧力にも劣らぬほどだった。

ケシュトマンドは副大統領の職を辞したあと、アザディ新聞紙上に公開書簡を発表して大統領の組閣ミスと部族政策を糾弾した。彼は過去十年間に犯された残虐行為に責任はない、と述べていた。アフガニスタン国民は誰に責任があり、誰にないか、正しく判断できる。彼は多くの闇を知っている、だから彼は過去に犯されたすべての流血事件、残虐行為から距離を置いてきた。

## 21 ソ連のクーデタ

ナジブラはソ連で進行する事件を注意深くフォローしていた。そして彼の政治姿勢を修正してきた。ボリス・エリツィンがロシア議会で力をつけ、アフガニスタンへの赤軍の干渉と野蛮な行為を弾劾した。彼はアフガニスタンからの即時撤退を要求した。極東で行った演説で、エリツィンはロシアでは1400万人もの国民が貧困ライン上で苦しんでいるのに、他国に救助物資を送っている国家指導者を糾弾した。彼は彼が政権についたら外国に対するあらゆる援助を停止し、アフガニスタンへ送るあらゆる武器の製造を禁止する、と強調した。

ボリス・エリツィンの厳しい姿勢と表明をみてナジブラは彼に書簡を送りアフガニスタンへ招待した。上院スポークスマンのマフムード・ハビビがエリツィンに会ってアフガニスタンの現状を説明するためにモスクワへ派遣された。しかしエリツィンはアフガン代表团との会見場へ向かう途中交通事故に遭い、軽いケガを負いマフムード・ハビビとの会見に出席することができなかった。

この時期、ソ連ではアフガニスタン問題はトップニュースだった。エリツィンは国民の支持を得るためアフガニスタンカードを使って政敵を攻撃した。彼は話し合いのためにムジャヒディン代表をモスクワに招待させた。彼の主目的は捕虜を解放して国民に対する彼のイメージを向上させることだった。ムジャヒディン暫定政府大統領であるムジャディディのモスクワ訪問が予定されたが、それは他のムジャヒディングroupとパキスタンISIの強烈な反対に遭遇した。彼に代わってブルハヌディン・ラバニが強力な代表团を率いてモスクワに派遣された。ソ連軍がアフガニスタンに介入してから、ムジャヒディン代表团がソ連を訪れるのはこれが初めての出来事だった。

ラバニはモスクワ滞在中、ソ連と平和的な関係を結ぶ前提条件として次の事項を開示した。

- アフガニスタン国民に対する戦争被害賠償
- スカッドミサイルおよびその他最新兵器の撤去
- 今後アフガニスタン問題へ干渉しないことの保証
- アフガニスタンのイスラム教による一体性と領土保全の承認
- ソ連が捕虜としている全アフガン人の解放

会談期間中、ラバニは強硬な姿勢をとり続けた。善意の証としてトルクメン人捕虜を解放した。（しかしその

捕虜は実はアフガニスタン市民権所有者であったことが後に判明した。)

モスクワでのこの会議はナジブラ大統領をいたく刺激した。実際にナジブラはロシア人が彼を裏切り、政治と軍事の両戦場に彼をひとりぼっちで放り出したことを悟った。しかし彼は、合衆国側にもそうしてくれと願った。なぜならロシアはもはや合衆国に対する超大国ではなくなったからである。国際政治情勢は合衆国有利にドラスティックに変化した。したがって合衆国がナジブラの期待に応えることなどもうなかったし、合衆国政府に対する幻想を持っていたナジブラ自身にとってもそうであった。しかし合衆国政府は大統領に対してアフガニスタンの平和と安定のため自ら権力の座を降りろと忠告した。

どの国でも歴史上重要な日付がある。アフガニスタンでは8月19日である。この日にアフガニスタンは独立を取り戻した。アフガニスタンの有名な政治家で独立協定の署名者アブドゥル・ハディ・ダウイの誕生日であり命日である。パキスタンの大統領でアフガニスタンに宣戦布告なき戦争を遂行したジア・ウル・ハクが飛行機事故で死んだのも1988年のこの日である。そしてまた1991年8月19日、失敗したとはいえ、モスクワでゴルバチョフに対するクーデタが発生した。

モスクワでのクーデタの試みが伝わって、アフガニスタンでは1991年の独立記念式典が中止された。理由は治安上の問題である。式典は関連する記事の新聞などでの公表、テレビやラジオの特別番組に限定された。大統領は早朝独立記念日を彼の私邸で一緒に過ごそうと電話をかけてきた。

午前8時、私は彼の家に向かった。コーヒーを一杯飲んだあと、彼の私邸のテニスコートでテニスをした。テニスコートは美しい庭園に囲まれていた。テニスの最中、特別警護のジャファーがやって来てテニスの邪魔をすることを詫びた。見ると怯えた表情でどもりどもりモスクワ放送によればゴルバチョフが権力の座から追われた、と報告した。大統領はラケットを右手に持ったまま驚いて私に尋ねた。「ムータット同志、本当だろうか？」私は彼にすぐにロシア大使に連絡を取り詳細情報をつかむべきだとアドバイスした。

彼は電話をかけに行き、私はテニスコートで待った。彼はすぐに帰ってきた。紅潮した顔でニュースは本当だ、と私に言った。そして「いま権力は12人で構成された緊急特別国家委員会的手中にある。ここには副大統領、首相、国防相、内務相らが入っている」とつぶやいた。彼

は自分はこれらの人びとと良い関係をもっている、と主張した。いずれにせよ、この事件はアフガニスタン問題に直接の影響を及ぼす。「緊急委員会」は合衆国に対して決して譲歩しないだろう。両者は両当事者に武器の供給をつづけ、アフガニスタンは新しい局面を迎え、さらに人が死ぬだろう。われわれはテニスをやめ、事件をフォローすることにした。私は大統領に明日の朝まで一切の公式コメントは発表しないようにしようと提案した。判断するには早すぎる。大統領は彼の特設秘書にこの事件に関する世界中の首脳のコメントや反応を収集するよう命じた。ロシアで起きた8月19日のクーデタとナジブラの政治的立場とが結びついていることは明白だった。

翌朝9時、副大統領たちは大統領官邸に集まった。われわれは意見や分析、見通しなどについて見解を述べあった。大統領は内部情報を得ているらしく笑顔を見せていた。彼は「緊急委員会」の顔触れからして、彼がひとり取り残されるのではないとの保証を得たと思っていた。われわれの結論は今回ソ連で起きた事態は完全にソ連国内の事件であり、早期の解決を期待する、そしてわれわれの基本原則および姿勢は外国の外交政策によって変化するものではない、というものだった。

大統領はこの結論に同意した。われわれは彼がマスメディアを通じてアフガン政府の立場を明確に表明するよう主張した。外国のジャーナリストはこの事件に対するわが政府の立場に関して注目を寄せた。

事件は数日後、逆転した。「緊急委員会」のメンバーは逮捕され、ソ連の指導者ゴルバチョフは首都に移送され、ボリス・エリツィンが進行する政治ゲームの勝利者として認知された。ソ連でのこのような展開に応じてアフガニスタン問題を解決して流血を止めるために大統領はすみやかに退任すべきだと迫る人間が党や政府内に生まれた。大統領の古くからの友人であるワキルも姿勢を変えた。ワキルはナジブラ彼自身および彼の政策に不満を述べた。ナジブラは世界のリーダーたちの誰からも支持されていないし、世界の政治コミュニティにも受け入れられていない。ムジャヒディン指導部は彼と決して交渉しない。だから彼が権力の座にいることはアフガニスタン戦争の継続を意味する。このように、外相は大統領のさまざまな施策について不満を述べた。私はすべての同僚と良好な関係を持っていたしワキルとはお互いに尊敬しあう間柄だった。大統領と彼との関係が悪化したとき、両者から信頼されている人物は私だけになった。彼らは互いに相手に対する不満を私にぶつけた。ワキルは



感情的な人物である。私はたびたび彼に忍耐すべきだ、とアドバイスしてきた。

マスードもソ連政治の展開をフォローしていた。彼はそれらに対する私のコメントを定期的に求めてきた。私は彼に司令部をパンジシール渓谷に移すよう勧めた。その方がより緊密にアドバイスできる。もちろん、大統領もマスードの譲歩を引き出すためにメッセージをしばしば派遣していた。しかしながら、ふたりの間には強烈な不信感があったため、呼びかけはいつも不調に終わった。マスードは1991年の終わりに、パンジシール渓谷に入った。そしてそこを拠点に政治活動を始めた。ワキル外相はそれまでマスードと一切接触しておらず、何の約束もなかった。実際マスードは個々の政策に関して政府内の高官とパイプを持っており、もし彼が関係をつけようと思えば即座に誰とでも連絡を取れた。彼は實際上、首相を含む執行会議の全メンバーとパイプを持っていた。しかし、この重大な分かれ目の時、彼らのうちの誰も建設的な役目を引き受ける人物はいなかった。私はワキルとマスードとの間につながりを設ける適切な時期が来た、と考えた。ワキルの役回りを私には演じられないが、彼ならアフガン問題を解決に導く肯定的な結果を導き出せるだろう、と。私とマスードとの関係から私は動きが取れなかった。マスードとの関係では大統領は私を疑惑の目で見ていた。この政治ゲームのプレーヤーとしては、ワキルがベストだった。

私はマスードにワキルを交渉相手として招待するようアドバイスした。彼はこの提案に同意した。彼は相手役にクァム・アクラミを選んだ。アクラミは約束を守る信頼できる人物だ。彼はワキルと会い、彼にマスードのメッセージを手渡した。ワキルはマスードと関係を樹立する夢を持っていた。それがいま実現した。ワキルはマスードからの招待を得て驚いた。ふたりが交換するメッセージはまず私がチェックし、それぞれの相手に渡された。アクラミは決められた期間に彼に課せられたすべての義務を遂行した。ワキルはパンジシール渓谷を訪れて、時に応じてマスードの副官であるアブドゥル・ラーマン博士に会い、時折、マスード本人とも会った。カーブルとパンジシールとの連絡は1日に2回行われた。

大統領は気乗りしていなかったが、国民はわれわれの側からの早急な解決を望んでいた。われわれはマスードとある種の合意に達していた。それは、交渉のスピードを速める必要があり、問題を解決するため大統領が特設委員会を設置し大統領権限の一部を移す必要があり、特設委員会と相手側が一定の合意に達したら大統領は辞任

する、というものだった。マスードはこの案を誉め称え、暫定政府の樹立を約束した。さらにその他のムジャヒディン組織が合流するよう説得する、との約束も行った。彼はすべての戦線で政府軍との戦闘を控えることに同意した。祖国党執行会議のうちこの案に賛成したメンバーは以下の通り。

- マフムード・バリアライ
- アブドゥル・ワキル
- ファリド・マズダック
- ナジムディン・カウイヤニ
- サイド・アクラム・パイギル
- スライマン・ライク

執行会議のその他のメンバーは態度を明確にしなかった。われわれは7人からなる委員会の設立を検討した。つまり、3人の副大統領、祖国党の4人の副議長である。この委員会は1人の副大統領の統率の下に活動をスタートする。3人の副大統領は3方面での交渉を行う権限を有する。アブドゥル・ワヒド・ソラビは親イランのワダット党との交渉、アブドゥル・ラヒム・ハティフはヘクマチャールのイスラム党、そして私はアフガニスタンイスラム協会である。アフガニスタンが紛争から抜け出る道を探るこの委員会の構成は秘密とすることにした。

このときはちょうど、エリツィンがソ連の有力人物として登場してき、ゴルバチョフが凋落する時期だった。ゴルバチョフ大統領は辞任して権力を暫定特別委員会に譲る用意があることを外相との会談でほのめかしていた。ところが、エリツィンは、かなり前にソ連内の軍国主義の高まりに抗議して外相を辞任していたシェワルナゼをふたたび外相として指名した。指名されたあと、シェワルナゼはナジブラに書簡を送った。ナジブラはこの書簡を後に私に読んで聞かせた。その手紙は4ページからなっていた。シェワルナゼは改めてアフガン国民の苦境に同情の念を表明し、アフガン危機の解決と国の永続的な平和の樹立に向けたナジブラ大統領の努力を讃え、大統領の成功を祈念していた。

シェワルナゼが再びロシア政治の表舞台に登場したことによって、ナジブラは新たな希望を得た。彼は秘密裏にエリツィンと接触した。

ナジブラはシェワルナゼ外相から今後のアドバイスを聞き出すため、駐アフガニスタン・ソ連大使のパストゥコフにモスクワに行ってもらった。ソ連大使がモスクワへ出かけている間、ナジブラ大統領の姿勢は柔軟と強硬の狭間を揺れ動いた。最後は強硬姿勢に転じ柔軟姿勢を

捨て去った。彼は親しい同僚たちに状況を混ぜ返すのをやめさせ、平和プロセスを継続する時間を自分自身に与えた。

## 22 大統領、大使、そして私

ある日、郵便電話通信相が、ソ連との電話通信プロジェクト契約について文句を言い私の執務室にやってきた。彼によれば、ソ連側が義務を果たさないらしい。だからといって、微妙な問題だから話が壊れた場合、自分の責任にされたらたまらない。そんな理由で契約書を再度入念に検討してほしい、とその契約書のファイルを持参してきたのだ。ソ連側がアフガニスタン側の要請を無視しつづけた場合、プロジェクトは停止される、と大臣は主張した。電話通信関連は私の所管ではなかったので、大統領がソ連大使と会うときに説明できるようにと全書類を大統領の元に持って行った。実際には電話通信行政の権限はケシュトマンドにあるのだが、彼は国外出張中だった。翌日、大統領は私を呼んでこの件をソ連大使に問い合わせしてほしいと頼んだ。私は話し合いのためパストウコフ・ソ連大使に私の執務室に来るよう要請した。彼は私の要請を承諾したが、来なかった。それで再度、大使秘書官に電話をし私が引き続き待っている、と私の秘書が告げた。大使は来室を約束したがまたしてもその約束を反故にした。3日目、私はすべての書類を大統領に返却し、ソ連大使が私の執務室に来ないと苦情を言った。

私は大統領は忙しすぎるのだからこの件を彼が扱うのは止めるべきだと進言した。すると大統領は私の手から書類を受け取るやパストウコフに電話した。その後、私に対して私の執務室を訪問する許可を大使が求めてきた。私は彼に、大統領に会うべきだと答えた。なぜならすべての書類は大統領の手元にあるのだから。彼はその後、3日間つづけて私の執務室に電話をかけてきた後、大統領のところに行き、私が彼を受け入れない、と文句を言った。ナジブラは私に対して大使を受け入れるよう要求してきた。彼はひどく落ち込んでいるから、と。結局、私は彼ともう一度約束を交わし、彼は私の執務室にやって来た。

大使は自制しているように見えた。だが彼は電話通信相のアラウィが2基の衛星アンテナを山頂に設置する仕事をサボっていると不満を述べ、次に公共建設相のヌールザッド博士を、怠慢であり仕事を遂行する能力がない、と糾弾した。ソ連大使は一般的な規範や外交儀礼を無視して電力水利供給省の大臣を手荒くやり玉に挙げ、次々と内閣のほとんど全員を攻撃した。過去、かいらい政権内でこのように命令を無視するような輩は誰であっても

叱責されるか、解雇、あるいは罰せられるのが普通だ……。そのような言葉、物言いを外国の大使の口から聞くのは耐えられなかった。私は言った。「閣下、閣下は私の執務室におられるのですぞ。どうしたらわれわれの政府に向けてそのように非友好的な言葉を発することができるのですか？ 閣下が名前を挙げた大臣たちは専門的な豊かな経験を持つすばらしい人物ばかりだ。全員が30年以上の専門的キャリアを持っている。あなたの非友好的な言葉に同意するわけにはいかない。閣下の態度は閣下の使命に相応しいものではない。私はこの件は大統領の元に差し戻す。」パストウコフ大使はアフガン社会の心理学的な特性をよく理解していなかった。彼はアフガニスタンに対する基本的な知識にかけていた。前任者のヴォロンツォフと比べると、彼はただの人だった。パストウコフはコムソモール組織（ソ連の共産党青年団体）のトップだった。そしてずっとコムソモールのなかで出世してきた人物だった。しかしナジブラにとっては、もちろん望ましい男だった。彼の仕事処理方法は大統領の期待通りだった。政府指導部や高官たちはとてもフランクかつ曇りなく彼と議論し、アフガニスタンでの彼の仕事が成功するよう手助けしていた。しかし、残念なことに、彼が大統領に報告するときには会話や交渉内容は歪曲された。大統領が彼を支持していたので彼はいつも決然としていた。

パストウコフはモスクワでシェワルナゼ外務大臣の助言を聞いて、カーブルに帰ってきた。彼は大統領に対してさまざまな困難があるにもかかわらずソ連指導部はナジブラ大統領支持を決定した、と独断で保証した。彼は、いかなる外部からの圧力にも屈するな、と大統領を励ました。シェワルナゼが再び外務大臣に任命されたあと、ソ連指導部を襲っている困難について大統領に書き送ってきたことがある。そこで彼はナジブラに対して自分の限界について述べていた。ナジブラ大統領がジェームズ・ベイカー合衆国国務長官と会談できる可能性はわずかしかない。しかし、彼はアメリカ人に働きかけて大統領が直接彼と交渉できるように努力すると約束した。ソ連大使は誤ったシグナルをナジブラに送り、ナジブラは自分自身のこれまでの立場を無視した。

ヴォロンツォフと私は仕事をするうえで良い関係を持っていたが不幸にもパストウコフとはそれがなかった。多くの高官たちは外交儀礼を無視した彼の横柄な振る舞いに不満を持っていた。ところが大統領にとって彼は楽しいテニス友達だった。大統領は自分自身でシナリオを書き、演じた。一方、私はどんな場合でも、自分の信念

を貫くことができれば後悔することはなかった。私はソ連大使の任期満了のときまで彼とは会わなかった。帰国前、彼は私の執務室を訪れて私へ協力のお礼を述べた。

「ムータット閣下！ この国でアフガニスタンの現実を示してくれたのはあなただけだった。私は心からの感謝を表明したい。」アフガニスタン人がとても誇り高い人種であるのは事実である。われわれは自らの品位と名誉をととても大切にする。われわれは自分の品位と名誉が汚されない限り、すべての人を尊重する。しかしわれわれは、自分の品位や名誉を無視する者はそれがたとえ親であろうと容赦しない。

多くの同僚たちと同様、私はソ連の空軍高等大学で技術修士を修得した。私の教官は時間を惜しまず私を教育してくれた。私は教官たちの疲れを知らない努力と援助に心から感謝している。人びとはどこでもすばらしかった。不幸の源は横暴な体制と政治家たちだった。社会政治環境は個々人の個性にタガをはめ、作り変えてしまう。さもなければ人類は自然の産物のままに放置されてしまう、というわけである。

1989年2月、モルダビアの首都キシニョフで記者会見したときのことを思い出した。私はジャーナリストとはいかなる種類の接触も避けていたのだが、私の国の現状について私の帰国までにどうしても話を聞かせてくれと強く要請され記者会見に応じた。そこで1人の記者が質問した。「ソ連とアフガニスタンの友好関係について一般のアフガン人がどう考えているのか聞かせてほしい。」私は考え込んでしまった。それは10年以上におよぶ戦争の結果なのか、それとも西側のプロパガンダのせいなのか。ソ連指導部があけすけに物を言うようになったこの転換の時、そのような質問は一種の挑発だろう。

どこから話すべきか。私は熟考した。アフガニスタンの歴史からか、政治システムか、それとも国民の心理面からか……。ロシアにこんな諺がある。「ひとりのバカ者が百人の賢者にも答えられない質問をする」。私は話し始めた。「親愛なる記者さん！ あなたのご意見はいかがですか？ あなたは150万人のアフガン人が殺されたこと、600万人以上が難民になっていることをご存じでしょう。あなたはソ連軍に対する抵抗戦争が行われていることを知らないのですか？ かつて、一般のソ連人が何の恐れもなく奥地の村を訪れ村人たちに歓待された時期もありました。このような幸福な友好的な日々は過ぎ去ったのです。」私はつづけた。「あなたはアフガニスタンにふたりの友人を持てるだけです。ひとりナジ

ブラ博士でもうひとりは一タータットです。」私は記者の質問は挑発だったと信じている。彼は質問の仕方を知らないバカ者ではない。私の回答はその場にいたジャーナリストすべてを驚かせた。私の答は明快だった。この記者会見の後、ソ連側は予定されていたウズベキスタンとタジキスタンの訪問を取りやめた。後になってこの訪問中止は大統領の指示だったことを知らされた。

アフガニスタンでの10年におよぶソ連赤軍の存在による出費はおよそ1000億ドルに達する！ それに対する見返りは？ それへの回答は「破壊のみ」である。かつて、ある同僚が赤軍がアフガニスタンに存在することについて、私の意見を求めてきた時があった。その時、私は次のような、ある日本の友人の見解を紹介したことがある。

ムータットさん！ 日本人もアフガン人のようにとても民族主義的なんです。日本は第二次世界大戦で負けました。350万人もの国民が死んで国土はめっちゃめっちゃにされました。戦後の経済状況はひどいものでした。アメリカ軍は日本を東西南北隅々まで占領しました。われわれは占領なんて経験をしたことのない民族でしたからとても我慢できるもんじゃなかった。でも多くの日本人はそれぞれのやり方で生き抜いたんです。日本は占領されたという単純な考えを採らなかった。日本には吉田茂というすばらしい人物がいたんです。彼は首相として遠くを見通していました。彼は首相になったとき、こう思ったそうです。日本はゲームに負け荒廃した国土を相続した。何をなすべきか？ 資金なしに国の再建は不可能だ、と。それで彼はアメリカ人が日本にいる間にアメリカ政府に圧力をかけて日本経済の再建と再興のために資金を出させたんです。アメリカの技術・財政支援を得て、戦後、ゼロから日本経済を建て直したんです。アメリカ人が日本の憲法案を書きましたが、われわれは1951年に独立と自由を取り戻し、アメリカの圧力がむなしいほどの高みにまで達することができたんです。

友人はソ連がアフガニスタンにいる間にソ連に国の再建を要請すべきだ。ソ連はそれを行うだろう。なぜならそれは帰国に対する義務だからだ。帰国しても彼らはそれを心に留めるだろう。

友人のこのアドバイスはとても印象深かった。実質的にソ連はわが国を去ったが彼らは決して振り返らなかつ

た。彼らはアフガニスタンにいた間、カーブルに小さなパン焼き工場ひとつ作らなかった。ソ連が去った後、わが政府はカーブルからバグラミまでの54kmの道路を自力で建設せねばならなかった。ソ連にとって簡単なこの工事を彼らは完成させなかった。



## 23 日本とドイツ

このふたつの国は多かれ少なかれアフガン人に人気がある。それは次の理由による。

- 両国とも人道支援を除きアフガン紛争に直接関与していない。
- アフガン人は両国の進歩と発展に憧れている。
- 両国ともアフガニスタンとなんらかの関係を有している。
- ドイツはアフガン難民にとって第2の祖国である。合衆国は厳格な政策に固執しているのにドイツ政府は難民を寛大に受け入れている。

わが政府と祖国党の指導部はこの2国はアフガン人が問題解決のために席につくようアフガン人に影響を及ぼすことができると信じていた。私は、日本を訪れ私のコネクションを通じてアフガン問題解決への助力を探るよう要請された。私の友人であり、国民政治研究会理事長の田中克人氏の招待により、私は1991年9月13日、日本を訪れた。日本滞在中、アフガニスタンに対する好意と同情をもって歓迎された。

## 24 国連とアフガニスタン

国連のアフガニスタンへの関わりを思い出すたびに私は心に痛みを感じる。国連はアフガニスタンに大災厄をもたらした。すべての始まりは国連によるジュネーブ協定の準備だった。協定は単にソ連の面子を守るためのものであり、アフガニスタンから軍隊を撤退させるためだけのものであった。それは2超大国の外務大臣が列席する、宣伝効果抜群の、輝くように立派なセレモニーだった。国際社会は、これでアフガニスタンにも平和が訪れるだろうと大いなる期待を抱いた。それが間違いだったとは！ ソ連は去った。だが戦闘は全範囲に及ぶまでに強化された。アフガン人は前よりも傷つき、国はいっそう荒れ果てた。ジュネーブ協定はアフガニスタン人にとって国連の歴史上恥ずべき協定として記憶されることだろう。

国連アフガニスタン特使ベノン・セバン氏は恥ずべきジュネーブ協定締結のあと、“五項目提案”を行った。それは一般に認められている原則、たとえば独立、領土保全、主権、不干渉などで構成されており、3番目の提案項目としてアフガン人同士の対話を通して中立の暫定政府を樹立し、選挙を行う、とあった。實際上このような提案はムジャヒディンの大多数の司令官たちにとって受け入れがたく祖国党指導部にとっても混乱させられる代物で、ナジブラ大統領とベノン・セバン国連特使の「個人的政治交渉」の産物だった。国連提案への大統領の接近方法は、アフガン国民の包括的な利益を考慮しない、狭い視野から発する大統領の利益に基づいていた。国連特使の努力は超大国の監督の下で前国王をいかにして再び政治舞台に引き戻すかに集中していた。前国王が高齢であることを考えると、今日のアフガニスタン問題解決の特効薬とは言えなかった。

セバン氏はカーブル、イスラマバード、ペシャワール、テヘラン、その他の都市を3年間、シャトル便のごとく忙しく往来した。彼は世界中の多くの政治家と会った。そして大統領に対して、ムジャヒディンとアフガン国民はもはやナジブラを望んでいない、と圧力をかけた。大統領にもっと譲歩をさせたかったのである。しかし大統領は特使の意図を見抜いていて、自分にとって良い結果を求め画策しつづけた。セバン氏とのある会議の場で大統領は彼のことをペルシャ語で不忠実かつ不誠実と表現したことがある。セバン国連特使はその言葉・発音をメモして2カ月半もカーブルへ帰ってこなかった。大統領

は会議の場ではいつも、自分の運命や権力の座に居つづけることなど望んではない、と主張していた。しかしセバン氏はもし自分が大統領を辞任したらその後の権力の空白をどうやって埋めるつもりなんだ、もし国連がムジャヒディンの協力を取りつけるのに失敗して権力移行のための暫定機構を作ることができなかつたら、権力の空白状態になる。戦闘が終了する保証がなかつたらどうして権力の座を降りられるのだ。セバン氏はそのような大統領の主張に対して、まず大統領がマスメディアを通じて辞任を宣言すべきだ、そうすればその後の中立の暫定機構がつくられる土壌が生まれる。国連特使と西側諸国に支持された幾つかの穏健なムジャヒディングループとの合意にもとづいていわゆる中立的アフガン人22名の名簿が準備された。彼らが政府の責任を担うものとしてカーブルに連れてこられる。そしてその後、100人以上のアフガン人がこれに合流する。暫定期間に彼らは新しい憲法案を起草しそれを国会にあたるローヤ・ジルガを招集し、憲法を採択するとともに政府を選出する。

主要な問題はこうだ。いわゆる公平中立な人物なるものがどうやってアフガニスタン国内に政治的な基盤を築けるのか。誰が彼らを守るのか。アフガニスタンのかなりの地域を支配するムジャヒディンの役割は何か？何も知らされていない祖国党の党員はどんな反応をするのか？セバン氏はこれらの疑問に適切かつ論理的な回答をすることができなかつた。それが国連方式の大きな欠点だった。国際関係を担当する副大統領として、武装解除なのか混乱と混沌状態の創出なのか。セバン氏の意図が何なのか理解できなかつた。

いずれにせよ彼はそれを実行した。私は大統領に対する国際関係の補佐役だったのだが形だけの外交儀礼であつても彼とは一切会っていない。奇妙なことに私でさえ多くの最新情報をBBCやその他のマスメディアから得ていたのだ！

彼はアフガニスタンの法的な慣習を何も知らないのにアフガニスタン大統領を国外に誘拐しようと試みた。セバン氏の「誘拐」が国連の努力の一部だと言うのなら、私はそれは絶対的な間違いだと確信する。実際、「誘拐」は非常に込み入った冒険を国連が犯すことになる。国連は困難な時にあつて国際共同体の信用を危険にさらすような資格のない代表を任命するなどということをしてはいけない。大統領を誘拐する行為は権力を移管する方法として不名誉な手段だ。もし大統領が平和のためにそのポストから降りようとする場合、そのプロセスは議会、政府、党指導部の同意と理解のもとに進められな

ればならない。憲法に合致した法的な方法でなければならない。皮肉にも副大統領、上院スポークスマン、国会スポークスマン、首相、それら全員はスムーズな権力移行に完全に協力的だったのである。ナジブラ大統領の身に何が起きるかは成り行きを見守っていたもの全員に自明であった。

## 25 政治的クライマックス

合衆国とソ連は1991年10月29日、ムジャヒディンとアフガン政府に対する武器弾薬の供与を停止するとの合意に達した。ソ連は1991年12月31日をもって武器弾薬の供与を完全終了した。アフガニスタン政府側から見れば、この協定はムジャヒディンに有利な不公平なものであった。アフガニスタン政府の武器入手源はただひとつ、ソ連だけであった。しかも武器引き渡し地点はただの3箇所、つまり、ハイラタン、トルゴンディ、カーブル空港だった。一方、ムジャヒディングループには多くの武器弾薬入手源があった。ムジャヒディングループはアフガニスタン南部および東部に百箇所以上の引き渡し場所を持っていた。超大国の協定はアフガニスタンへの武器供与に関わっているすべての国に遵守する意思があつてこそ効力があるものなのだ。アフガニスタン政府は何度も協定のこの欠点にソ連指導部の注意を向けるべく努力した。しかし、ソ連指導部の関心は西側に向いていて、聞く耳を持たなかった。ソ連本国でも予期せぬ事態が発生し進行していた。ソ連指導部は権力掌握という国内の闘いに忙しく、アフガニスタンへの道徳的な義務感を感じる余裕がなかった。もちろん、死にゆく超大国は全世界に深刻な影響を及ぼす真空状態を生み出しつつあった。

わが政府は重篤な経済的・政治的圧迫に直面した。ナジブラ大統領の親密な友人シェワルナゼ氏は再び担当を外されていた。KGBは政府の監視下に置かれていた。アフガニスタン北部国境の向こうで進行するこのような変化にもかかわらずナジブラ大統領はムジャヒディン組織とのなんらかの妥協ができるという希望を捨てていなかった。大統領はガイラニやムジャディディらと交渉するために巨額の金を使っていた。いくつもの代表団が穏健なムジャヒディンと交渉するために何度も外国を訪れた。しかしナジブラ大統領の代表と話し合った内容をあえて公表するようなムジャヒディン組織は現れなかった。したがって、すべての試みは無駄に終わった。

ナジブラ大統領はふたつの目標を追求した。ひとつはムジャヒディングループを穏健派と原理主義派に分割すること、ふたつ目は彼らの信用を失墜させること。彼はその目標をある程度達成し得た。しかし祖国党は大統領の振る舞いを快く思わなかった。さまざまなムジャヒディン組織との交渉チャンネルを握っていたのは国家保安相のファルーク・ヤクビだった。彼は王政時代からの経

験豊かな情報将校だった。教育を西ドイツで受けていた。国家保安省はムジャヒディンの野戦指揮官を買収するための無制限の予算使用権を持っていた。KGBの弟分としてKHADの名前で有名なアフガニスタン国家保安省はナジブラ大統領の個人的利益を推進するための決定的な役割を果たした。彼はこの組織をどう動かせばいいかを知っていた実際上のキーパーソンだった。彼への政治的協力を無視するあらゆる人物は、たとえそれが党员であろうと、たとえ高い地位の役人であろうと、KHADの完全なる監視下に置かれた。この種の組織は過去アフガニスタンにも存在はしたが、規模が小さかった。本格的な国家情報局は1978年4月革命の後タラキ大統領によって創設された。それは当初KAMと呼ばれた。この保安組織はKGBの完全なクローンだった。ナジブラがセキュリティ組織の長官を勤める時代になって、組織は再編成され、KGBの直接的な監督の下、拡充された。

かくして国家保安相のヤクビはこの組織を訴追のためにも利用した。大統領は彼のスパイ網をアフガニスタンの隅々にまで張り巡らせたが、そのことによって彼と政府や党の指導者たちとの間に距離ができていった。大統領の不幸の兆しはKHADから来た。これは独裁支配の定めだと言える。全体主義勢力のいかなる独裁体制も国民的支持を失いそうになると軍隊や警察組織に信頼を置くようになる。国家保安省はヘクマチャールのイスラム党と祖国党執行会議メンバーとの間の会合を、アラブ諸国の首都で何回も開催した。この種の会議のひとつとして、祖国党政治局メンバーであるカウイヤニ、ライク、ワタンジャールらとヘクマチャール側代表カリヤブとの会合がチュニスで開かれた。

ファルーク・ヤクビはナジブラ大統領に強い影響を受けていた。アフガン人同士の対話を遂行するために大統領権限の一部を暫定委員会に移す試みを大統領にさせなかったのは誰だろう、ヤクビその人だった。祖国党執行会議の全員はヤクビの厳格なる監視下にあった。彼は祖国党指導部は大統領に対抗する陰謀に巻き込まれている、とナジブラを信じ込ませた。

国連の主催でアフガン人同士のステージの異なる2種類の会議をジュネーブとウィーンで開催するとの取り決めがあった。第1ステージでは150名前後の影響力あるアフガン人が世界から集まり第2ステージ会議で暫定政府を選出する。この2種類の会議は3～4カ月かけて実施され1992年3月末から4月までに終了する予定だった。ベノン・セバンは穏健なムジャヒディン組織から選出された人びとのリストを集めたがアフガニスタン・イ

スラム党とアフガニスタンイスラム協会は協力を拒否した。わが政府側は大統領が30名を選出し国連特使に届けなければならなかった。選出はヤクビおよびハティフとの密接な協議のもとに実施された。

ヤクビの主張により次の3名がリストから外された。

- ナジムディン・カウイヤニ： 祖国党副議長および党国際局長
- マーブブラ・コシャニ： 政治組織「アフガニスタン革命的労働者」代表
- 私： 国際、社会、文化問題担当副大統領

カウイヤニは彼の極端な民族主義的傾向が非難された。カウイヤニについて言うと、彼は長年祖国党の組織関係の仕事をしてきたが政府の仕事をした経験はなかった。彼によれば党内のタジク人のシェアは約62%、カーブル市民の70%はタジク、カーブル市民の90%はダリ語（古代ペルシャ語）が第1言語である。政府やその他の政治組織は民族構成比を正しく反映すべきだ、と彼は主張した。コシャニはアフガニスタンの分割、タジク国の創設という分離主義的な傾向が糾弾された。

實際上、このような主張には根拠は無く、国民を意図的に混乱させるだけである。われら3名はアフガニスタンの領土保全と統一、政治、宗教、民族にかかわらないアフガニスタン国民の平等の権利を信じる者たちであった。いずれかの民族が優遇されるのは受け入れがたいし、そんなことをすれば国の統一が蝕まれてしまう。ヤクビは国内、国際問題に関して私がリベラルな信条を持っている、と大統領や外相との会談の場で非難したことがあった。彼によれば私の見解と祖国党メンバーとの間には共通の土壌はない、とのことだった。

私は指導部とのイデオロギー上の相違の咎で非難された。特にそれは私が日本から帰国した後のことであり、アーマド・シャー・マスードを通してアフガニスタンイスラム協会に属している、とレッテルを貼られた。しかしながら外相はそのような非難から私を守り、逆にヤクビを非難した。ヤクビはアフガン人同士の会議が開かれる直前に党指導部を分裂させようとするものだ、と。ワキルは指導部メンバーの全員が、ムジャヒディングループと同じ部族として血縁や親類関係をもっているとか、将来への不安があるとか、何らかの理由で何らかの関係を持っているから見なしていた。例えば、副大統領のラフィ将軍はパキスタンを拠点とする反対派7派のリーダーであるアブドゥル・ラブ・サイヤフと密接な関係を

持っているし、内務相のパクティンはヘクマチャールと密接である。これにつづけてワキルはヤクビに向かって国家保安相はこのような事柄をよくわきまえ、かつ証拠にもとづいて事実を把握すべきであると述べた。しばらくの沈黙があり、大統領がそれを破った。「ムータット同志はわれわれの友人だ。参加者リストに加えるべきだ。」翌朝、私をリストに加える、と大統領は私に保証した。さらに大統領は君の政治信条に関わりなく、かつもし仮に君がアフガニスタンイスラム協会の党员だとしても、君をリストに加える。このことはワキルが君に伝えるはずだ、と。

祖国党執行会議は政治的な冒険を抑制してアフガニスタン問題の最終的かつ包括的な解決を見出すべきであると大統領にさらに圧力をかけた。1992年1月、ソ連はアフガニスタンへの軍事支援を部分的に停止した。執行会議メンバーは冬が終わる前に解決策を見い出せ、さもないと春になり、戦闘が再開されてしまう、と大統領を急き立てた。しかし大統領は1992年春に予定されていたイベントまであれやこれやと術策を弄しつづけた。彼は合衆国は彼に対する態度をまだ変えるかも知れない、彼との直接的関係樹立に動くかも知れないと考えていた。アメリカ人は前国王その人とその無力さに疲れている。国王は西側の価値観だけから発掘されてきたような存在だ。国王はアフガン問題の解決に向けたイニシャチブや提案を何ら行わず、ただ単に時間を潰しているだけだ。国王自身は時折発表される声明文の中に閉じ込められている存在でしかない、と。

ナジブラはたとえパキスタンのISIが圧力をかけたとしても合衆国政府がヘクマチャールを支持することは決してあり得ないと信じていた。ヘクマチャールはアフガニスタンだけでなく地域全体にとってもあまりにも危険だと見なされていた。だから合衆国はこの冬に自国の政策を見直すだろうと考えた。彼はパキスタン政府当局のハイランク筋と相互理解可能な秘密チャンネルを開けと命令を発した。この命令にもとづきヤクビ国家保安相と彼のカウンターパートナーであるパキスタン情報局長官アサドゥラ・ドゥラニとの第1回会談がジュネーブで行われた。会談には大統領の筆頭秘書であるイサーク・トキーが付き添った。

一方、ナジブラはイランの政策を疑っていた。彼は1978年に短期間ではあったがイランに大使として赴任した経験があったにも関わらず、イラン・イスラム共和国を生理的に嫌っていた。彼はイランとの親善や関係拡大はさまざまな分野でパシュトゥーン族の利益と衝突す



ると判断していた。彼はアフガニスタンの少数派であるシーア派へのイランの影響についてしばしば口にしていた。自国が危機の最中にあるとき、隣国へ現実を踏まえた働きかけをしないのは大統領として先見えのしない姿勢だ。国際規範に則ってイランとノーマルな関係を築くことは議論の余地なく必要だ。文化遺産、言語、宗教、歴史のすべてにおいてイランよりもアフガニスタンに近い国はない。もし歴史家が18世紀以前のこの地域を叙述しようとするれば共通の歴史として描く以外のことはできないだろう。

現代世界における政治の変化スピードは急激で、グローバル化は世界を日に日に結合しているのが現実だ。しかしその変化プロセスは円滑に進むわけではない。なぜなら、一体性の喪失に追い込まれる弱体な民族や国家が抵抗するからである。しかし変化はサイバー技術の革命的な発達により先例のないほどに迅速である。今日ではいかなる国といえど他国との協力なくして絶対的な経済自立や独立を達成し得ない。地球上のいかなる事件も世界の残りの地域に何らかの影響を与え、その利益を掘り崩す可能性がある。このようにアフガニスタンでの出来事がこの地域の国々の利益、とくに隣国の利益を傷つけるのである。アフガニスタンと820kmの国境を有するイランはこの地理的条件を考慮に入れ、自国の利益を損なうような妥協はしないだろう。この国際的な大転換点の時期に部族政策に信頼を置く大統領ドクトリンが発表され、国民全体よりもむしろ部族の利益優先が強調されることは大きな反響を呼ぶとともに取り返しのつかない結果を招いた。パシュトゥーン部族の利益は全国民の利益の中に反映されていなければならない。アフガニスタンの歴史において過去このような政策は失敗してきたことが証明されている。もし将来、同じような政策が採用された場合、それは失敗を運命づけられている。

1992年1月、大統領は国内問題、国際問題を指揮する彼のリーダーシップが支持されていないことに気づいた。祖国党執行会議はナジブラの政治ゲームを止めさせることを決議し、同時に混乱状況を脱する道を探り始めた。この冬、ハレクィヤール政府は公務員に生活必須物資を与えることができなかった。この時期はアフガニスタンの歴史において最も不名誉な時期のひとつだった。国民は病気がちの首相に率いられた弱々しくて無能な政府という最悪の体験をした。アフガン国民はその社会的政治的構造のせいで隣国と比較して強力で有能でかつ責任感のある政府をこれまで持ったことがなかった。規制や検閲があったにもかかわらず『アフガン・プレス』は

政府を容赦なく批判し、病気の首相を醜くマンガに描いて出版した。首相は新聞社をなだめようとしたが無駄だった。寒い冬、飢え、絶え間ない戦闘によって国民は大統領の政策に反感を抱き、愛想をつかした。大統領はこの破局的な状況とその余波を自分の目で見えていたが、政治的な判断と評価を誰にも相談せず自分だけで下していた。予期せぬ状況が発生しても自分自身と家族をいつでも救い出せると確信していた。

ニューデリーにあるアフガニスタン大使館の正式職員だとする書類および証明書を作成して、大統領は政府所有の航空機を使い無申告で事前に物品を移送していた。と同時に彼は執行会議メンバーあるいは副大統領への権力委譲に決して同意しなかった。

ムジャヒディン勢力と移行政府を樹立するための緊急交渉を行うための暫定委員会の創設が1992年1月中旬、再び課題として浮かび上がってきた。アフガニスタン問題をスマートかつ平和的に解決するためワキルは再度大統領の元へ行き説得を試みた。彼は1992年1月16日早朝、権力委譲に関する提案書を大統領執務室に持参した。しかしそれは予期したとおり否定された。ワキルはその日の夕方、私の家に来て、神経質な表情で訴えた。彼は大統領とのやり取りを次のように語った。

大統領執務室に着いたのは午前9時だった。大統領はわれわれの議論をすべて詳細に知っているようだった。多分われわれの中の誰かがスパイして彼に伝えたのだろう。盗聴器を仕掛けていたのかもしれない。私は彼に平和的に問題を解決しようと迫った。しかし大統領と私との関係はこの間の議論の過程で悪化していた。彼はここに止まるより亡命した方がよい、と私は勧めたが彼はそれは国民、国家、党を危険にさらすと言って納得しなかった。

マスードはカーブルでの事態の成り行きを見守っていた。彼は祖国党執行会議のほとんどのメンバー、例えばカウイヤニ、バリヤライ、マズダックおよびその他の將軍や政府の役人たちと定期的に連絡を取っていた。彼はワタンジャール国防相からの手紙さえ受け取っていた。国家保安相はこれらの連絡のすべてを把握していた。

大統領も祖国執行会議でマスード・カードを切った。一度は、1991年の秋、マスードがパンジシール渓谷に入る前、ナジブラは、近い将来、会談場所は未定だがマスードと会談することに最終合意したと祖国党実行会議メンバーに告げた。それを聞いたワキルはなぜマスードが自分の信用と人気を傷つけるそんな約束をしたのだろ

うか、と驚いたという。私も大統領からそのような声明の予定原稿を見せられたことがある。しかしそれは故意に混乱を造り出す目的のものであり、執行会議指導部に誤った情報を吹き込もうとするものだった。私はパンジシール渓谷のマスードの元へアクラミを送り、大統領の言っていることが本当かどうかチェックさせようと思った。パンジシールはカーブルから125kmのところにある。日帰りが可能な距離だ。アクラミは朝早くカーブルを発ちパンジシールに向かった。しかしこのときマスードはバダクシャン州のファリカールにいた。メッセージおよび照会内容がマスードの基地にある無線センターからファリカールへ転送された。

翌朝、大統領に会いに行くとその通信内容に関する報告書が彼の机の上にあった。彼は誰がこのメッセージをマスードに渡してマスードと彼の会見の邪魔をしたんだと私に聞いた。私は彼に、そのメッセージの内容を誰かと議論したのかと聞いた。すると彼は逆に執行会議メンバーについて私がどう思っているか聞き返してきた。私はほとんどの執行会議メンバーはマスードと自分独自のチャンネルを持っている。さらに国家機構で働くものなら誰でもマスードのいるパンジシールにメッセージを届けられ、マスードの居場所にそれを渡せる、と答えた。大統領は最後に、そのメッセージの送り主を見つけて罰する、と断言した。マスードはそつがなく賢い。彼はそれが偽の情報だということを誰よりもよく知っていた。そしてゲームのやり方や誰と通じればよいかを知っていた。彼は自分のチャンネルを通して彼が交渉をしたいのは政府であって、それも唯一、外相を通じてのみであることをナジブラに伝えた。彼が会談に招待したのはワキルだったのである。

大統領はアクラミがパンジシールに持って行き、パンジシールから無線でファリカールへ転送されたメッセージを電子盗聴装置を使って盗み取ったのだろう。この盗聴システムはZACと呼ばれ、ソ連がナジブラに供与したものである。ナジブラはメッセージの送り主を見つけられなかった。しかし執行会議メンバーへの疑惑はますます大きくなった。

ワキルは自分がマスードと会談することになれば大統領は称賛し手助けしてくれるだろうと信じていた。私はそんなことはない、大統領はマスードと会見する許可を君には与えないよ、と言った。ワキルは大統領は自分を信用している、これまでの5年間、大統領の名代として多くの外国高官と機密度の高い交渉をやってきた、と反論した。彼は数え切れないほど多くの交渉を外国の政治

家や対立するグループの指導者たちとしてきた。例えば、ローマにいる前国王、ムジャディディ、ガイラニ、その他、その他。大統領は自分がマスードと会うのに賛成する、と言い張った。私は彼に対して、もっとよく真実を見ろ、と言った。マスードとの会見はアフガニスタンの将来を決める決定的に重大なインパクトを持つ。彼が今まで会ってきた連中とは重みが全然違う。ナジブラは決して君をパンジシールには行かせない、と。いずれにせよワキルは外務大臣だったし大統領に会って真意を知りたいと欲していた。彼と大統領の面談は1992年1月20日に実現した。

ワキルはマスードから招待されていることを大統領に伝えた。それを聞くとナジブラは神経質な表情に変わりワキルに向かって叫んだ。「よし！ 今こそ犯人が判ったぞ。お前が俺とマスードの会見を邪魔しつづけてきたんだ！ お前は自分の手柄ほしきで動いてきたんだ。俺が大統領だぞ。マスードが交渉したかったら、その相手は俺だ。誰であれヤツとあうのは許さない。」大統領の声のトーンは荒々しかった。ワキルは反論した。「確かにあなたは大統領だ。国事に関して全権を持っている。私は現状ではマスードからの招待はあくまでも正しい方向での第一歩だと思う。会合を成功させるためには大統領の支持が要る。もしそれが嫌ならあなたは自分のチャンネルでそれをやるべきだ」誰がマスードと会うべきかの議論で、大統領と外相との関係はますます悪化した。同時期、マスードはメッセージをナジブラに送り、彼と会うつもりはない、と伝えた。結局、大統領はワキルに承認を与えざるを得なかったが、最後まで彼らの会談に同意しなかった。

## 26 中央アジアの共和国

1992年1月、以前のソ連邦を構成する中央アジアの諸共和国は独立を宣言した。新しく独立した中央アジアのイスラム共和国を公式に承認するかどうかを審議するための内閣の会議が大統領の司会のもとに開かれた。大統領はアフガニスタン政府は6つのイスラム共和国、すなわち、タジキスタン、ウズベキスタン、トゥルクメニスタン、アゼルバイジャン、カザフスタン、キリギスタンおよびロシアとウクライナを同時に承認すべきであると提案した。長い時間討議して、首相以下内閣を構成する大多数の大臣は大統領の提案に賛成した。しかし、副大統領のハティフ、上院スポークスマンのハビブ博士、それに私は6つのイスラム共和国の承認は他の2つと切り離して行うべきだと主張した。なぜなら、第1に、われわれはわれわれが共通の歴史的関係を有する北部の隣接するイスラム共和国を承認した後で、ロシアとウクライナを承認すべきである。大統領はワキルの見解を求めた。ワキルは以前のソ連によってもたらされた損害について簡潔に述べた後、われわれの見解に賛成した。しかしながら最終的に大統領がまとめの言葉を述べるべきだと発言した。結局採決することになり、大統領案が採択され、ハイレベルのアフガン代表団を結成して中央アジアのイスラム共和国の首都を訪れることになった。代表団の任務は大使館レベルのアフガニスタンの政治代表部を開設し、同時にアフガン国民の祝意をこれらの国々に伝えることであった。外交プロトコルに従えば外相と国際関係担当副大統領の私が代表団を率いるべきだった。しかしナジブラは公式命令を発してこの使命の遂行をハティフに命じた。ハティフは代表団の長として最初にカザフスタン、次にトゥルクメニスタンを訪れたが、残りの新しい独立国はハティフの受入を拒否した。これらの国々の独立に対する大統領の考えは手放しで称賛する、というものではなかった。3つの共和国、すなわちウズベクスタン、タジキスタン、トゥルクメニスタンはナジブラの部族政策を好ましく思っていなかった。これらの共和国の独立に対する彼の分析、および恐怖は部族の観点からは正しかった。なぜなら、アフガニスタンの北部にはこれらの国々と強い歴史的な結びつきを持った同じ民族が住んでいるからである。独立後、これらの国々はモスクワからのくびきから離れて自然にアフガニスタン国民と自由な互惠関係を結ぶようになるだろう。もしアフガニスタン政府がこれら共和国の利益を考慮しないな

らば彼らはアフガニスタンの内政を混乱させるに違いない。ここに述べた諸国の指導者は、アフガニスタン政府の部族政策によって、ウズベク族、トゥルクメン族、ハザラ族が歴史的に災難を負わせられてきた歴史を知っているからである。

1989年2月の初め、公式訪問の途次、モスクワに滞在していた折りに、ソ連副大統領兼クレムリン宮殿にある高等議会スポークスマンのラフィク・ネシャノフに会う機会があった。世界初の女性宇宙飛行士であるヴァレンチン・テレシコワさんもわれわれの会談に同席した。意見交換の際、私はヨーロッパでは統合のプロセスが着実に進展していることにネシャノフの注意を向けた。ヨーロッパ諸国は今世紀末までに彼らの問題を解決するつもりでいる。しかし対照的に中央アジアでは国々がお互いに孤立している。この地域に住む人びとは共通の歴史、イスラムの伝統と文化、言語などを持っているにもかかわらず、過去70年間、他の国を旅行するという人間本来の権利を享受できていない。民族の一体性、それぞれの国の政治的境界を尊重しながら、さまざまな分野での関係を拡大していくためにあらゆる可能性を利用しなければならない。さもないとわれわれは未来の世代から非難されるだろう。

私の見解は率直で真面目なものだった。中央アジア情勢に関する私の評価と展望に感謝しつつネシャノフ氏は同席者に私の見解を記録するよう頼んでいた。彼は私の提案を中央アジア共和国の関係する機関に伝えると約束した。しかしモスクワは同地域での地理的な一体性を決して承認しなかった。中央アジア諸国が広範な関係を持つようになるのは危険だと判断したからだ。過去40年間、ソ連指導部はアフガニスタンの親パシュトゥーン政権との「地政学的理解」を維持してきた。

- ソ連政府は過去、アフガニスタンのパシュトゥーン族の指導のみを支持してきた。
- 同一民族の国境を越えた関係が時として予期せぬ結果を招いたことはあったが、アフガニスタンの非パシュトゥーン指導者の存在はソ連およびパシュトゥーン族の利益に対抗するものではない。
- 軍事的な観点から言えば、カーブルにおけるパシュトゥーン政権の存在は干渉によりパキスタンを不安定にする可能性がある。

## 27 北部の反乱

前にも述べたようにナジブラと執行会議のその他のメンバーとの関係は悪化した。国民和解政策が進展せず停滞していることがその原因だった。祖国党執行会議内の反ナジブラ戦線は日に日に弾みを増した。私はワキル外相との間である理解に達していた。それは彼は大統領に譲歩してしばらく国を離れていた方がよいだろう、という判断だった。それでワキルはしばらくヨーロッパに行く計画を立てたが大統領の同意を得られなかった。1992年2月5日、私は母の病気を理由にニューデリーに向かった。マスードが最も信頼するメッセンジャーであるアクラミも私に同行した。危急の時であったがこのことはマスードに伝えられ彼は同意した。しかし2週間を超えるというのが彼の意向だった。しかしながら、事態の進展は予想以上に急でマスードの意向を超える長い滞在は許されなかった。ワキルからニューデリーに電話がかかってきた。直ぐ帰れという。1992年2月28日、私はカーブルに向かった。ニューデリー滞在中に私は教育相のアスマティ女史からマザーリシャリフ市が徐々にコントロールできなくなっている、とのニュースを聞いていた。カーブル空港に着くと私はまっすぐ自分の執務室に向かった。

副大統領のハティフとソラビが次々と私の部屋にやってきた。午前11時だった。彼らは怯え混乱し、アフガニスタンの現状を痛く心配していた。彼らは口々に大統領のやり方に不満をぶつけた。大統領とはもはや大事な問題について議論できない、大統領は問題を闇の中に放置したまま、と。ハティフは言う。「ナジブラ博士はこの壊れた船を難破させようとしている。大嵐がわれわれを襲おうとしているのに」と。彼らの不平は終わらない。われわれは昼食時間過ぎまで議論をつづけた。その時電話がかかってきた。ハティフが一言二言しゃべった後、受話器を私に渡した。相手は大統領だった。昼食の後、彼の部屋に来てくれ、との頼みだった。

2時頃、私は彼の部屋に行った。苦悩の表情をしていた。テーブルを挟んで座った。彼は語り始めた。

君はしばらく留守にしていたから、この間のことを説明しよう。問題はドスタム将軍が3人の高官をマザーリシャリフからどこか他に移動させろと言ってきたことだ。その3人とは、

- アサック将軍：北部諸州の軍民統治者

- アブドゥル・ラスル・ベコダ将軍：18師団司令官
- タジ・モハマド：KHAD長官

私は危機を終わらせる解決を見つけ出させるためラフィ将軍（軍事担当副大統領）をマザーリシャリフに送った。ラフィには彼らの抜けた後の対策をしたら3高官を解任しカーブルに送り返す権限を与えた。状況の深刻さを考慮してラフィは彼らをカーブルに連れ戻してきた。

大統領はさらにつづけた。ハイラタン市の兵站責任者モメン将軍を解任したがドスタム将軍は彼の移送に同意せず、大統領には受け入れがたい新しい提案をしてきた。大統領はとても苛々した表情でつづけた。「ムータット同志、私はドスタム将軍の提案を拒絶しただけでなく、アサック将軍、ベコダ将軍、タジ・モハマドの3人を元の職に戻し、アサック将軍のように厳しい部下を何人かつけてウズベクどもを罰することにした。」胸中の不安が言葉に現れていた。「ドスタムが何者だと言うんだ？ 無学なバカ者だ！ 俺たちがヤツを、ただの兵士から将軍に引き上げてやったんだ。俺がヤツに『アフガニスタンの英雄』勲章をくれてやったんじゃないか。」彼は再び私に言った。

ムータット同志！

パシュトゥーン族というのは、物事に熱中しやすく、凶暴（なぜ大統領がこの単語を使ったのか私には理解できなかった）な人種だ。彼らはもしひとつのスローガンの下に団結することを決めたら、すべてのパシュトゥーン部族、国境近くのマースッド族やワジル族、アフガニスタンのあらゆる地域にすむすべてのパシュトゥーン族は団結するだろう。彼らはアフガニスタン北部を襲撃してウズベク族、タジク族をタシケントやドゥシャンベへ押し戻してしまうだろう。

彼は感情的になっていた。彼の言葉はすべて胸の底から絞り出されてくるようだった。ウソ偽りのない隠されていた信念が表面ににじみ出てきた。彼は歴史から引用しながら多くを語った。

ムータット同志！ 君はアフガニスタンの歴史をよく知っている。パシュトゥーン族は団結して何度もインド人を打ち負かした。われわれはその



輝かしい子孫なのだ。

彼の話聞きながら私はじっと考え込んだ。なんと深みのある多様で複雑な事柄なのだ。私は彼に反論した。

ナジブラ同志！

君がそんなに神経的で絶望的になっているなんて信じられなかった。君は知っているじゃないか。偉大な指導者や政治家は困難や危機の試練をくぐり抜けなきゃならないことを。君は自分自身で問題を複雑にしている。回答は単純なのに。ドスタム将軍と君との対立を解消するのに国連の仲介など必要ない。君はこれまで何度もドスタム将軍を称賛した。彼は君の国をいくつもの戦線で何度も救ったじゃないか。パクティア、カンダハール、ロガール、その他多くの戦線で。ドスタム将軍が君の国の利益を守っている時、彼には何の問題もなかった。どうして今になって、彼はアフガニスタンを北と南に分割しようとしているなんて言えるんだ？ 君が彼を将軍にしたんじゃないか。彼をアフガン英雄にしたのも君だ。ドスタム将軍が腐敗した高官を首にしてくれと君に頼んできたら、彼らを首にするだけじゃないか。首にするだけでなく、軍法会議に送るのが君の仕事じゃないか。少なくともこのような措置を取るためには政治判断を優先させるべきだ。特殊な状況下では特殊な手段が求められる。もし君がそうすれば現在のような緊張や危機的状況は生まれなかった。君が守ろうとしている3人の高官は北部の非パシュトゥーン族住民に差別的な振る舞いをしてきたことで有名な連中だ。このようなパシュトゥーン人を非パシュトゥーン族地方に配属するのは君の政府にとって適切な政策とは言えない。君の第1の仕事はアフガン問題を解決することであって、マザーリシャリフやその他の北部の都市の状況を悪化させることじゃない。君は自分自身で頭痛の種を撒くべきじゃない。

大統領は私の話を黙って聞いていた。私は彼の話には出てこなかったが、アーマド・シャー・ドゥラーニーのインド侵略に触れていかなる理由、いかなる地方からなされたものであってもすべての侵略行為は弾劾されるべきである、と述べた。アーマド・シャー・ドゥラーニーのインド侵略がどんな理由でなされたにせよ、アフガニスタンのすべての民族、部族からなる彼の軍隊を動員し

た。パシュトゥーン族に付き添って他の民族がこの軍隊に加わった事実は十分に信用できる文書で実証されている。私が彼に言いたかったのは、われわれは今、移行政権の樹立に向けて動いているのだから彼は彼の相違点を賢く解決し暫定政権に権力をスムーズに移行できるようなことは何でもやるべきだ、ということだった。ところが実際には、大統領の無謀で差別的な政策が北部諸州でドスタム将軍の不服従や反乱を引き起こしたのだ。状況は大統領にとって取り返しのつかないところまで来ていた。ドスタム将軍の反乱はアフガニスタンの過去14年間の闘争のターニングポイントとなった。

最終的にドスタム将軍はアサック将軍とその部隊を武装解除し1992年3月初め、カーブルに送り返してきた。大統領の指示や命令はもはや彼らには受け入れられなかった。モメン将軍はハイラタンの兵站責任者としての任務を継続した。ドスタム将軍は北部諸州の事実上の第1人者となり、ナジブラは同地域のコントロールをすべて失った。

ドスタム将軍は1991年の春、マスードと戦って敗れたコウジャガール陥落の後、マスードと関係を樹立した。この戦闘でドスタムは戦車約30輛をはじめ多くの軍用車輛を失った。多くのウズベク兵がマスード軍に捕らわれた。しかしマスードは捕虜に対して利口な方策を採った。彼らを解放しただけでなく、手土産だけでなくかなりの金を持たせたのだ。捕虜に対するこのような人道的な扱いの心理的インパクトは絶大で、彼らはその後2度とふたたび戦闘に加わらなかった。ナジブラの北部に対する扱いは、ドスタム将軍がマスードに近づく恰好の口実を与えた。彼らはナジブラを権力から引き下ろす共同計画を採用した。サラン峠の北部からハイラタン港にいたる高速道路を防衛していたイスマイル派の民兵も北部軍事連合に合流した。彼らはヒンズークシュの北部地域を支配していた。この事実は軍事的、経済的、政治的観点からみて非常に重要だった。

ヒンズークシュ山脈の北部地方は第18師団、第20師団、第80連隊、第52連隊、Mig21、Su-17を含む爆撃機連隊、最新兵器や弾薬の貯蔵庫などが配置されていた。アフガニスタンの北部地域は農業、酪農の生産物で自給自足できる地域である。命の動脈と呼ばれるカーブル-ハイラタン間の主要幹線道路もまた北部連合の支配下にある。

北部での急速な事態の進展をみてヤクビ国家保安相はスカッドミサイルでハイラタン補給基地を殲滅する作戦を主張したがそれは周囲から反対された。1992年3月

14日の土曜日、大統領は私に、ドスタム将軍と連絡を取って政府を弱体化させるすべての冒険主義的な行為をやめさせろ、と要請してきた。私は彼と連絡を取ることは約束したが、そのような要請の結果はやる前から判りきっていた。ドスタム将軍の反逆は指導部に対する単なる反対行動ではなく、ナジブラ大統領その人が推進する誤った政策が生み出したフラストレーションの爆発なのだ。ナジブラにとって最善の途は祖国党執行会議と彼自身との意見の食い違いを解消することであり、ドスタム将軍と対決することではなかった。

大統領はかつて彼が信頼する副大統領のラフィ将軍をドスタム将軍との誤解を解消するためにマザーリシャリフに派遣したことがある。彼は大統領を補佐する能力に欠けた人物であって、案の上、事態をより一層こんがらがせただけだった。ドスタム側は交渉相手としてカウイヤニかマズダックを派遣するよう言ってきた。しかし、ナジブラは2人とも信頼していなかったのでドスタムの要請を拒否した。不信に基づく同じようなことはワキルに対してもなされた。マスードと交渉するためにパンジシールに行くというワキルの計画に許可を与えなかったのである。指導者がいかにして自分自身の家族を含む周囲の信頼を失い周囲を疑うようになるか古典的な実例と言える。

その日の夕方、私は電話でドスタム将軍を捜した。まず、ドスタム将軍の近しい支援者であるパイカルにつながった。私は大統領のメッセージを伝えた。大統領もドスタム将軍と話そうと何度も試みていたがすべて拒絶されていた。パイカルを通じて私にドスタム将軍のメッセージが伝えられた。それは、ドスタム将軍はナジブラのナンセンスな言い草はもう二度と聞きたくない、国防副大臣のアジミ将軍を通じて明日自分のメッセージをナジブラに伝える、というものだった。大統領の要請のうち、ドスタム将軍が受け入れたのは、ただひとつだった。すなわち、カーブル市民向けの食糧を載せたトラック隊だけは安全通行を保証する、と。しかしながら200台のトラックのうち許可されたのは20台のみ。残りはマザーリシャリフ住民向けに進路を変えられてしまった。

私はドスタム将軍と電話で交わした会話の内容を大統領に伝え、アジミ将軍が翌日夕方、メッセージを携えて帰ってくるだろうと伝えた。翌日、アジミ将軍が絶望的なメッセージを大統領に運んできた。しかし実は、北部連合軍の中に反ナジブラ戦線を組織化したのはアジミ将軍だったのだ。

ドスタム将軍は代表団を率いてパンジシール溪谷のマ

スードに会いに行った。3機のヘリコプターがマザーリシャリフからパンジシール溪谷にやってきた。代表団の構成は下記の通り。

- モメン将軍：ハイラタン兵站基地責任者
- ハサムディン将軍：第80&52師団司令官
- サイエド・マンスール・ナデリ：イスラム教シーア派責任者
- ファザル・アーメド・トギャン：前カーブル州知事
- アディナ・サンギン：前カーブル市長
- ナジブラ・マシル：前鉱工業相

これらのうち3名は祖国党執行会議メンバーだった。彼らはゲストとしてマスードの総司令部に迎え入れられた。会議が開かれカブール政権に対する共同戦略が採択された。3日間の滞在の後、彼らは1992年3月16日、マザーリシャリフへ帰って行った。

ドスタム将軍の不服従行為があからさまになってからというもの、国民の大多数は大統領が権力を何らかの委員会か副大統領らに渡し退位する好機が到来したと大いなる期待を抱いた。すべての予言は「凶」と出た。しかし大統領は自分自身の政治的計算と利益を持っているように見えた。1992年3月27日、私は大統領と会った。この時彼は自責の素振りなど見せずよく知られた歌を口ずさんでいた。「時は来た。すべてのパシュトゥーンに、前の王様にも。アフガンのパシュトゥーンはパシュトゥーンの地を守る。」彼はアフガニスタンの平和と国民のために大統領官邸を明け渡す意思など一言も語らなかった。結局これが大統領と会う最後となった。いまや彼は絶望的な立場に追い込まれていた。彼の秘書トキーは重要書類や日常を記録した書類を忙しく焼却していた。国家保安相でも同じようにすべての書類を燃やした。

マスード軍はパンジシール要塞を出て、グルバハールなどの街々を経てカーブルへと向かう支度をしていた。

ナジブラはパクティン内務相、ラフィ将軍、その他のハルク派幹部を通じて大至急ヘクマチャールと連絡を取ろうとしていた。ナジブラはこの期に及んでも民族主義分子やパシュトゥーン感情を自分のために利用して国家権力を守ろうとした。もはや誰も部族に関するスローガンを誤用したり乱用したりしてはならない。部族政策はアフガニスタンに住むすべての民族グループの利益を等しく反映していなければならない。最大多数民族であるパシュトゥーン部族の人びとはアフガニスタンは出身民族の違いに関わりなくアフガニスタンに住むすべての人

びとのものであることを、よくよく考えるべきだ。

タジク、トゥルクメン、ウズベク、ハザラ、パシュトゥーン、およびその他さまざまな民族やエスニックグループの間にはひとつの有機体としてのつながりがある。恐らくパシュトゥーン族に対する彼の非難は正しく、また、未開の遅れた部族地域に対するメンタリティーを反映してはいたのだろう。しかしそのようなメンタリティーが、国の運命を決するときにゆゆしい役割を演じてはならない。

## 28 イードの前夜祭

1992年、イードの1日目は4月4日だった。政府高官や高僧たちはナマズ(集団礼拝)のため午前9時に大統領官邸内のモスクに集まった。これがモスクで祈る最後のナマズで、もちろんナジブラも出席した。ナマズが終わった時、参加者は習慣通りお互いに抱き合い、キスを交わし、祝福しあった。突然、ひとりの老人が叫んだ。「おお、大統領！ この聖なる日に神に誓います。退任しないでください！ 誰もがあなたを必要としています。」その人はマウラナ・サヒブルハク。百歳になる老人で部族の精神的指導者である。大統領は振り返って彼を見た。大統領は無言のままだった。軽食を取りに行く途中、誰もが予測不能の未来について語り合っていた。

政治的な空気は困難に満ちていて、誰もがアンハッピーな気分だった。大統領は前日、困難を打開するため4月28日に暫定政府に権力を譲ると国連に対して表明していた。彼の声明では退位して外国に亡命したいと希望が述べられていた。この声明は国民の間にさまざまな反応を引き起こした。ひとつはこの声明は永続する平和を樹立する正しい方向への第一歩だと称賛するものであり、他方は時期尚早だとするものであった。祖国党の党員は怒り狂った。退任は必要であり既定事実であるが大統領は祖国党書記長の地位を勝手に離れられない、と彼らは主張した。党大会だけがその権利を持っているのであり、このような困難な時期に党を離れる権限はナジブラにはないし、ましては外国に逃亡して安逸な生活をするなど許されない、というわけである。また国連代表は大統領権限を移管すべき移行機構をいまだ具現化していない、と述べる者もいた。ある人物をトップから外し、他の人物を外国から連れて来るのは簡単なプロセスではない。さらに国連の計画はアフガニスタンイスラム党やその他のムジャヒディン野戦指揮官らの強烈な反対に直面した。彼らは国連の計画はアフガニスタンにイスラム国家が樹立されるのを妨害する陰謀だと弾劾した。

イードの礼拝には多くの人びとが参加した。大群衆の中では意見を交換しあうのは難しかった。私は混雑を離れてライク、カウヤニ、ワキルを呼んだ。その夜はライクとカウヤニとの過去2年間の張り詰めた関係を緩め、反対派に対するわれわれの対策を協議する良い機会になった。2人の祖国党高官の間の相違はこの夜解消されたように見えた。誰もが本音で語り合った。私は祖国党

とアーマド・シャー・マスードとの間にどのようにして関係をつくるか、戦略的な観点についてライクの意見を聞こうと思い、マスードが執行会議メンバーとの連携を拡大している事実を彼に伝えた。スライマン・ライクは彼の考えをこう述べた。

この男はわが国の歴史に輝かしいページを開いた。私がそれをハッピーと思おうとそうでなかろうと、これは否定できない事実なんだ。しかし大統領は民族的英雄や人士を好まない。彼だけが英雄になりたいんだ。だから党や社会で目立った人物らを彼は迫害してきたんだ。ナジブラ経由でなく直接マスードと知り合いになれば、どんなに嬉しいことか。私は党人だ。そして党の決定やアドバイスがいかなるものであれ、それに従うつもりだ。われわれは国民や国家を苦しめてきた。いまや彼らが彼らの国のために働けるようにしてやるべきだ。

ライクの見解は誠実だった。ライクは単純な人物ではない。しかし多くの国民は彼を知らない。彼は政治家というより文学者だ。私はこの点で彼を深く尊敬している。

## 29 パキスタン訪問の失敗

北部地方での事態急展開に直面した大統領は影響力を持った部族長らと KHAD の仲介で4月初めにパキスタンを訪問する決心をした。彼はパキスタン大統領ゴラム・イサック・ハーンとナワズ・シャリフ首相に会う心算だった。この代表団の構成は、ワキル外相、ヤクビ国家保安相、および大統領本人、それにトキィ秘書官だった。特別機でイスラマバード近くの軍事基地に着陸する予定だった。この計画は極秘裏に進められ政府および党指導部にも知らされなかった。当初ナジブラはワキルを加えるのに反対だったが外相を外すわけにはいかなかった。

このせわしい旅行の主目的はパシュトゥーン族の利益にとって脅威だとみなされた北部連合軍に対抗するためだった。ナジブラは「北部連合」の出現によりパキスタンの安全が脅かされることをパキスタン指導部に教えにいこうと考えた。しかし計画は漏れ、その目的が暴露され、党内の反発を買い、中止された。党員はパキスタン軍情報局 (ISI) の仲介によるナジブラとヘクマチヤールによる新しい連合を見たくなかったのである。

パキスタン当局はこの地域における4千年の歴史をよく知っている。すべての侵略軍は北方からスライマン山脈を越えてやって来、支配を確立した。南から北への侵略の歴史はない。唯一の例外はイギリス植民地主義者が試みて失敗した19世紀と20世紀初めの侵略だけである。北から南への侵略はトゥルクメン、タジク、それにウズベク民族が決定的な役割を果たしている。アフガニスタン初代の国王であるアーマド・シャー・ドゥラーニーでさえウズベク族を主体とする強力な騎兵軍団を持っていた。彼は息子たちにウズベク族とはいかなる対決も避ける、奴らは蜂みみたいなもので触るものは誰彼かまわず刺しまくる、と教えたという逸話が残されている。紀元1754年にクンドゥズ州で起きたクバド・ハーンに率いられたウズベク族の反乱を鎮圧した時以来、この話は真実である。

大統領のパキスタン訪問計画が取り消されたのにはふたつの要因が強く影響している。ヘクマチヤールとの和解、および ISI への隷属を受け入れたこと、のふたつである。つまり、第1はマスードによる北部連合軍のカーブルへの進軍であり、第2はペシャワールに拠点を置くヘクマチヤール以外の敵対勢力の反対である。訪問計画が流産した後、1992年4月9日、ナジブラはイスラム党の5人からなる代表団と交渉を始めた。影響力のある部族



指導者フェルドゥス・ハーンがこの会合を開くにあたって重要な役割を演じた。この会合ではナジブラとヘクマチャールとの間でナジブラに忠誠を誓う高官がイスラム党に合流し北部連合軍の進軍を食い止めるという共同行動プランが採択された。この共同行動プランにもとづき、北部連合軍の進撃をストップさせるための「失敗を運命づけられた防護壁」、つまり、パルワン州知事タレク將軍、パルワン州イスラム党司令官ファテールおよびファリド司令官らの連合が形成された。

マスードは4月8日、グルバハールでジャブルサラジへの進軍を準備していた。われわれに宛てたメッセージで彼は党の決定に忠実な高官の名前を知らせろと言ってきた。国防相副大臣のアジミ將軍、陸軍参謀長のデラル將軍が名簿を作成しマスードに送った。一方、陸軍第2師団の司令官にはマスードと共同でサラン・ハイウェーの平和と安全を守れと命令が下された。これは、10年間の戦闘において敵対する2つの軍隊が敵対関係を終わらせて統一命令の下で行動する初めての出来事であった。

ナジブラは北からの進撃を食い止め、自分自身の計画を実行するチャンスを見出そうと絶え間なく努力したが情勢は決して彼の思うようにはならなかった。4月9日午前2時、ナジブラは最後のスカッドミサイルをマスードの総司令部に向けて発射した。しかしミサイルは標的を外した。マスードがジャブルサラジ市に進軍した時、ふたつの疑問がわき起こった。第1はナジブラをどうすべきか、である。マスードはナジブラには国外追放を許すと考えていた。そうすれば自分が国民に対して行った行為を反省し後悔するだろう、と。第2はカーブルに樹立すべき権力構成についてである。私を含む大多数の祖国党メンバーはマスードが厳格に監督するムジャヒディン野戦指揮官会議への権力移管に賛成していた。祖国党の高官たちはその会議の中に一定の地位を得ようとは考えず、彼らがなすべき奉仕と協力を誠実に行おうと考えていた。したがって祖国党執行会議メンバーはパキスタンに拠点を置くムジャヒディン指導者たちの会議へ権力を移管することには賛成していなかったのである。ムジャヒディン指導者らは過去14年間にお互いに闘い合う十分なる経験を身につけていた。一方、パキスタンのISIはムジャヒディン指導者会議メンバーに強い影響力を持っていた。ペシャワールでつくられたいかなる解決方式もアフガン国民のためにはならず、首都カーブルは武装したムジャヒディングループ間の敵対と流血の戦場を生むだけであろう。われわれの見解をマスードに伝えた。

マスードは折り返し回答してきた。ペシャワルのムジャヒディン指導者らには道徳的な義務があるから意見の相違を脇に置きギャップを埋めるために一刻も早く統一した指導部をカーブルに作ろうと呼びかけなければならない、さもないと責務を果たすことができない、私はカーブルに入城し治安維持の責務を果たす、と。

## 30 真夜中の会議

ジャブルサラジの次の検討対象はチャレカールとバگرام空軍基地だった。現在進行中の特殊な状況を考えれば、当然バگرام要塞に関してはジャブルサラジの時と同じくマスード指揮下で共同司令部をつくるべきだった。ところがタレク將軍はイスラム党軍をバگرام空軍基地に潜入させ、基地を管理下に置こうとした。しかしその試みは失敗した。チャレカール市とバگرام空軍基地は4月9日木曜日午前2時、マスードの管理下に入った。カーブルとバگرام間の通信は途絶えたが大統領はまだ何が起きているのか知らなかった。

祖国党執行会議は4月9日木曜日の深夜、ナジブラの司会の下に緊急会議を開きパルワン州の最新情勢を分析した。大統領は北部から攻め寄せるムジャヒディンのカーブル進軍のスピードを緩めるには最終的には空軍力に頼るしかないと決断せざるを得なかった。国防相のワタンジャールがその日の午前2時、バگرام空軍基地がマスード軍の手に落ちたと報告した。ナジブラはムスタファ將軍はどこにいる、と尋ねた。ムスタファはバگرام空軍基地の司令官だ。国防相は答えた。「彼はマスード側にいます。」大統領はもう一度尋ねた。「セブガトゥラは？」セブガトゥラはバگرام空軍基地の責任者だ。国防相は言った。「ナジブラ同志！ 一兵卒から將軍まで、誰ももうあなたを守ろうとする者はいないので。他に手段はありません、権力を委譲する以外には。」ちょうど午前2時だった。大統領はひとりになったことを知り、希望を失った。即座に権力を委譲する用意があると表明し、移管作業に入るよう支持した。執行会議メンバーは失意と不安を胸に会議を終了した。ワキル外相は午前3時に電話してきた。「ムータット同志！ ナジブラはついに権力移譲を認めた。彼が党の決定に忠実なら、その義務を自分で遂行したはずだ。しかし、今や、われわれがナジブラ抜きでムジャヒディン暫定政権に権力移行の道筋をつけることができる。決議だけじゃダメだ。軍事的圧力をかけなければ彼は決して権力を手放さない。」

アフガニスタンに関する国連事務総長特使ベノン・セバンはいまだに彼が提案した解決方法で行けると信じてカーブルとイスラマバードの間を行ったり来たりしていた。ペシャワルからカーブルへ政権移行を行う暫定機構代表として彼は22人のうちから11人の人物を集めた。この計画はアフガン社会の現実と一致していなかった。

彼は4月10日金曜日、カーブルを訪れた時、ムジャヒディン軍がカーブルに進軍してくることを知らされた。外相との会談の後、セバンは予想外の事態が進行しているのに気づいた。暫定政府樹立に向けた彼の努力はまったく無駄になってしまった。彼はすぐさまパキスタンにとって返し、彼の提案と和平計画をどうするかパキスタン当局者やムジャヒディン指導者たちと話し合った。翌日、彼はまたカーブルに戻り、執行会議の会合に参加した。大統領も遅れて参加した。そこでは大統領の辞任の件が議題とされ、討議された。その場で大統領は辞任について保証し平和裡に権力を移譲する用意があると表明した。それを聞いてセバン氏はイスラマバードに向かった。

ファリド・マズダックが私の執務室を訪れたのは4月13日の午前9時頃だった。彼は笑顔で、セバン氏がカーブルに来て大統領をパキスタンに連れて行くという噂が飛び交っていると言い、今日の午後4時に彼はパキスタン首相ナワズ・シャリフと会い、その足でカーブルに戻ってくる予定だと言う。私はもしそれが公式な決定なら大統領はセバン氏と特別機で行くんじゃないか？と彼に尋ねた。彼は絶対にそんなことはありえない、と否定した。噂は噂にすぎなかった。

国が一大岐路に立つこの時に祖国党執行会議メンバーがそれぞれどのような政治判断をしていたか記録しておくことは意味があるだろう。

#### 1. マスード支持

- ナジムディン・カウイヤニ：国際局長
- ファリド・アーマド・マズダック：組織局長
- アブドウル・ワキル：外相
- モハムード・バリアライ：前副首相
- サイド・エクラム・パイギル

#### 2. ヘクマチャール支持

- ナジブラ：大統領および党議長
- ナズ・モハムマド・パクティン：内務相
- モハムマド・ラフィ将軍：副大統領

#### 3. マスード寄りのシンパサイザー

- ナザル・モハムマド
- アスラム・ワタンジャール：国防相
- スライマン・ライク：党副議長
- アブドウル・クウドウス・ゴルバンディ

3番目のグループは実際には明確な政治姿勢を表明していなかったが、彼らと話した機会にたびたびマスードへのシンパシーを表明していた。執行会議の公式な立場は権力の移管に関してヘクマチャールのイスラム党を除くすべてのムジャヒディン組織と交渉する方針だった。交渉相手として認められた第一人者はマスード司令官だった。ナザル・モハムマドとワタンジャールの2人はハルク派に属していたが、前国防相のタナイ将軍や前内務相のグラブゾイなどその他のハルク派を拒絶していた。そして多くの将校らと一緒にイスラム党に変質した。4月20日、2時間にわたってナザル・モハムマドと話をした時、彼はワタンジャールと一緒にチャレカールに行きマスードに合いたい、と希望を表明した。しかし事態の進展が余りにも急だったため、彼らの願いは実現しなかった。私がマスードと話した時には、彼はヘクマチャールと直接連絡を取って彼の軍隊をカーブルに入れるのは控えるよう説得すると約束した。もし彼が同意しなかったらマスードは自分の軍隊をカーブルから10km圏に進めると言った。さらにもし、ヘクマチャールがカーブルから軍隊を引かなかつたら、マスードが市内に入る、とも言明した。

われわれはパキスタンからベノン・セバンが戻るのを待っていた。彼の乗った飛行機は深夜1時30分、カーブル空港に着いた。マスードとドスタムの事前の協定により、カーブル要塞にはマザーリシャリフから15回のフライトでカーブに移送された680名の兵士が配備されていた。同時に祖国党の高官たちを護衛するための兵力配置も合意されていた。

## 31 脱出失敗

ドスタム将軍の部隊は4月13日水曜日、カーブル空港の支配権を掌握した。大統領はその日の午後10時まで大統領の地位にとどまる。彼はムジャヒディン軍がカーブルに進軍してくるのを間近で目撃した。大統領との連絡は午後10時で途絶えた。大統領官邸はOSGAP

(アフガニスタン・パキスタン国連事務総長事務所)に隣接していた。ナジブラは弟のアーマドザイおよび私設秘書のジャフサール、アシスタント秘書のトキィらとともに壁を乗り越えて声域であるOSGAPに移った。すべてはベノン・セバン国連特使が事前に整えた手筈通りに進化した。

カーブル市民は午後10時以降は厳格な夜間外出禁止令下で生活する。禁止令は午後10時から翌午前4時までである。この時間帯、カーブルは静かで車もほとんど走らない。移動を認められた者は誰でも特別外出許可証を監視所で呈示せねばならない。4月13日の夜はカーブル市内のすべての軍事監視所(カーブル空港を除く)では特殊な特別外出許可証が発行された。それはドスタム将軍の部隊が自分たちの独自の暗号コードを使って発行したものだった。

ナジブラは随員と一緒に4輦からなるOSGAP車列の1輦に乗り込み、午前1時30分、カーブル空港に向かった。その間、国連特使の飛行機が空港に着陸し誘導路を移動してきた。ふたりのウズベク民兵が飛行機に立ちふさがり、セバン氏がそこから離れるのを許さなかった。セバン氏は通訳を介してふたりのウズベク民兵を説得しようとしたが無駄だった。民兵は指揮官の到着を待った。後にセバン氏に聞いたところによると民兵のひとりには自転車に乗って飛行機を囲む円を描き、もうひとりにはセバン氏にタバコを勧めたそうだ。

ナジブラは国連の車で空港へ向かっていた。そして多くのチェックポイントを無事通り抜けた。空港敷地の入り口で彼の乗った車はウズベク民兵により停止させられた。彼らは正しい許可証を持っていなかったので責任将校がやってきた。彼は一瞥して車内に大統領が座っているのを発見した。ナジブラは将校の目を見ながら言った。「息子よ、私は大統領だ。これからお客を迎えに行かなければならない。」将校は答えた。「分かっています、大統領。しかし空港に入るには許可証が必要です。さもないければ引き返すか、上級将校が来るまでお待ちください。」事態が一筋縄で行かないのを悟ったナジブラは空

港を離れ OSGAP へ戻ることにした。

この事件を聞いてナジブラに何度も逮捕されたり釈放されたりを繰り返していたマームード・バリアライのような多くの党員は幸福感を覚えた。

このスキャンダラスな事件はセバン氏その人によって引き起こされたものだった。関連する事件として、国家保安相のヤクビとその近しいバクィ准将のケースがある。彼らは翌日早朝、彼らのオフィスで親ムジャヒディン分子により殺害された。国家保安相はムジャヒディン軍の進撃を阻止する巨大な力を有していた。

## 32 副大統領の解職

ナジブラは脱出に失敗する前日の4月13日、4人の大統領を解職する命令書に署名していた。14日に執務室に行くといわれわれの机の上には署名された命令書が置いてあった。大統領はその時、国連の保護の下、OSGAPの敷地内にいた。政府の職員たちはその日も自分の職務を遂行するのに忙しく、何が起きたのか誰も知らなかった。アフガニスタン問題にさらにひとつジレンマが加わった。

われわれはハティフ第一副大統領の執務室で会議を開いた。4人の副大統領に加えて上院議長のハビブ博士、国会議長のハリル・アーマド・アバウィ博士、アブドゥル・ワハブ・サフィ憲法会議議長、ザフィ最高裁副長官、ハレクィヤール首相らもこの会議に出席した。ハティフが会議冒頭、昨夜の事情つまり大統領が国連特使にかどわかされ国を脱出しようとしたが、空港警備に阻まれ国外脱出に失敗したことを報告した。さらに、大統領はいま国連の保護の下OSGAP敷地内にいること、同時に彼が副大統領4人の解職命令に署名していたことを報告した。ハティフは次のように発言して出席者の意見を聞いた。

今日、君たちを悩ませてしまうが、われわれは何をなすべきか意見を聞かせてくれ。法的にはナジブラが命令書にサインした時点でわれわれは解職されている。そのとき彼は正式の大統領だったからだ。だからいま、わが国には大統領も副大統領もないことになる。逃亡を図る大統領が副大統領を解職するという空前無比の事態が起きてしまった。このような時、国民はどうすればよいのか。

熟達した法律家のサフィは国会で合同会議を開くべきだとアドバイスした。合同会議にはふたつの役割がある。ひとつは大統領令を無効化する役割、もうひとつは副大統領のひとりを選出する役割である。この方法をとれば憲法との矛盾はない。そして選出された副大統領が一時的に大統領の職務を遂行する。ハティフが最年長の副大統領だからこの際第一の候補たり得る。アバウィ博士とハビビ博士が合同会議を招集し、ここに副大統領が出席すればよい、と。

上下院の合同会議は4月22日午後3時に開催された。議員の中からは緊急事態であるにもかかわらず合同会議の開催が遅れたのはけしからん、と批判が出た。討論の後、4人の議員、すなわちムザファリ、ベストワル、



シャーレスタニ、それにミルケルの4名がスピーチを行い、憲法第81条8項に基づいて最年長の副大統領を新しい国家元首として選出すべきである、と提案した。会議は迅速に進み終了した。大統領命令は無効化され、ハティフが国家元首に選出された。

### 33 招かれざる客

突然、まったく自分勝手にカーブルに現れたスリヴァン氏は、ニューヨークに事務所を持ち合衆国国務省および合衆国議会南アジア委員会と密接な関係を持つアフガニスタン研究センターの所長だと自称した。私は過去一度だけ彼とカーブルで会い、アフガニスタンについて多くを語り合ったことがある。ナジブラは国務省や合衆国議会への働きかけに彼の影響力を使おうとした。

スリヴァン氏はナジブラの招待でカーブルにやって来たのだが到着したのは4月22日だった。その時すでに大統領は難民となってカーブルのOSGAP敷地内にいた。スリヴァン氏は私の執務室に連絡をしてきた。私は大統領官邸の国際関係局長に会って彼が何について話を聞きたいのか調べるよう指示した。

わが国の政治・軍事情勢は彼の滞在中ドラスティックに変化し、めまぐるしく様相を変えた。彼はプロジェクトをいくつか提案したがその中のひとつはアフガニスタン問題の解決だった。彼はこの提案のために長い間活動をつづけてきていた。この提案とはアフガン国内でふたつのステージにわけてふたつの会議を開くという、国連計画の焼き直しのようなプランだった。事態が先に進みその提案はすでに紙の中だけのものになっていた。もうひとつの計画はカーブルの米大使館で働いていた8人のアフガン人の釈放だった。8人はCIAのエージェントだとの嫌疑で数年前に逮捕されていた。

この事件の担当、国家保安省副大臣ヤール・モハムドに問い合わせたところ8人は起訴されていまだに在監中だという。私は即日、罪状にかかわらず罪を放免する全員の釈放命令書にサインした。スリヴァン氏は驚いて前回この問題をナジブラに話したところ国務省の公式書簡を持ってこい、そうすれば釈放すると言われたと語った。このナジブラ大統領のメッセージを米議会の特別委員会に提出したが、ナジブラのギャンブル行為にすぎないとして受け入れられなかった、という。

われわれはスリヴァン氏にカーブル市の不安定な状況を説明し彼の安全が心配であると伝えた。われわれは彼にマスードとの会見をアレンジすると提案した。実現すれば彼にとって特ダネとなるだろう。われわれはマスードと無線で連絡しマスードは会うと返事し次のようにアドバイスした。すなわち、カーブルーバグラム間にはイスラム党グループがいるから気をつけろ。カメラを持ってジャーナリストとしてチャレカールに向かうと言え。

しかしイスラム党グループはチャレカール行きを邪魔するかもしれない。ムジャヒディングループがカーブルに入った後は何が起きるか分からない、と。

## 34 ベノン・セヴァン

不名誉な失敗の後、セヴァンは4月14日早朝、祖国党執行会議メンバーと緊急会議を持った。彼はこの非常時に執行会議メンバーの意向を把握したかったのである。執行会議は権力の空白期間を最小限に止めるため大統領を退任させたいと考えていた。したがって執行会議メンバーはセヴァンの行動に怒りを隠せなかった。セヴァンには祖国党書記長の地位からナジブラを退任させる権利はない、国連特使としての義務はナジブラに大統領としての能力を発揮させることであるはずだ、と彼を批判し、糾弾した。祖国党書記長としてのナジブラの去就を決めるのは祖国党中央会議の所管事項だ。国連の信用を誤用して大統領を不法に国外に連れ出そうとしたセヴァンは激しく非難された。国連事務総長の特使が実行した予測不能で大胆なこのシナリオは思慮の足りない無謀な誤りの実例として国連の歴史に刻み込まれるだろう。セヴァンは苛々した表情でこのような非難を拒絶し、この事件を「国連が行う保護活動のひとつ」と呼んだ。彼は大統領みずからがわれわれに出国計画の詳細を語るべきだったと主張した。彼はあの夜執行会議メンバーが大統領をエスコートすると期待していた、とさえ述べた。そして彼は自分の義務を遂行しただけだ、と。さらに大統領が周囲に相談しなかったのは遺憾だったと述べ、ナジブラを国外に連れ出す件を許可するよう要請した。

この要請は拒否された。なぜなら執行会議には大統領をどうこうする権限はない、大統領の運命を決められるのは憲法とローヤ・ジルガだけだから。アフガニスタン国民は国連に大きな期待を寄せている。だからこのような状況をもたらしたセヴァンが糾弾されるのである。事実が示すように、セヴァンは大統領の件で個人的に動いていた。この会議で彼は自分の面子を守ることに汲汲としていた。そして失敗の責任を取ろうとしなかった。国際社会は無能な国連外交官によって舐めさせられたアフガニスタンの苦い経験から多くを学ぶべきである。

執行会議メンバーとの会合を終えたその足で、セヴァンは大急ぎでわれわれ副大統領たちに会いに来た。セヴァンがまずやって来たのは4月14日の午前9時、国際関係担当副大統領である私の執務室だった。この何年かアフガン紛争に関わりつづけた彼との初めての会見だった。セヴァンが大統領と個人的にことを進めている最中、多くの政府高官は藪の中に置かれていた。セヴァンは副大統領だろうとその他の高官たちだろうと部屋を

尋ねてノックするのをためらうような人物ではない。今回私のところにやって来たのもナジブラの解放を保証させようとするものだ。外交辞令を交わした後、彼に質問してみた。すなわち、セヴァンのアフガン紛争解決に向けた努力が効果を発揮すると楽観的に考えた場合、ムジャヒディングループとの交渉から得られる結果とは一体何なんだ、と。すると彼はペシャワルにいるムジャヒディン指導部に対する不平不満を述べ始めた。ムジャヒディン指導部には統一が欠けており仲間内の戦闘ばかりしている、とムジャヒディンリーダーたちを汚い言葉で罵った。私は彼を遮り、ムジャヒディンが過去14年間お互いの争いに没頭してきた事実を無視するわけに行かない、いまこそ彼らは新しい現実に合わせて彼らの思考方法を切り替える時だ。しかしアフガン紛争のどの解決案でも彼らのシェアが大きすぎる、と主張した。さらに私はアフガニスタン国内に拠点を持ついずれかの野戦指揮官と会う気はあるかと聞いてみた。努力する、と彼は答えた。だがそれは実現しなかった。われわれの会見は1時間に満たなかった。この会見中も彼は大統領を国外に連れ出そうとして失敗したことの弁明ばかりをつづけた。彼は他の副大統領にも私の時と同じ接し方をした。彼と会った副大統領たちも彼に対する不満を表明した。彼らはマスードとヘクマチヤールとの間に実行可能な協定が成立しない限り、アフガニスタンには永続可能な平和はこないと主張した。もしセヴァンが彼らの間に理解と合意が成立する手助けをしたら事態は円滑に進行したことだろう。

## 35 マスードとワキルの会談

前述したようにマスードはワキル外相を彼の司令部に招待していた。以前から大統領はワキルへの敵愾心からふたりの会談に反対していた。もしパンジシール渓谷でのワキルとマスードの会談が実現していたら建設的な成果が生まれたことだろう。大統領はすでに権力を持っていないのだからふたりの会談は緊急に必要とされた。マスードは会談の時間と場所に合意した。

ジャブルサラジはカーブルから70kmに位置している。途中の道路にはイスラム党の部隊が布陣しているためワキルはまずカーブルからマザーリシャリフに空路直行し、そこからヘリコプターに乗り換えサラン峠を越えた。

1992年4月16日のことである。彼はマスードと権力移行および共同軍事行動について議論し、合同軍をカーブルに向けて徐々に移動させること、公共財産の保護と市民に被害を及ぼさないことについて合意した。ワキルはそこで1泊し翌日カーブルに帰った。ワキルは午後6時30分に記者会見を開き、マスードとの会談結果を明らかにした。記者会見の場で彼は大統領の行動を臆病だと糾弾した。翌日彼はジャブルサラジに2回目の訪問を行った。今回はヘリコプターで直行した。天候が悪くチャレカール市近くで地上から狙撃されたが熟練したパイロットのお陰で生き延びた。2回目の訪問では権力移行の詳細について詰めが行われた。政治・軍事情勢の急展開により国連が支援する平和プランは無効となりベノン・セヴァンのミッションは失敗裡に終了した。

マスードはワキルとの会談結果をペシャワルのムジャヒディン指導部に伝え、意見の相違を脇に置き、カーブルで暫定政府を樹立しよう、と呼びかけた。パキスタン当局は彼らのコントロール外で推移しているカーブルでの事態を、心配しつつ緻密にフォローしつづけた。パキスタン軍はマスードとドスタムの連合を喜ばなかった。なぜなら彼らの14年間に及ぶ努力目標はカーブルにかいらい政府を造ることだったからである。マスードによって率いられる野戦指揮官による会議は、もしペシャワルのムジャヒディン指導者たちが合意にいたらなかった場合には、政府軍と一緒に彼らの権威をカーブルに樹立するというものだった。それは前政府と祖国党指導部の熟慮のすえの政治目標だった。

## 36 ラフィ将軍とヘクマチャール

マスード・ワキル会談はある特定の政治集団にパニックと混乱を生じさせた。親イスラム党分子はイスラム党部隊をカーブル市に浸透させようとしていた。ラフィ将軍は権力をムジャヒディンに渡す検討を行うとの口実で執行会議の会合を開いた。ラフィ将軍はパクティン内務相およびその他の将軍らと権力移管に関してロガール州でヘクマチャールと交渉する計画を持っていた。ハティフはラフィ将軍に対してこの件は議会の合同会議で信任投票をする必要があると念を押した。ラフィはそれを無視し4月22日午後4時、タジベク丘からロガールヘヘリコプターで飛んだ。彼はそこでヘクマチャールと数時間過ごしカーブルへ戻ってきた。

ラフィは午後9時30分ころ電話してきた。「ムータット同志！ デルコシア宮殿に来てくれ。会議をやる。他の党员や政府高官も参加する」。行くと、指導部員らは宮殿の1階に集まっていた。もちろんラフィ将軍も来ていた。午後10時近辺だった。宮殿はアマヌラー王(1901-1919)の時代に建てられ美しい庭園に囲まれている。この宮殿には20世紀の歴史的出来事の記憶が詰まっている。アフガニスタンの有名な愛国者にしてアマヌラー王の近しい助力者であったゴラム・ナビ・チャルクイをナディール王が1930年に野蛮なやり方で殺害したのがこの1階の階段付近だった。

ラフィ将軍は宮殿を取り囲む美しい庭の4隅に戦車と武装部隊を配置して要塞化していた。宮殿は大統領宮殿から300mも離れていない。会場には多くの高官たちが来ていて私は大きな楕円形テーブルに座った。そのテーブルの向こうでラフィ将軍が会議を取り仕切った。彼はひとときわ際立っていた。彼の背後にはドアがあって彼の執務室につづいている。出席者は誰もが懐疑的でナーバスになっていた。私の席はラフィ将軍の向かいで右隣にワキルが座った。彼は望みなしという表情で将軍を見ていた。ラフィ将軍はヘクマチャールとのロガールでの会談報告から会議をスタートさせた。報告の中で彼は何度もイスラム党軍の強さや戦闘能力の高さについて触れた。だがそれは誇張されていた。最後に、驚くべきことに、かれはヘクマチャールから渡された最後通告を読み上げた。ラフィは、わが指導部は全員一致してヘクマチャールに権力を渡さなければならない、さもなければ彼の軍隊がカーブルに入城する、と述べた。興味深かったのは、将軍は時折り話を中断すると背後のドアを開けて隣接す

る自分の執務室に入った。会場の誰もが、会議の経過をヘクマチャールに報告しているのだと確信した。同席していた同僚のひとりが将軍に質問した。ヘクマチャールの最後通告ではどうやって権力を移行のするのか述べられていない、いま最も大事なのはどうやって流血を避けて平和的に権力を移行するかではないのか、と。さらにカウイヤニとハティフは、ラフィ将軍は責任を果たしていないと厳しく糾弾した。11時頃ラフィ将軍は再び部屋に行き、10分ほど戻ってこなかった。なんと戻ってきた彼は、いまヘクマチャールと話していたが回線が切れた、と明らかにした。ラフィ将軍の部屋の通信設備は後にヘクマチャールのイスラム党のものだったことが判明した。しかし誰も、いつそれがそこに設置されたのかは知らなかった。誰もが不安に駆られていた。ワキルが私の耳元で囁いた。

「陰謀の臭いがする。ここを出よう。今夜はわれわれの命があぶない。」

厳重な警備の下、深夜にわれわれは宮殿を出た。



## 37 暗殺計画の発露

4月23日木曜日、その電話を受けた時、私は執務室で忙しくしていた。受話器の向こうで知らない女性が怯えた声で話しかけてきた。

「ムータットさんですか？」

「そうです」

「すみません、名前は言えないのですが、緊急にお知らせしたいことがあります」

「どうぞ。お名前は不要です」

「私はついさっきまである会合に出ていました。そこであなたを暗殺する計画があるのを知りました」

「もっと詳しく！」

「金曜から土曜にかけて実行するそうです」彼女はあっさり感情的になり、震え声になった。

「彼らはあなたが車に向かう途中のテニスコートの所で襲う予定です。もしそれに失敗したらアパートに向かう階段の所で狙撃します」

彼女は私をととても尊敬していると言い、注意してくれと訴えた。暗殺計画が失敗したら名前を名乗る、と彼女は言って電話を切った。しかし直ぐに彼女はかけ直してきて、とても心配していること、そしてこのことをワキル外相にも伝えてほしい、彼も狙われている、と言った。私はそのメッセージをワキルにも伝えた。

カーブルの市内は混乱していた。誰も次に何が起こるのか判らなかつた。セキュリティガードと武装部隊を私のアパート周辺に配置し、自分のルーティンスケジュールを変更した。さらに夜の居場所を変えた。暗殺計画は失敗した。私は自宅に帰った。

権力移行を済ませた後、暗殺を企んだ人物が私を訪ねてきた。昔の知り合いだったことが判明した。私が日本に赴任した後、彼は宗旨変えしてヘクマチャールのイスラム党に加入した。そしてカーブルの商店街に爆弾を仕掛ける計画に加わった。計画が漏れ80人が捕らえられた。彼もそのひとりとして投獄された。私は日本から帰り副首相の仕事をしていた時、彼の妻と子供が釈放嘆願に来た。私は彼および何人かの釈放を大統領に頼んだところ、幸運にも大統領は同意した。彼は私の人道的な行為に対して私を消す行為で報いようとしたのだった。

いずれにせよ、彼は陰謀団の一員であることは認めなかつた。私はただ笑って聞いただけだった。彼はムジャヒディンへの権力移行に際して、私のやり方は不公平だったと文句を言った。イスラム党がしかるべきシェアを占

めるよう働くべきだったと言った。私はその主張には反論せず、彼が今また卑怯な行為を働いたにもかかわらず彼を許すことにした。自責の念よりも強い懲罰はない。彼は将来きっと自分の行為に苦しみ悔やむに違いない。薄々感じてはいたが、私に暗殺計画を知らせてくれた女性は彼の娘だった。私は彼女に感謝し恩義を感じた。

## 38 カーブル要塞

1992年4月24日金曜日午後4時、首都における最新軍事情勢を評価分析するためハティフ副大統領の執務室で緊急会議が開かれた。出席者は下記の通り。

- アブドゥル・ラヒム・ハティフ：第1副大統領
- アブドゥル・ハミド・ムータット：副大統領
- アブドゥル・ワヒド・ソラビ：副大統領
- モハムマド・ラフィ将軍：副大統領
- ファザル・ハク・ハレクィヤール：首相
- マハムード・ハビビ博士：上院議長
- ハリル・アーマド・アバウイ：国会議長
- モハムマド・アスラム・ワタンジャール：国防相
- ラズ・モハムマド・パクティン：内務相
- デラワル将軍：陸軍参謀長官
- ナビ・アジミ将軍：国防省副大臣兼カーブル要塞長官

アジミ将軍がテーブルの上に軍事地図を拡げて説明を始めた。

カーブル市民の安全はひとえに私の責任であるから、私が市内の最新軍事情勢について説明する。まず、カーブル周辺のセキュリティベルトを見てほしい。カーブルにはしっかりしたセキュリティベルトがある。これによって反対勢力の市内への侵入を防いでいる。しかしナジブラが OSGAP に逃げ込んでから状況は変わった。逃亡から2日後、南部のセキュリティベルトは無人生化し反乱者に占拠された。4日後、武装警察ポストがイスラム党軍に落ちた。このようにセキュリティベルトはロガール方面から徐々に崩れてきた。したがってカーブル要塞司令部としては不足人員を補うため南東部戦線から南部の要衝である丘の上に一定の人員を移動せざるを得なくなった。

残念ながら内務相はイスラム党の非武装勢力を第52連隊に紛れ込ませた。さらにカーブルの12の地区を越えて他のグループが内務省の敷地内にまで入り込んでいる。これらの人員は最初は一般人の服装をして内務省にはいりそれから武装する。私は内務省のこのような行為は完全に政府の基本方針に反すると確信する。カーブル市民の安全に責任を持つカーブル要塞の司令官として副大統領

に以上の通り報告する。現状は憂慮すべき状況である。

報告書を読み上げてアジミ将軍は席についた。沈黙の時間が経過し議場を不安が支配した。討論したい雰囲気ではない。しばらくしてパクティン内務相が立ち上がり周囲を一渡り見渡してから発言した。「そうだ。私がそれをした。私がそれらの人間を警察のセキュリティポストに配置した。その理由をはっきりしている。なぜアジミ将軍は北部の民兵をカーブル空港に配置したんだ？ どうして同じことをしちゃいけないんだ？」アジミ将軍がもう一度立って彼の意見に反論を加えた。「確かにカーブル空港に北部民兵を配備したがこれは政府の公的な方針に合致している。政府はヘクマチヤールのイスラム党を除くムジャヒディングループと和解せよ、と命令した。政府はイスラム党を受け入れていないんだ。このことは君も承知のことじゃないか」パクティンは黙り込んで何も言わなかった。誰もが内務相の執った行動に驚くとともに不満足だった。ハティフが沈黙を破った。私の顔を見て言った。「ムータット！君は長い軍隊経験がある。この件に関して意見を聞かせてくれ。」私は彼に感謝した後、次のように意見を述べた。

私は軍の出身だが軍務にはそんなに長くついていない。今日の会議はわれわれが参加している軍の最高司令官と行う初めての会合だ。いま議論されている内務相の行動は歴史的使命を遂行せねばならない時に痛みをもたらす方法を採用したとしか言いようがない。200万人のカーブル市民は数多くの兵器廠や弾薬庫の事故に常にさらされており、さらにこれまで飢えや寒さやロケット攻撃をいやというほど経験してきた。そしていままた、深刻な受難と絶滅の淵に立たされている。このような野蛮で無責任な行為を何と呼べばいいのだ。時の経つのは速い。この転換点の時期を将来の世代がどう判断するのか、われわれは真剣に心に刻まなければならない。きっとアフガニスタン史の暗黒で不名誉なページとして記録されるに違いない。そしてこの大災害の引き金を引いた連中の名前は記憶されつづけることだろう。私の考えでは、起きた事態は誤りであり、断じて許し難い。パクティンは政府の基本政策を無視した結果が何をもたらすか、知っているはずだ。

私は強い正義感に駆られていた。そしてなぜパクティン氏が意図的に南部の防衛ラインを解放し、あの最も悪名高く野蛮な反乱者どもを市内に引き入れたのか、私には理解できなかった。突然、ワタンジャール国防相が割って入った。「ムータット同志！ われわれ軍人は率直で時にはお互いに批判的になる。しかしそれは不団結を意味するのではない。私は君に約束する。この問題はわれわれ自身で決着する。」私は信じなかった。すでに南部のセキュリティベルトが破られているのにこの問題をどうやって解決できるというのだ。国防相もパクティンと部分的に同じで、会議を早く終わらせたいのだ。結局、何の結論も出せず会議は延期された。私はハティブを見た。すると彼は絶望した顔つきで私に言った。

「ああ、俺はなんて不幸なんだ！ ボスは逃げだし、この連中は内輪もめ」

この日の会議が指導部会議の最後となった。裏切りはかくも深く広く進行し、誰もが混乱を待つしかなかった。

## 39 事件の終幕

すべての人にある疑問が浮かんでくる。なぜ内務相はヘクマチャールと会いにロガール州に行かなかったのか、と。パクティンと内務省役人の大多数は上から下まで南部パシュトゥーン族の出身で多くは祖国党のハルク派に属している。パクティンはこのような役人を前任者のグルブゾイから相続した。内務省は事実上パクティア州出身のハルク派の聖域だった。その高官たちのスタンスは伝統的に反ナジブラだった。タナイ将軍の失敗したクーデタにおいて一定数の冒険主義的な役人がいた。彼らは傲慢で政府の命令に従わなかった。ヘクマチャールのイスラム党と連携する内務省はあたかも「政府の中の政府」の様相を呈していた。

次のことを明記しておくことが重要だ。つまり、この不服従の源は内務省の中にあるのではなくモスクワの政治に起源がある。祖国党のバルチャム派として永い活動歴を持つ副大統領のラフィ将軍はイスラム党との連携を打ち立てた。バルチャム派の人間にとってそのようなことは信じがたいことだった。このような事情があったので、イスラム党軍をカーブル市内に引き入れる本当の動機をカモフラージュするために、ラフィ将軍はロガール州訪問を選択した。ヘクマチャールとの会談でイスラム党軍展開の手伝いを約束した。それは4月23日木曜日に始まり48時間以内に彼らはカーブルの最重要ポイントを支配下に収めた。

パキスタンの政府と軍はカーブルに樹立する政府機構を認めさせるためペシャワルを拠点とするムジャヒディンを助けるのに忙しかった。私は4月24日、アクラミ経由でマスードからメッセージを受け取った。そのメッセージにはふたつのことが書かれていた。

- ペシャワルからの提案ではラバニ教授をアフガニスタン大統領に、首相はイスラム党から選出する。
- わが軍は4月26日日曜日の夜、カーブルに入城する。われわれの友人は安全を確保するため軍事基地内に避難せよ。

このメッセージを受け取った私はすぐに次のように返信した。

われわれは貴方指導部会議の決定にどうこう言う立場ではない。すでに当方の見解は貴方に伝えた。その中でわれわれは国家全体の安全を保つため、ム

ジャヒディン野戦指揮官会議の樹立が望ましいと伝えた。ペシャワルからやってくる指導者たちは、われわれのこの見解に関心を持っていない。ペシャワルの7派は自分たちだけの責務と責任をより重視している。私は、彼らが国民の心理状態を理解するよう望む。

第2点は、4月26日夜の入城では遅すぎる、ということだ。イスラム党はすでにカーブル市内のキーポイントに拠点を築いている。ヘクマチヤールと直接連絡を取って市内への軍隊配備を止めさせなければならない。状況は急速に変化している。貴方の部隊を一刻も早くカーブル市内に投入すべきである。

マスードはこのメッセージを受け取ると布陣を早め、ジュンビシの兵力を空路カーブルに移動させた。ドスタム將軍の三千人のウズベク民兵と同数のマスード軍がそれぞれマザーリシャリフとチャレカールからカーブル空港に到着した。さらにババ・ジャランダール指揮下の三千人のマスード軍が北方からカーブル市に入城した。

4月25日土曜日、私が執務室に着くと突然ハティフが私の部屋に入ってきた。彼は驚愕しているように見えた。カーブル市内でのムジャヒディン同士の交戦をどうしたら防げるか彼には判らなかった。われわれはラフィ將軍を呼んで議論することにした。

ハティフは苛々して受話器をつかみ、ラフィを呼んだ。ラフィはすぐわれわれの所に来た。彼の顔は青ざめ苦悩に満ちていた。彼は私に言った。「ムータット同志！判っているだろうが状況は極めて緊迫している。ムジャヒディンは連中の軍隊を市内に入れたぞ。制御不能になってるんじゃないか？」ラフィ將軍は慌てていて、立ったまま椅子にも座らなかった。そしてわれわれに特別警備要員をつけるつもりだ、と言った。私は彼が話すのを見て、デルコシャ宮殿の夜を思い出した。彼は特別ボディガードをつけてわれわれをイスラム党から守ろうというのだろうか!? ハティフは黙っていた。私はラフィに一応感謝した上でボディガードは要らない、と言った。その代わり、国民の安全と財産を守ってほしい、と要望した。ハティフが付け加えた。「私は高齢だ。殺されても構わない。国民を守れ。」これがラフィ將軍との最後の会談となった。彼は慌てて部屋から出て行った。

大統領官邸は午後1時にはイスラム党の武装集団によって包囲された。すべての役人、従業員はすでに避難して誰もいなかった。私の秘書ハフィジが私とハティフに対して命が危ないから早くここから逃げろと急かせた。私とハティフが門を閉め最後に大統領官邸を出た。イス

ラム党の武装民兵はすでに建物を占拠していた。彼らは暗い色のターバンを巻きちょうど膝までの短いズボンを穿き、ひげ面だった。市内の情景には不似合いだった。実際彼らのほとんどは初めてカーブルに来たのだ。奥深い村々の出身で文明の装いとは無縁なのだ。ハティフと宮殿の外に出た時、運良くわれわれは誰にも見咎められなかった。それはわれわれがふたりだけでボディガードすら随行していなかったからだ。われわれの公用車はそこから数百メートル離れたところで待っていた。私はハティフと別れて車に乗り込んだ。これがハティフを見た最後だった。

カーブルの古いマイクロライオン地区のアパートに帰ると、この地区もイスラム党民兵に包囲されていた。私の住居を守っている10人の兵士たちはナーバスになっており、状況に対してどう対応すればよいのか判っていなかった。彼らをこのままここに置いておくのは私にとっても彼らにとっても良くない。私は彼らに解散してこの地区から出て行けと告げた。彼らは私の安全を心配したが、構うな、と言った。部屋に入ろうとしたら外から騒ぎ声が聞こえた。見ると武装した5人の男が私のドライバーの頭に銃を突きつけて車の鍵を寄せと脅していた。運転手はそれに抵抗していたが、私は鍵を渡してやれ、と5階の窓から叫んだ。彼が鍵を渡すと男たちは車を奪って走り去った。

全体としてこの地区はまだ静かだった。まだ戦闘の兆しはなかった。私の妹はすでに部屋に来ていて、私を心配していた。私はパコール帽を被り身支度をカジュアルな民族服に着替えた。部屋を出ようとするするとアパートの隣の建屋にミサイルが命中した。コンクリート壁で囲われた浴室に妹を押し込んだ。カーブル郊外から発射されたBM-12ミサイルが12発、近辺に着弾した。そのうちの1発が私のアパートの屋根を直撃した。幸いわれわれは無傷だった。射撃が止み、静かになった。午後4時になっていた。私は妹と運転手、ボディガードの親戚の4人でアパートを出た。民族服の普段着装束に身を隠していたのでイスラム党民兵に疑われることなく脱出に成功した。この日二度目のイスラム党グループからの逃避行だった。

戦闘は徐々に始まった。私は包囲された地区内の別の建屋に住む友人のジョン・モハムマドのアパートを隠れ家にした。イスラム党民兵はすでに重機関銃を5階の屋根に据え付けていた。彼らはそこから市民に対して無差別銃撃を行った。そのため私は建物から離れられなかった。マスードはメッセージを送ってきてここを出てカー



ブルの北部に展開するババ・ジャン将軍の分遣隊に合流しろと言ってきた。その夜道路は閉鎖され移動は困難だった。ババ・ジャン将軍は私に電話してきてアフアクという名の指揮官を送るから彼と一緒にこちらに来いと言った。その言葉の通りアフアクがやって来て、われわれは彼に連れられて外に出た。彼はわれわれを公共省の建物に連れて来た。その建物のホールにはすでに何人かの人びとが閉じ込められていた。この建物はマスードのイスラム協会の要塞と化しており、数百メートル先、われわれがやって来た方向にはイスラム党軍が陣取っていた。戦闘の影響が建物内部にまで及び、ガラスが破れ、内部にいるセキュリティガードのひとりが肩に被弾した。彼は地下に移動させられ、われわれもそれに従った。建物が戦闘の標的になったので、われわれはジョンのアパートに戻り、そこで夜を越すことにした。アフアクに礼を言い、われわれは建物の外に出た。外は真っ暗だった。誰もわれわれに気づかなかった。われわれがジョンのアパートについた時、イスラム党の民兵はまだ屋上を占拠していた。彼らは建物の中で生活している人間のことなど眼中になく、戦闘に没頭していた。内部のチェックどころではなかった。彼らのほとんどはカンダハルかヘルマンド州から来た民兵で永いターバンを頭に巻き短いズボンを着ていた。われわれは銃弾を避けてアパートの廊下で夜を過ごした。戦闘は翌朝までつづいた。銃撃音から注意をそらすためわれわれは時々チェスで時間を潰した。

翌朝 11 時頃、ジョンと私はアパートを出て前線を越えた。ボディガードを何人も連れて歩くのは目立つので彼らとはそこで別れた。われわれは一般市民を装った。われわれがいたアパートも戦闘の標的にされ、幾つかの建物が火に包まれた。戦闘が始まると空には花火のように銃弾が舞った。女や子供たちが大声を挙げて逃げ惑っていた。

そのうちわれわれはマスード軍の幾人かに助けられてカーブル要塞にたどり着けた。カーブル要塞は政府軍司令官とマスード軍司令官との合同司令部になっていた。私はここでアジミ将軍、デラワル将軍、オルミ将軍、アブドゥル・ラーマン博士、マスードの代理人、ナジブラー・モジャディディ博士、その他に会った。彼らは彼らが確保している地点からイスラム党軍を排除する目的で互いの活動を調整していた。次にわれわれはこの要塞を離れて、カーブル市北部に向かった。そこには私の親戚が住んでいる。市内には敵意や復讐心が渦巻いていたのでしばらくそこに身を隠すことにした。ムジャヒディ

ン各派の陣取り合戦は4月25日までつづいた。

- **イスラム党軍の占拠地**：大統領官邸、外務省、国家保安省、内務省、マランジャン高地、ビビ・メール高地、シェルダルワザ山頂、カーブル12地区のすべて、第52通信分遣隊
- **マスード軍およびドスタム将軍側の占拠地**：カーブル空港、ラジオ・テレビ局、カーブル要塞、ミクロライオン3号地
- **親イラン・シーア派ワーダット占拠地**：カーブル大学、西部地区の若干の政府施設

内務省の手引きで市内の重要拠点をイスラム党軍が早々と占拠していたのは明かであった。実際、市内に侵入したイスラム党民兵を最新兵器で武装させたのは内務省だった。

政府側とムジャヒディン側の連合軍はイスラム党軍に対する戦闘をアジミ将軍、デラルワル将軍、アブドゥル・ラーマン博士、ワーダット党代表らの共同指揮の下、カーブル要塞から始めた。一方、内務省はラフィ将軍、パクティン内務相およびイスラム党代表らに率いられた敵対グループの司令所に変貌した。

マスードは自分の臨時司令部をチャレカールに置いていた。彼はペシャワルにいるムジャヒディン指導者らと緊密な連絡を取りながら、カーブルでの戦闘をそこから指揮していた。4月25日の夜、マスード軍はババ・ジャン将軍が率いる政府軍の第40陸軍師団と合同した。イスラム協会に属するアンワル・ダンガル司令官は第22連隊と合同し共同戦線に加わった。イスラム協会のアンワル・ジェグダレクに指揮されたその他のムジャヒディン軍は東部からカーブルに入った。さまざまな分派に属する多くのムジャヒディンググループはそれぞれの方面からカーブルに入った。残念なことには大量の略奪者、泥棒、ルンペンなどがムジャヒディンのふりをして市内に侵入したことだ。完璧なカオスがしばらくカーブル市内を支配した。

戦闘は48時間続いた。マスード司令官とドスタム将軍の共同軍事作戦により、イスラム党軍は市内の重要拠点から排除された。4月28日時点でイスラム党が支配するのは内務省とカーブル市東部に布陣する第52通信連隊のみとなった。

## 40 権力の移行

パキスタン軍部とペシャワルを拠点とするムジャヒディン指導部はカーブルでの権力移行方式について最終合意に達した。その方式によればセブガトゥラー・モジャディディが2カ月間国を代表し、その後ブルハヌディン・ラバニが4カ月間代表する。首相の座はイスラム党に、国防相にはマスードが就任する。ふたつの会議、すなわちひとつはパキスタンに拠点を置くムジャヒディン7派の指導者からなる指導者会議、もうひとつは50人の代表からなるムジャヒディン会議を設ける。イランを拠点とするムジャヒディンはこれらのどの会議にも参加させない、というものであった。

様々な努力がなされたにもかかわらず、ムジャヒディンググループは彼らの指導部を尊重せず、市内で戦闘をつづけた。戦闘を継続する一部のものたちの目的は略奪だった。彼らの行動はムジャヒディンの信用を失墜させた。

私はムジャヒディンイスラム政府への「正式な権力移行」を示す儀式を執り行う必要があると考えた。その儀式の役割は次の通り。

- カーブル住民を混乱状態とパニック状態から救う。彼らに進行中の事態を正しく伝え、ムジャヒディン政府の樹立により権力の空白が埋まることをマスメディアを通じて伝える。
- 権力が移管されることを国際社会に明らかにしアフガニスタン国民の能力を示す。
- 公式儀式を執行し国際社会における新政権の認知を進め、新政権としての第一歩の最重要責務を遂行する。

私はワキル外相に電話して儀式挙行の必要性について私の考えを述べた。併せて新しい国家元首となるモジャディディの到着スケジュールをアレンジするよう頼んだ。彼は私の考えに賛成し、外務省のレセプションホールをその儀式のために準備すると約束した。彼によれば新国家元首のカーブル到着は4月29日午後4時とのことだった。私は権力移行儀式の準備をするため当日4月29日の朝8時に親戚の家を出た。市内に出る途中、アラウィ郵便通信相をピックアップした。彼は残りの政府役人たちに連絡を取れる唯一の人間だった。街の通りは緊張し埃っぽく、人混みで混雑していた。車は首相官邸に到着した。邸内に入ると誰も仕事をしていなかった。な

にもかも破壊され略奪されていた。かつての美しい庭園が廃墟となっているのを見、過去の栄華を思い出して胸が痛んだ。輝かしい日々は去り、暗く不確実な未来が予感された。シャダン裁判長とアラウィに連れられて首相執務室に向かった。首相執務室は19世紀に立てられた2階建ての建物である。建物は空っぽで廊下も暗かった。すべてが略奪され美しいアフガン絨毯もはぎ取られていた。何十年も誰も手を触れたことのなかった壁の絵画は額縁を壊され引きちぎられていた。首相執務室はロケットが命中し粉々に砕け散っていた。建物全体が廃墟と化していた。無責任で野蛮な略奪者たちの行為はショックであり信じられなかった。彼らがやったことは自分たちの家、文化、財産を破壊する行為なのだ。しばらく私は考え込んでしまった。恐らく私はこの国の本質を本当には理解していないのだ。イスラムの聖戦（ムジャヒッド）と強盗、殺人、強姦、略奪とは明確に区別しなければならない。

まだ、市内のあちこちで銃撃や砲撃の音が聞こえていた。内務省は首相官邸から500メートルほどの所にある。ちょうどこの時、内務省はマスード・ドスタム連合軍に包囲されていた。パクティン、ワタンジャール、ラフィ将軍は余儀なく内務省から逃れて支持者とともにいずこかに潜伏した。内務省攻撃を担当した部隊の指揮官は全面攻撃を避け、省内に残るイスラム党とハルク派連合軍に武器を置いて降伏しろと最後通告を突きつけた。第52通信連隊やその他のイスラム党の拠点はババ・ジャランダー指揮下の第4戦車連隊に包囲された。

イスラム党・ハルク派連合軍は最後通告を無視して内務省に立て籠もり、抵抗をつづけた。われわれは一室で難を避けていたがひっきりなしに銃弾が飛んできた。アラウィは心配し、なぜここへ来て命を危険にさらさなければならないのかと悔いていた。1時間半後に戦闘は終わった。もう銃撃音はしなくなった。われわれは建物を出て複合庭園の中にあるグルハナ（花の館）に向かった。この建物は大理石の壁で囲まれた1階建てである。そこにはたくさんの人間が椅子の上に横たわっていた。暗い顔つき、長髪、ひげ面の異様な風体でカラシニコフライフル銃を手にした男たちだった。彼らに近づくとその中の背の高い男が近づいてきて、自分がアンワル・ダンガルだと言った。ダンガルとはパシュトゥ語で「スリム」という意味だ。彼の左足は右足よりいくらか短く、顔も目も丸く頭には汚いターバンを巻いていた。

「ここで何をしている」と彼が聞いた。

「君たちの指導者モジャディディに権力を渡す準備をし

に来たんだ」と私は答えた。モジャディディの名前を聞くと彼は口汚い言葉でぶつぶつと文句をつぶやいた。

「それは君たちの問題だ。君たちムジャヒディンが彼をイスラム国家の象徴に選んだんだ。君たちの選択だよ」と私が言うと、

「いや、俺たちはヤツのことなど知らない」と彼は答えた。

私は話を変えて、首相官邸の車、絨毯、その他の財産はどうなった、と聞いた。

「われわれが来る前にイスラム党軍がここにいた。連中がすべてを破壊し略奪した。われわれが連中をここから追い出した」とアンワルは言い、私に何をすればいいのか、と聞いた。私は彼に、二組の人員を貸してくれと頼んだ。われわれとともに、前指導者を連れて来て今日の午後開かれる公式の権力移行式典に出席させるのだ、と。彼は同意した。

私はハティフに電話をし、私の考えを説明した。彼はそれは正しい方向への第一歩だと私の考えを称賛した。そして彼を包囲しているイスラム党の元から自由になればその式典に参加する、と約束した。私はムジャヒディングループを乗せた車を向かわせた。そこで一戦を交えたけれど彼を連れ出すことはできなかった。私がもう一度彼に電話すると、彼は自分の置かれている環境を詫言いで、彼の不在のまま式典を挙げてくれと言った。そこで私は、マハムード上院議長、ハリル・アーマド・アバウイ国会議長、ハレクィヤール首相およびその他の高官たちを呼び寄せた。彼らは彼らなりに懸念を持っていた。技術的理由で出席できない高官も一定数存在した。

私は同僚たちを集めて午後3時ころ演説をした。私は彼らに権力移行式典は歴史的なイベントであり、わが国の歴史そのものとなる。式典を挙げるのはわれわれの歴史的責務であり、国民的な必須の課題を遂行する文明的なやり方である、と述べた。私はさらにわれわれの兄弟を誠実に迎え入れ、わが国の再建のために協力しなければならない、と指摘した。そして、ソラビ博士に式典の開会を告げる演説を大統領に代わってやってくれ、と頼んだ。つづいてハレクィヤール、アバウイ、ハビビそしてシャダンが政府、国会、上院、司法の名の下にそれぞれ演説することを決めた。さらに私は、新政権を歓迎すること、平和のために支援協力すること、国の安全と繁栄の諸点を心に刻んで演説してくれ、と頼んだ。彼らは皆、同意した。

その日は気温は温暖だったが雨が降った。私は外務省に向かった。多数のジャーナリストが建物を取り囲み、

去りゆくはずの旧政権高官たちが出席するのを驚きの目で見ていた。私はレセプションホールの中で外国の外交官や山のようなジャーナリストたちの群れとともに開幕を待った。突然、敷地内に大勢の人びとがなだれ込んできた。ホールに駆け寄る人びとを外務省の職員らが整理した。

新しい国家元首モジャディディが中央に席を取った。その後、副大統領、首相、両院スポークスマンらがモジャディディの両脇に座った。まずソラビ博士が登壇し、打合せ通り、歓迎演説を行った。彼は教授、理論家、アフガン国民の尊敬を集める指導者としてモジャディディを称賛し、イスラム国家としてのアフガニスタンの建国は平和、安定、進歩をこの国にもたらさだろうとの希望を述べた。その他の高官たちも同様の趣旨で演説を行った。最後にモジャディディが立ち、感情を込め、演説した。アラビア語を交える時もあった。彼の演説は英語に同時通訳された。彼はデンマークのモスクで説教したこともあり、経験豊かで影響力のある人物だ。彼は、戦闘がまだつづいているが、われわれはすべて兄弟である。したがってわれわれは許し合い、共にアフガニスタンの新しいページを開かなければならない、団結して、国を再建しよう、と述べた。さらに彼は前政権の高官や公務員に円滑な権力移行を実現したことに感謝し、引きつづき国の統一と繁栄のために貢献してくれと要請した。式典は午後5時に終わった。

会場を引き払う時、BBCの記者がやって来て質問した。「ムータットさん、あなたはまだ副大統領ですか？」私は笑ってノーと答えた。

「あなたは裁判を恐れていませんか？」

「恐れていない。私は過去、やましいことは何もしていない。すべてについて釈明できる。私はこれまで国と国民の利益に反するようなことは何もしていない。」  
記者は私に礼をし、去って行った。外務省を出る時、内務省に陣取る裏切り者たちとの軍事衝突が再発した。それは約1時間つづき、60人ほどの犠牲者を出し、多数が捕虜になった。イスラム党とハルク派の巣窟は一掃された。

## 41 マスードへのアドバイス

権力移行式典を終えた後も私はカーブル北部地区の親戚の家に行った。4月29日の夕刻、マスードが大軍を引き連れてカーブルに凱旋してきた。彼は忙殺されていたが、5月4日に以前の国家保安省で私と会いたいと言ってきた。オフィスはカーブル中心地にある2階建てで要塞化されていた。会見にはアクラミも同席した。

われわれは机を挟んで座った。お互いにリラックスしていた。マスードは「私は20年もの長い間、カーブルから離れていた。政府内に知り合いはいない。新しい状況に慣れるのに時間がかかる」と言った後、イスラム教国の将来について私の考えを聞いた。そのような質問をしてくれたことに感謝した後、次のように述べた。

私はイスラム教国としてのアフガニスタンにアドバイスする立場にはない。多くの困難な課題があなたを待ち受けている。今の第一の課題は国民の安全を守ることだろう。市内には武装グループがうようよしており、強盗、盗み、殺人が横行している。私はイスラム教国がこの問題にどう取り組むのか知らないが、国民はあなたとあなたの勢力に大きな期待を抱いている。あなたは公共の事案を取り扱う十分な経験を持っている。しかし敢えて言わせてもらえば、重要な政策ガイドラインだと思われる次の点について心に留めておいてほしい。

1. あなたは14年に及ぶ超大国との英雄的な闘いによって、わが国民および国際社会から良い評判を勝ち得ている。いまやソ連はなく、あなたは国民と共にいる。戦闘をつづける理由はもはやない。すでに述べたようにあなたとあなたの軍の指揮官たちはアフガニスタン国民の期待を集めている。あなたも知っているように政治と軍事は異なる分野だ。優れた政治家が素晴らしい軍事指導者になれるとは限らない。逆もまた真だ。心理面と方法論においてふたつの分野はそれぞれ異なる。成功した司令官として軍事手法を政治の心理面、論理面で使ってはいけない。そうしないとあなたは社会的信用を自分自身で崩すことになる。この面では極めて慎重に振る舞うべきだ。もしあなたがこれからアフガニスタンの政治に関わろうとするなら、あなた自身のナショナルチームを動員すべきだ。軍の指揮

官だけでは国民的利益を実現することは困難だ。  
前大統領のナジブラの失敗の原因がこれだった。

2. アフガニスタンイスラム教国はカーブル市民に特別の注意を払う必要がある。カーブルは行政、政治、文化、通商の中心である。教師、医師、技師、芸術家等々の知識人が生活のあらゆる分野で活発に活動している。もし彼らに新しい狂信的な基準を押しつけようとする社会に取り返しのつかない損失を与えかねない。いずれにせよ、知識層との間に誤解が生じないように努めるべきである。
3. 国連憲章およびその他の国際規範の遵守と尊重をイスラム教国の外交政策の基本に据えるべきである。国連はアフガニスタンをさまざまな分野で支援してくれる。国連や国際社会の支援なしにアフガニスタンの再建は考えられない。
4. もしイスラム教国が女性の運命を暗黒の時代に逆転させるとしたら、それは不幸である。アフガニスタンの女性は40年以上も彼女らの権利のために闘ってきた。女性問題は民主主義とイスラムの価値を理解して解決すべきである。女性の権利を尊重すべきである。
5. 民主主義の原則を守るということは、社会、政治の領域で国民がその権利を享受できる、という意味である。誰もが他人を傷つけない範囲で自由を満喫できるべきだ。国民の声を聞け。あなたとあなた方ムジャヒディンは14年間あなた方の個人的利益ではなく、国の大義のために闘ってきた。国民自身に彼らの運命を決めさせるべきだ。彼らは決して間違わない。彼らが自分たちの基本的権利が奪われると感じたら反発してくる。過去このようなことが起こったように、将来も同じようなことが起こるだろう。
6. アフガニスタンは多くのエスニックグループである民族、部族から構成されている。すべてのエスニックグループは自分たちのアイデンティティに敏感だ。過去、国民はアフガニスタンの現実を配慮する政府を歓迎してきた。あなた方はアフガニスタン問題を解決しようとする時、本当の国民的チームを作って取り組むべきだ。



あなたは自分自身で獲得した名声をうまく使えば、将来はさらに成功するだろう。

7. パキスタンに拠点を置くムジャヒディン組織7派からなる現在のムジャヒディン指導部会議はアフガニスタンに決して平和と繁栄をもたらすことはできないだろう。7派のうちどの派も独自の軍隊を持ちパキスタンやその他の外国の支援を受けている。これらの国はそれぞれの国の利害を反映しているので、彼らを通じてアフガニスタンを分裂させる要因が持ち込まれる。あなた方はムジャヒディン指導部会議の影響を取り除き、国の統一に注力すべきだ。一度ばらばらになると統一は難しい。もしそうなればパキスタンが利益を独り占めするだろう。

マスードとの面談は午後11時までつづいた。マスードはその時点での自分の限界を理解していた。しかし私の見解を有益だとみなし、今後の仕事に役立てると約束した。私は国を去り、家族の元に行くと言った。しかし彼は同意しなかった。彼は他の分野の問題でも私のアドバイスが必要だと言った。しかし私には前副大統領として自分自身の考えがあり、カーブルのように複雑に絡み合った関係の中に私の居場所はなかった。マスードと会った後、影響力あるウズベク族やトゥルクメン族の人びと何人かと彼らに請われて面談をした。彼らはマスードとドスタム将軍の関係が強化される状況を前にして、いくつかの提案をしようとしていた。

イスラム党軍は市内から完全に駆逐された。そして私は10日ぶりに自分のアパートに戻った。午前10時、ドアを開けた瞬間、建物の近くにミサイルが撃ち込まれた。建物全体が激しい衝撃を受け、ガラスが割れ、棚が崩れ落ちた。

<完>